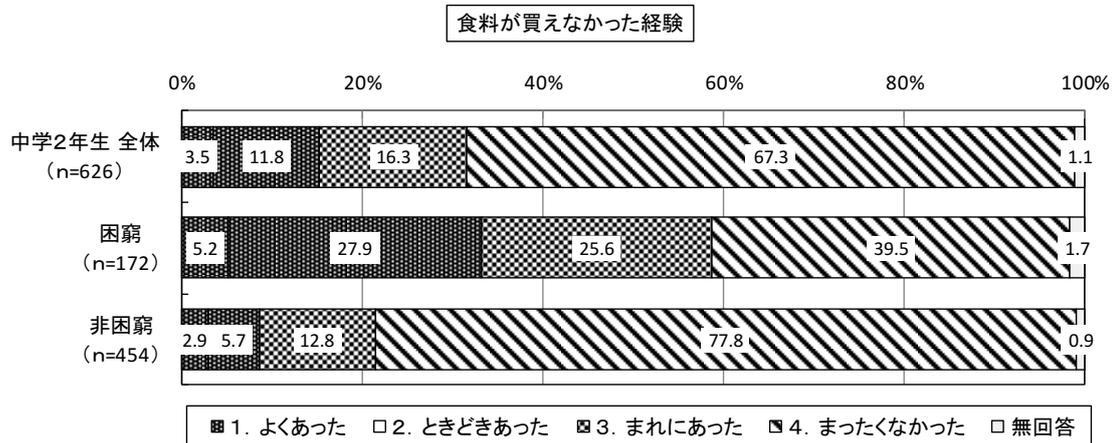
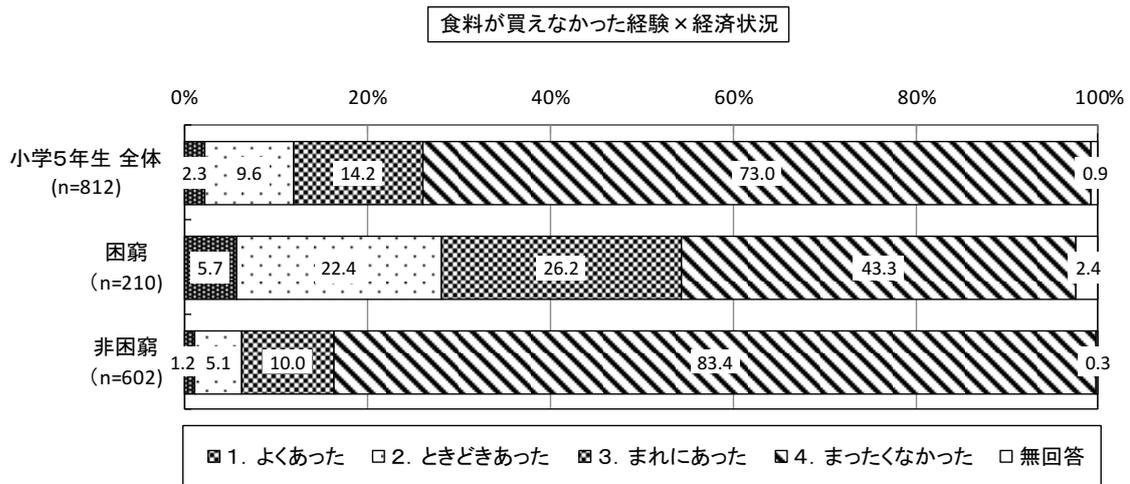


### ⑬ 困窮経験

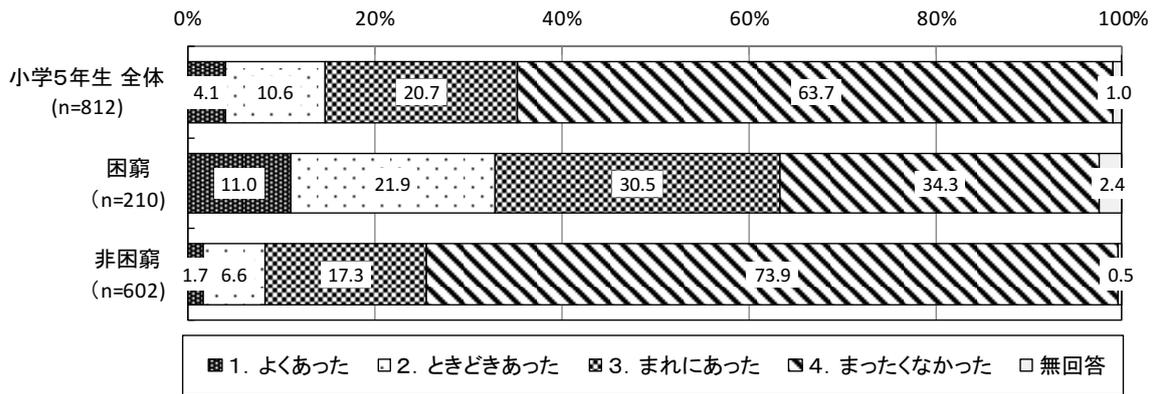
○食料や衣料を買えなかった経験（保護者） <小5保護者：問22、中2保護者：問22>

生活上の困窮に関し、過去1年間に経済的な理由で家族が必要とする食料や衣料（嗜好品は含まない）が買えなかった経験を尋ねたところ、“食料が買えなかった経験”が『あった』という回答は2～3割程度、“衣料が買えなかった経験”が『あった』については3～4割程度となっている。

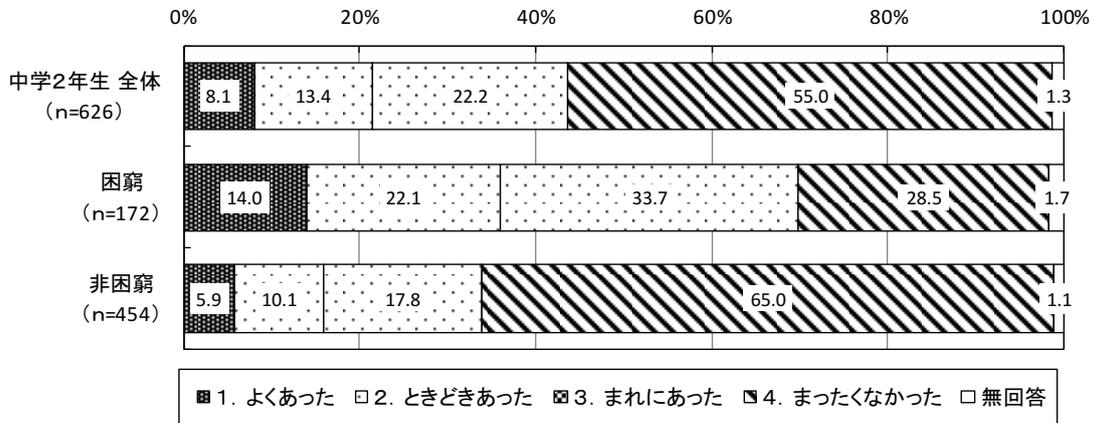
経済状況別にみると、困窮世帯では“食料が買えなかった経験”、“衣料が買えなかった経験”ともに割合が高くなっている。特に、生活・生存の基礎である衣食を買えなかった経験がどの学年でも半数以上であるなど、困窮世帯の生活がかなり厳しい状況であることがうかがえる。



衣料が買えなかった経験×経済状況別



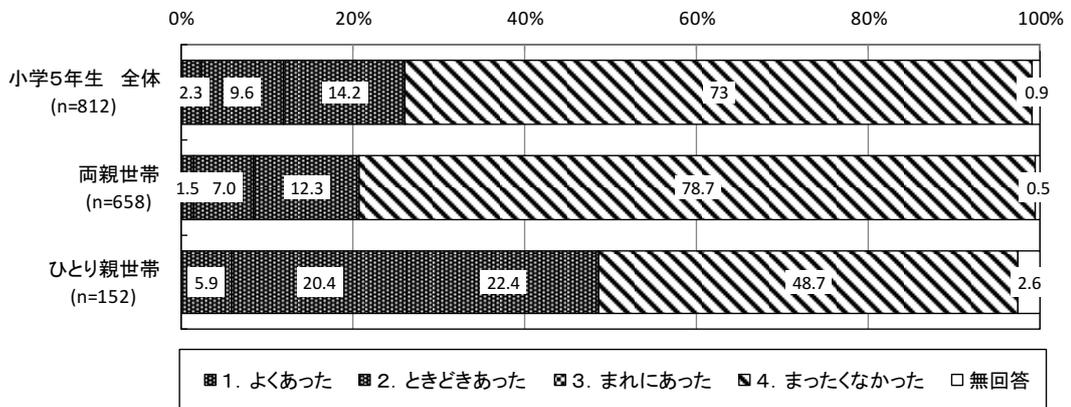
衣料が買えなかった経験×経済状況別



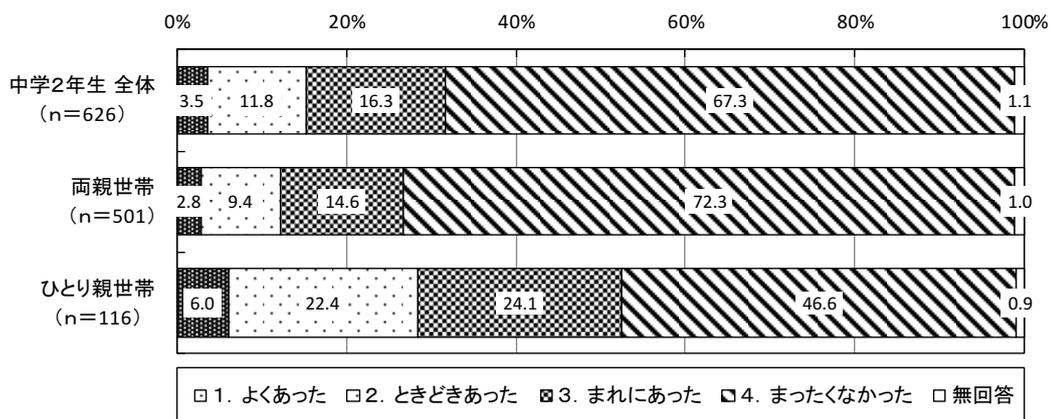
○食料や衣料を買えなかった経験：家族類型別（保護者） <小5保護者：問22、中2保護者：問22>

食料や衣料が買えなかった経験を家族類型別にみると、ひとり親家庭で『あった』という回答の割合が高く、両親世帯に比べて厳しい状況にある。

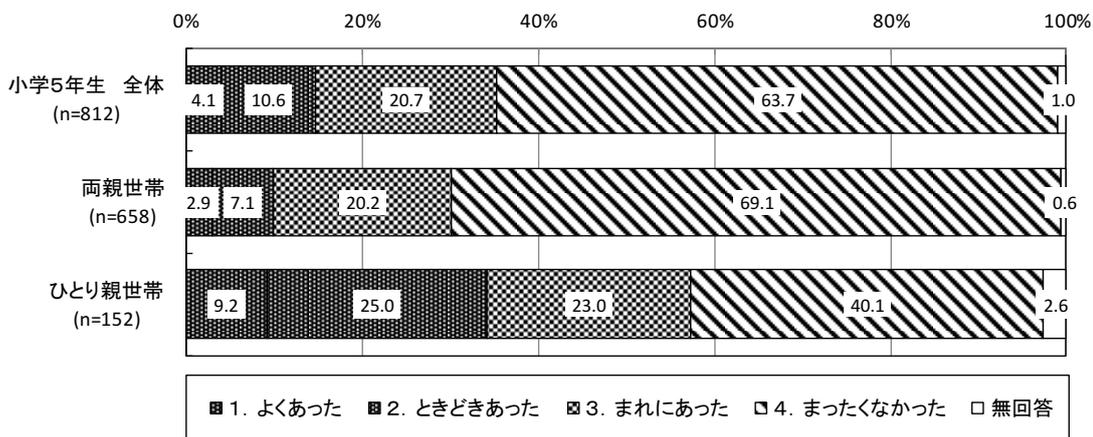
食料が買えなかった経験×世帯構成別



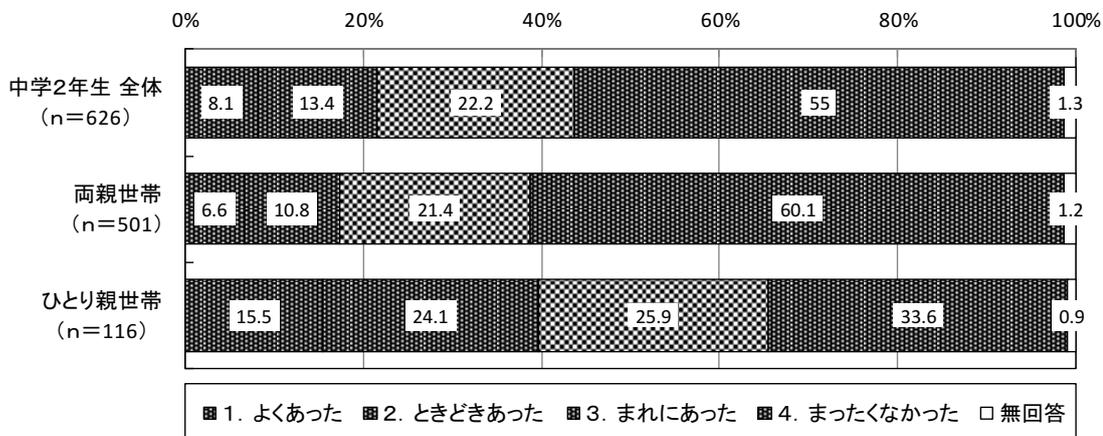
食料が買えなかった経験×世帯構成別



衣料が買えなかった経験×世帯構成別



衣料が買えなかった経験×世帯構成別



## ⑭電気代などの滞納経験

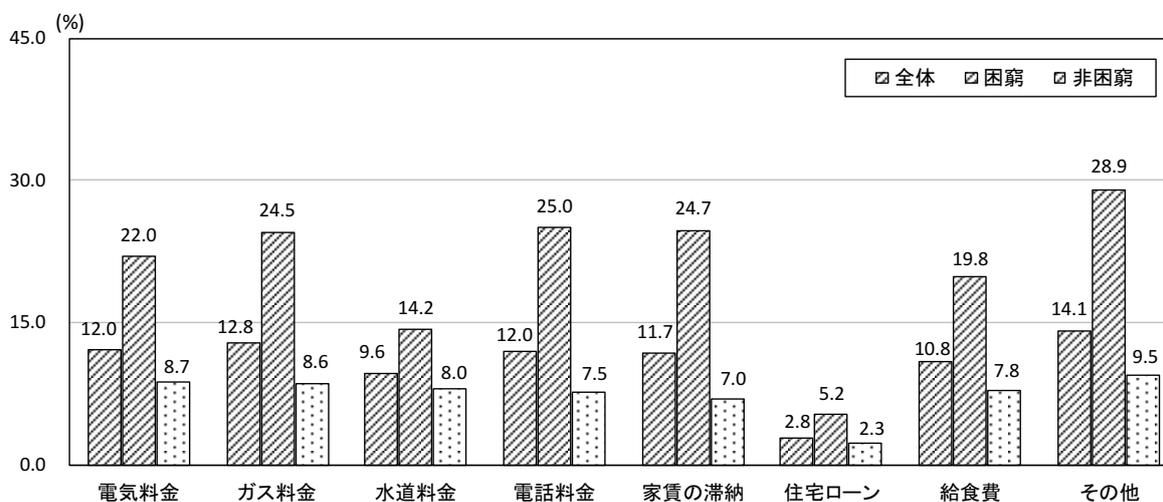
○過去1年の滞納経験の有無（保護者） <小5保護者：問23、中2保護者：問23>

過去1年間に、経済的な理由で電気、ガス、水道料金等の未払いや、家賃等の滞納、債務の返済ができなかった経験を尋ねたところ、全体では「その他の債務不履行」、「ガス料金の未払い」、「電気料金の未払い」、「電話料金の未払い」、「給食費の滞納」などで滞納経験が多い状況にある。

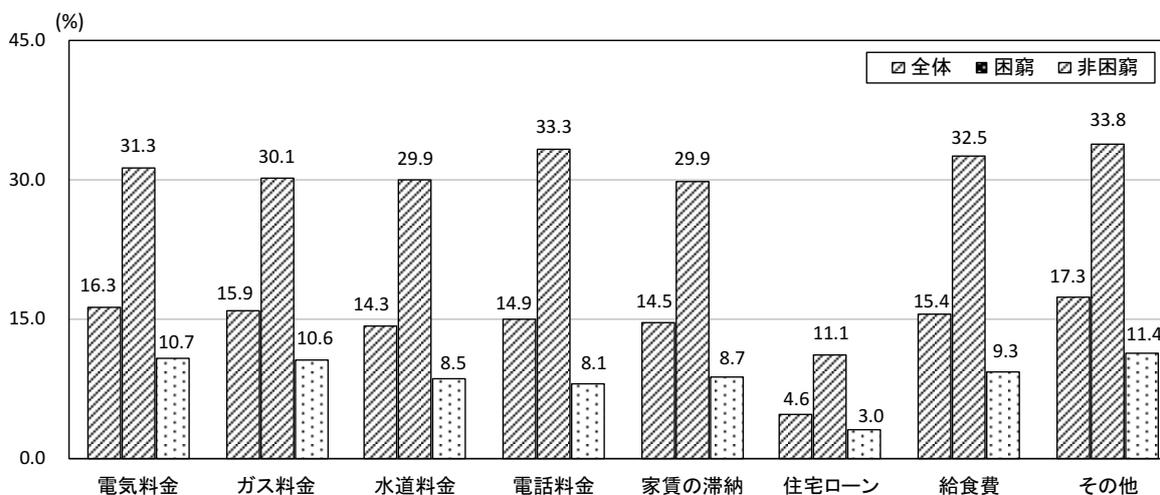
経済状況別で滞納経験をみると、困窮世帯では全ての項目で非困窮世帯の倍以上となっており、経済状況により大きな差がみられる結果となっている。困窮世帯ではごく日常的に滞納状況があることがうかがえ、厳しい状況となっている。

なお、世帯類型別にみると、「ひとり親世帯」については「両親世帯」に比べて厳しい状況がうかがえる結果となっている。

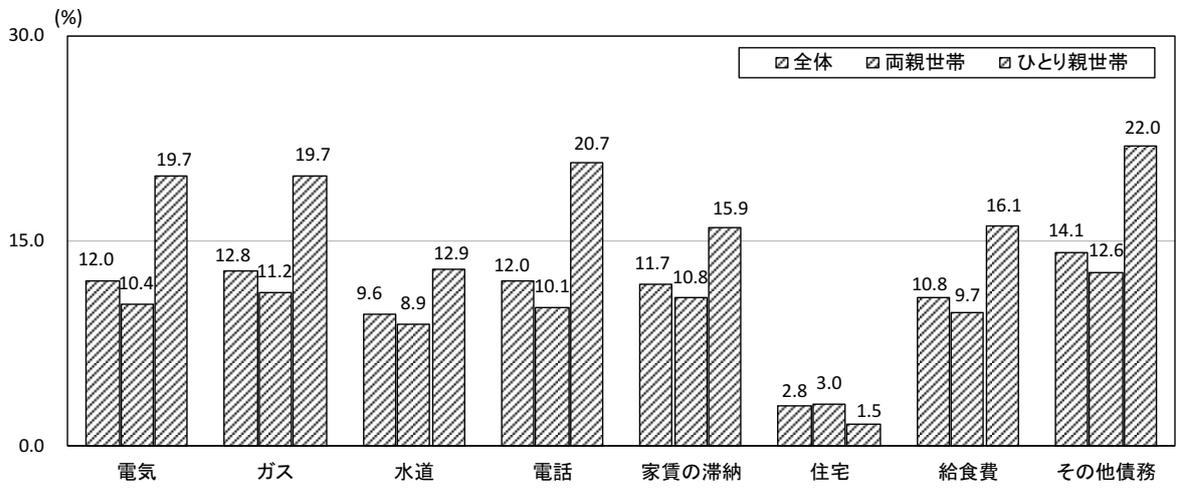
過去1年の間に料金の滞納経験があった世帯の割合(小学5年生)



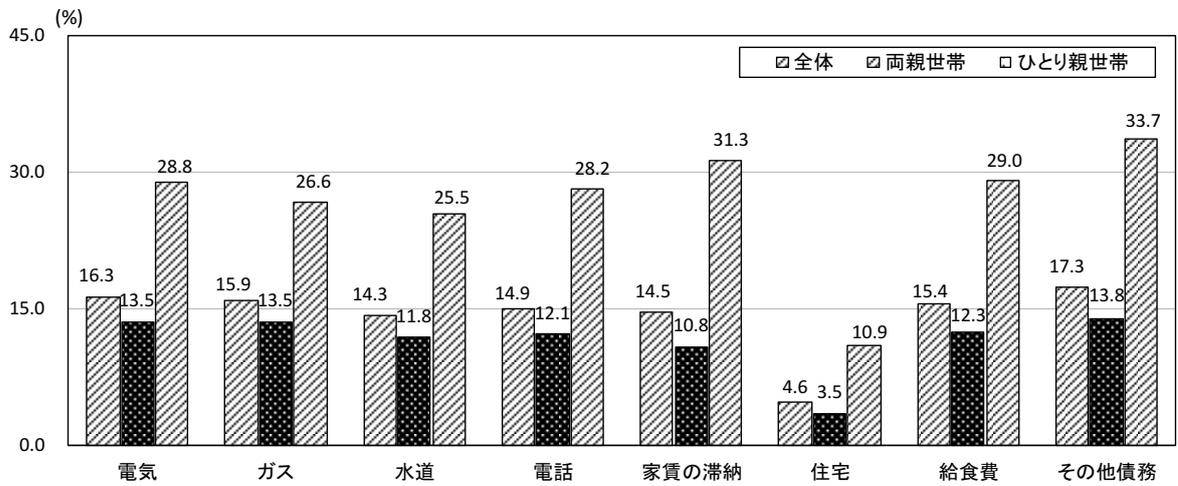
過去1年の間に料金の滞納経験があった世帯の割合(中学2年生)



過去1年の間に料金の滞納経験があった世帯の割合(小学5年生)

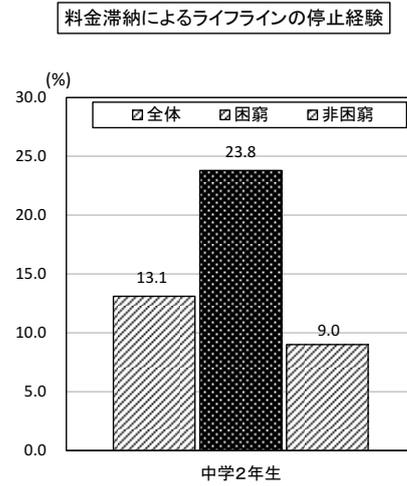
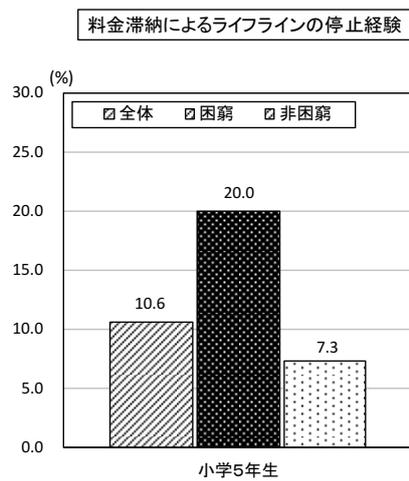


過去1年の間に料金の滞納経験があった世帯の割合(中学2年生)



○電気、ガス、水道を止められた経験の有無（保護者） <小5保護者：問24、中2保護者：問24>

過去10年間のライフラインの停止経験を尋ねたところ、各学年ともに全体では「あった」が1割程度となっている。また、経済状況別にみると、困窮世帯では2割程度がライフライン停止の経験があるという結果になっている。



⑮社会的ネットワーク

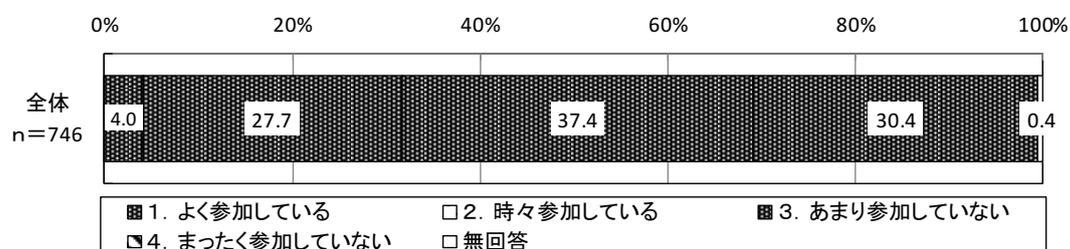
○地域行事への参加状況、悩みを相談できる友人・知人、地域住民間の協力関係（保護者）

<小1保護者：問38、小5保護者：問32、中2保護者：問32>

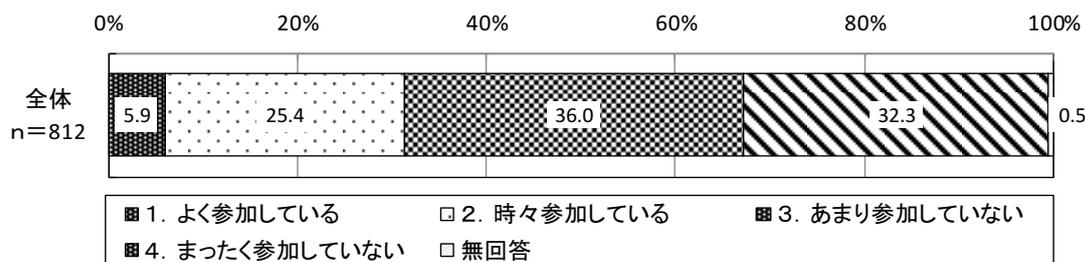
沖縄県調査結果と比較するため、「地域の行事に参加していますか。」（沖縄県調査では、「地域の行事にお子さんと一緒に参加していますか。」）、「子育てや教育についての悩みを相談したり頼ったりできる友人・知人はいますか。」、「生活上の困難を解決するために、地域の人々はお互いに協力するべきであると思いますか。」の3つの項目について分析を行った。

各項目の肯定的な回答の割合へ注目すると、各学年の保護者とも全ての項目において、沖縄県調査結果よりも下回っており、本市においては社会的ネットワークがやや希薄な状況がうかがえる。

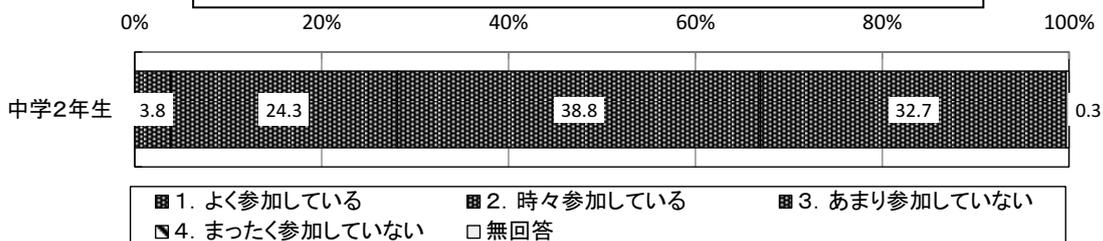
地域の行事に参加していますか(小学1年生の保護者)



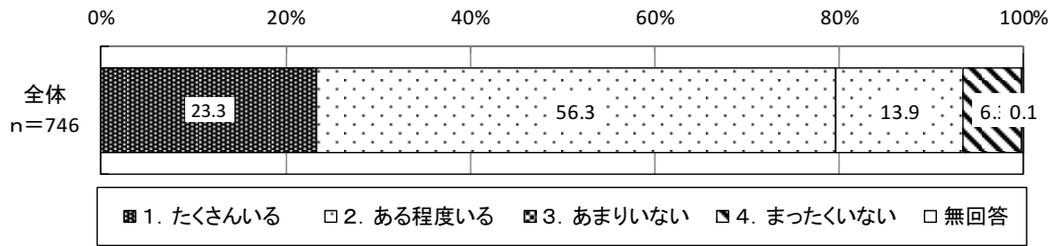
地域の行事に参加していますか(小学5年生の保護者)



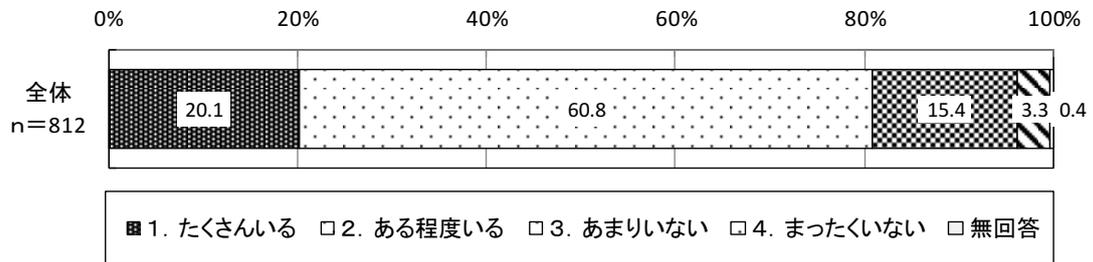
地域の行事に参加していますか(中学2年生の保護者)



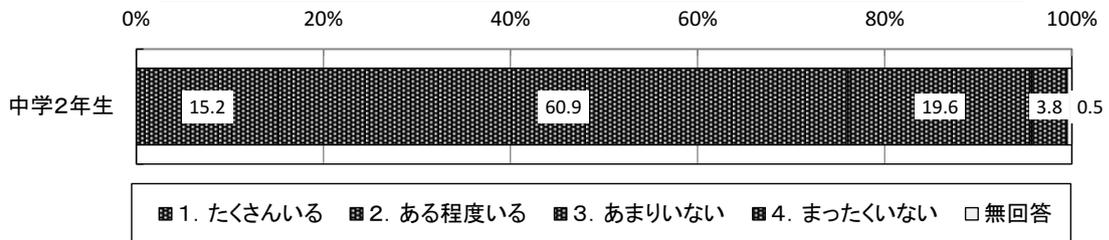
子育てや教育について悩みを相談できる友人・知人はいますか(小学1年生の保護者)



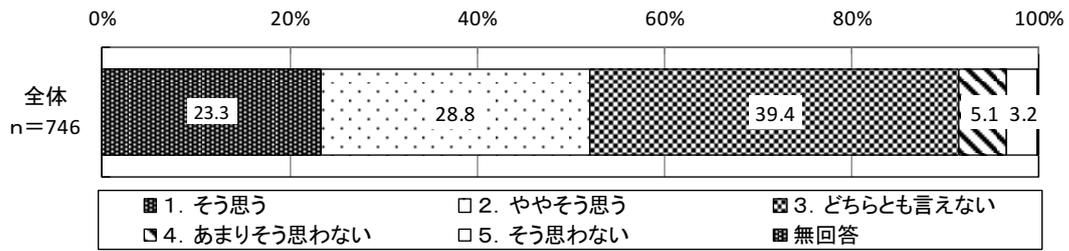
子育てや教育について悩みを相談できる友人・知人はいますか(小学5年生の保護者)



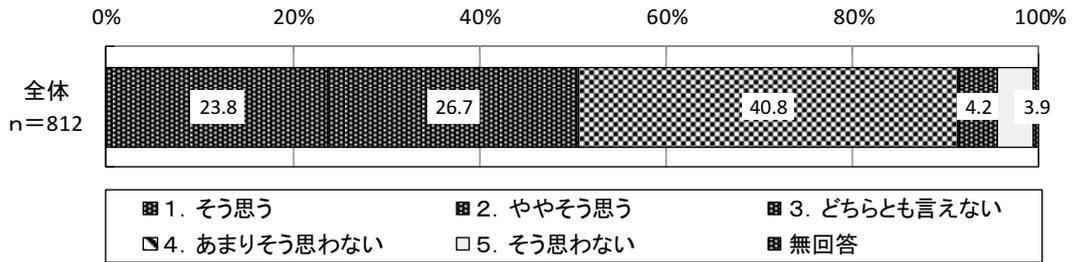
子育てや教育について悩みを相談できる友人・知人はいますか(中学2年生の保護者)



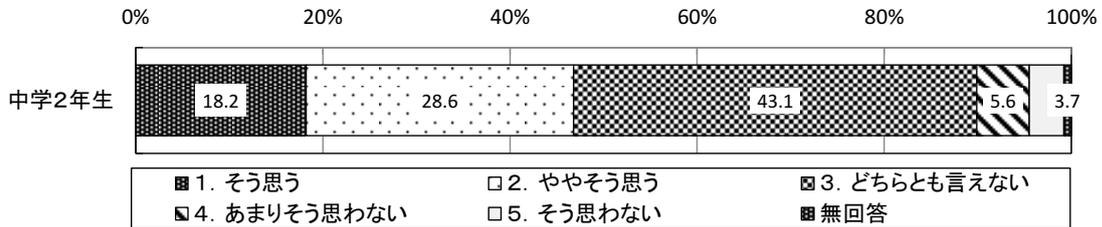
生活上の困難を解決するために地域の人々は協力すべきである(小学1年生の保護者)



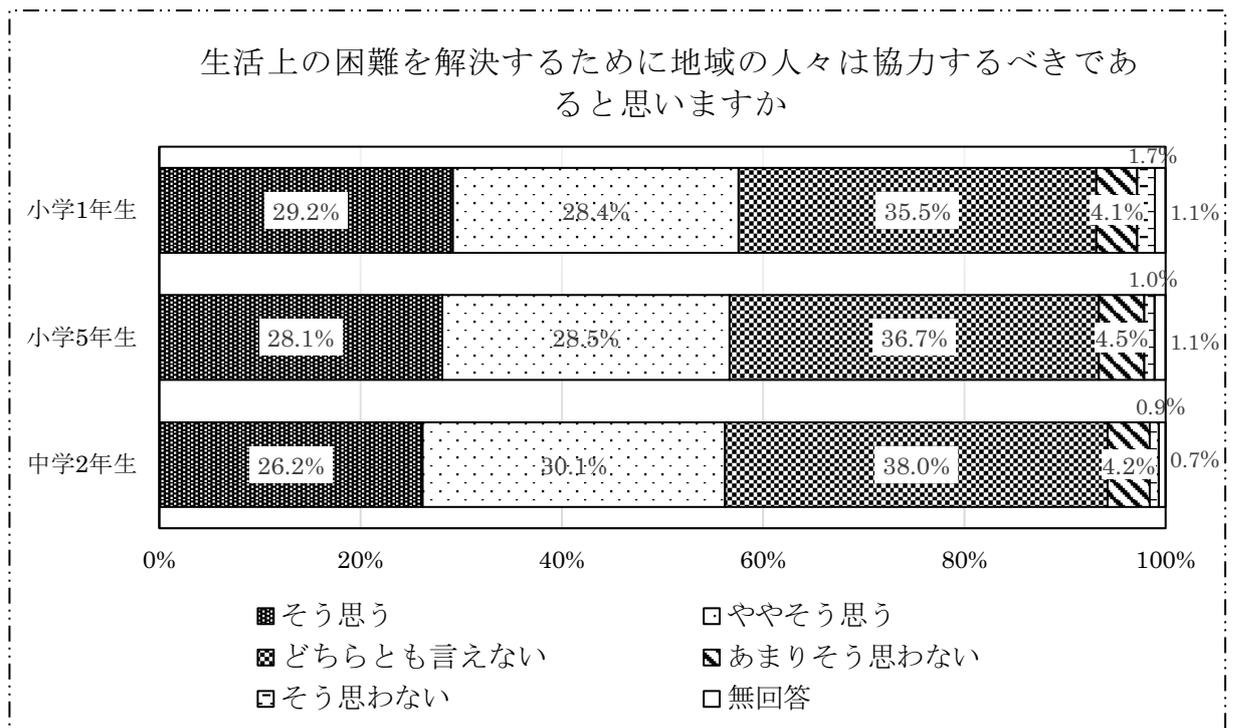
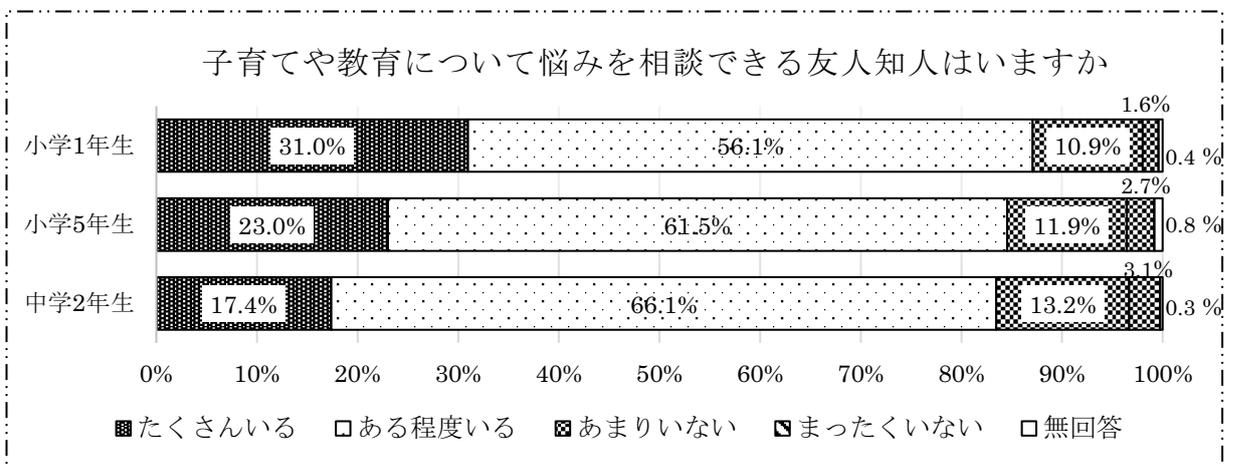
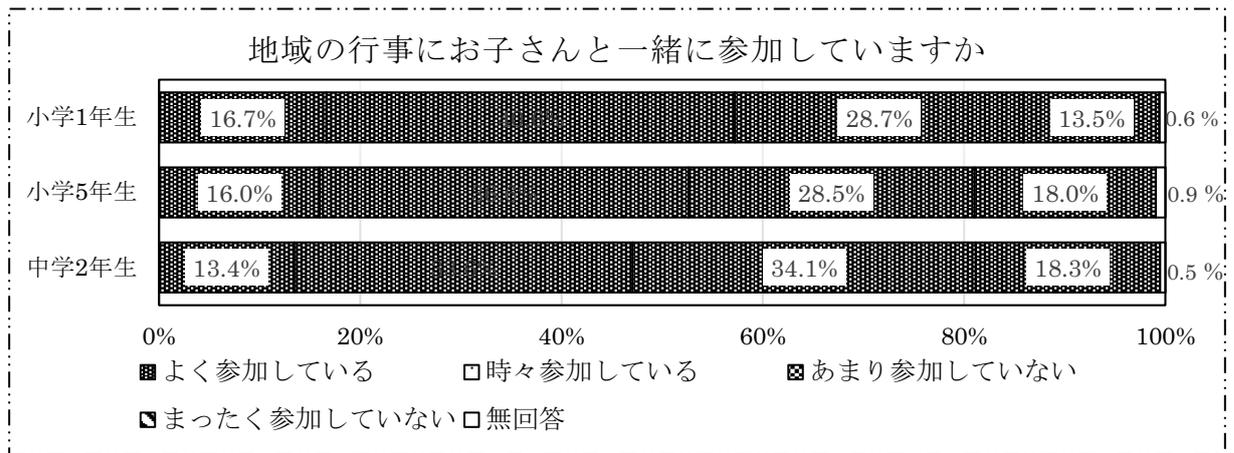
生活上の困難を解決するために地域の人々は協力するべきであると(小学5年生の保護者)



生活上の困難を解決するために地域の人々は協力するべきであると(中学2年生の保護者)



■参考：県調査結果（平成 27 年沖縄県子ども調査結果概要）



○社会的ネットワーク／経済状況別（保護者） <小1保護者：問38、小5保護者：問32、中2保護者：問32>

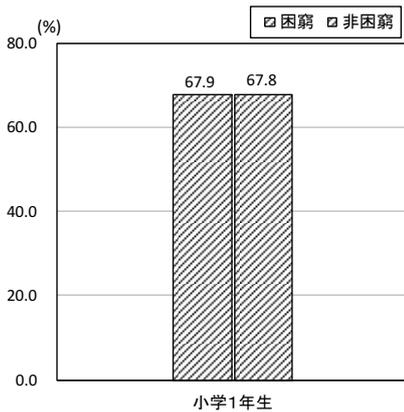
沖縄県調査結果と同様に、前述の3項目について次のように経済状況別に集計を行った。

※「地域の行事に参加していますか」、「D. 子育てや教育についての悩みを相談したり頼ったりできる友人・知人はいますか。」という項目については、否定的な回答（あまりしていない・全くしていない）の合計について比較。

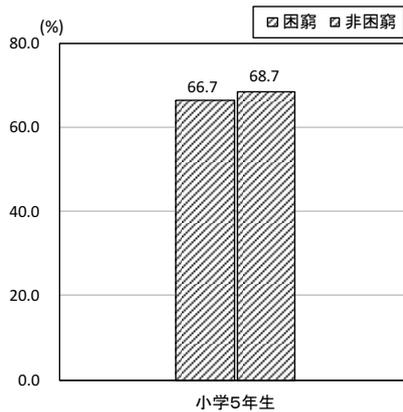
※「生活上の困難を解決するために、地域の人々はお互いに協力するべきであると思いますか。」については否定的な回答が少ないため、肯定的な回答（そう思う・ややそう思う）について比較。

結果、県調査結果ほど経済状況別の極端な差はみられなかった。なお、“地域行事への不参加”や“地域の人々の協力に対する積極的な考え方”に関しては、学年により傾向がまちまちであったが、“相談できる友人・知人がいない状況”については、何れの学年も困窮世帯の方が、割合が高く、身近に相談できる親しい人がおらず、一人で相談事を抱え込んでいる状況が懸念される。

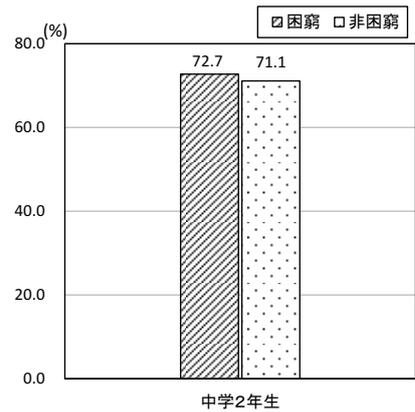
地域行事への参加：「あまり参加していない」「まったく参加していない」の割合



地域行事への参加：「あまり参加していない」「まったく参加していない」の割合

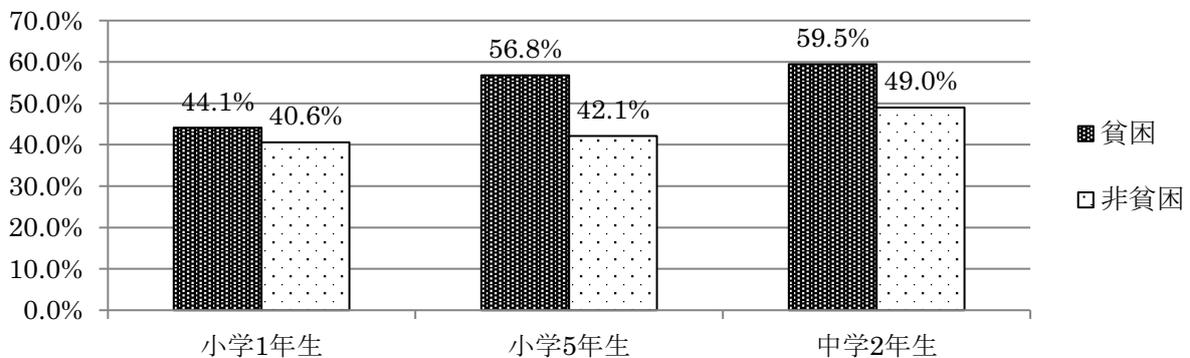


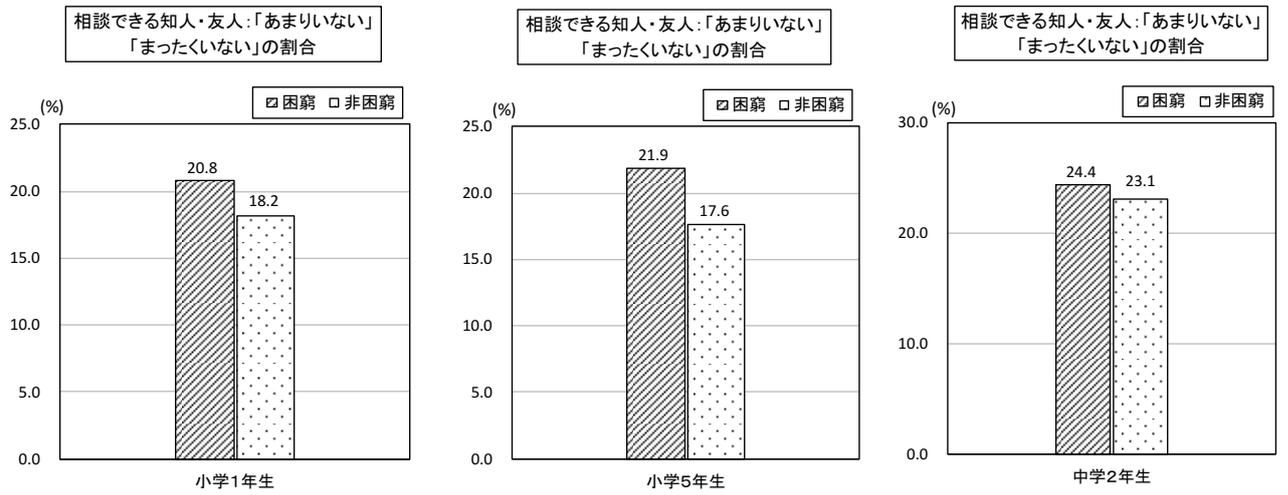
地域行事への参加：「あまり参加していない」「まったく参加していない」の割合



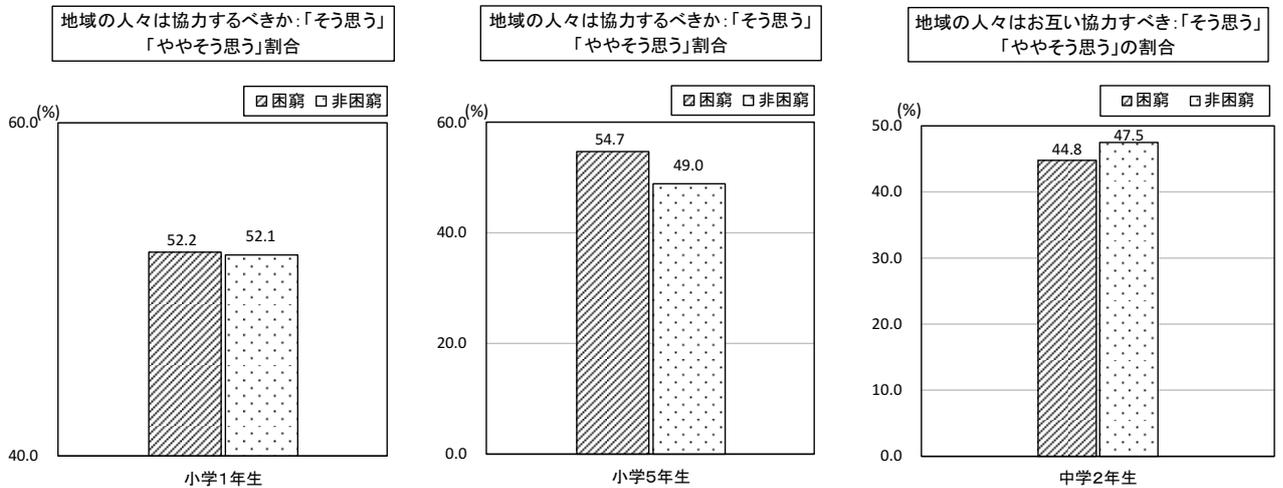
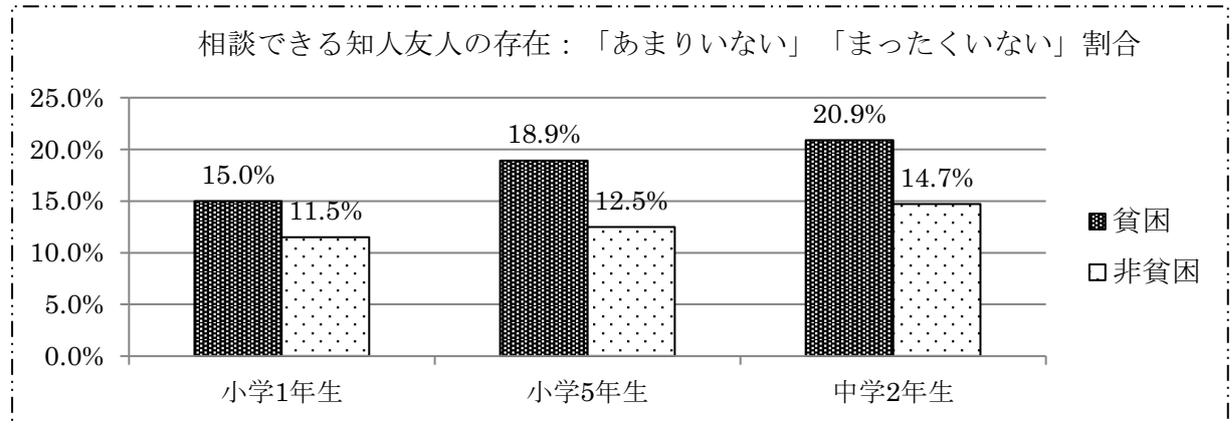
■参考：県調査結果（平成27年沖縄県子ども調査結果概要）

地域行事への参加：「あまり参加していない」「まったく参加していない」割合

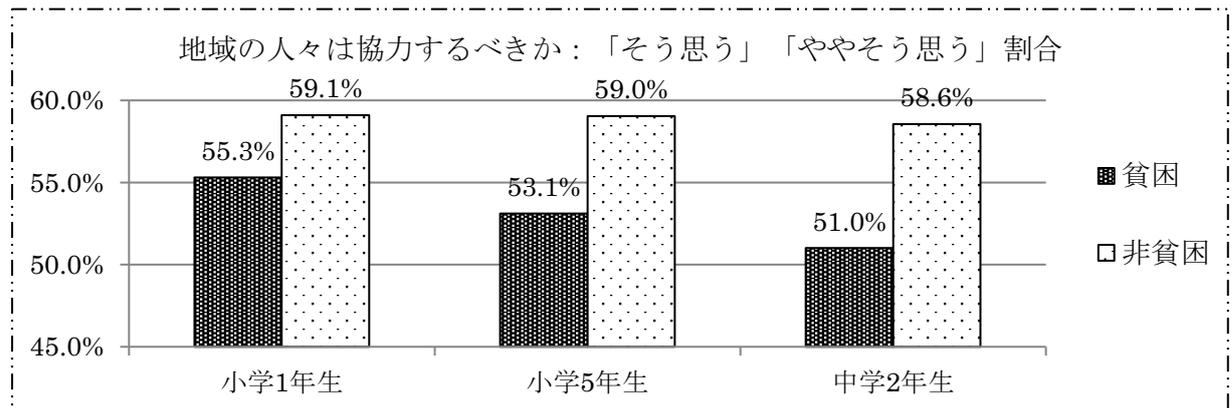




■参考：県調査結果（平成27年沖縄県子ども調査結果概要）



■参考：県調査結果（平成27年沖縄県子ども調査結果概要）



⑩子ども期の経済状況と現在の困窮経験

○子ども期の経済状況（保護者） <小1保護者：問37、小5保護者：問31、中2保護者：問31>

保護者自身の15歳時点での主観的な生活感を尋ねたところ、何れの学年の保護者も「普通」が4割程度を占め最も割合が高いが、『苦しかった』と回答した保護者も3～4割程みられる。県調査との比較では、大きな差はみられなかった。

保護者の15歳時の生活状況

	小学1年生		小学5年生		中学2年生	
	件数	%	件数	%	件数	%
1. 大変苦しい	93	12.5	109	13.6	93	15.1
2. やや苦しい	189	25.3	190	23.7	139	22.6
3. 普通	328	44.0	341	42.5	268	43.5
4. ややゆとりがある	102	13.7	122	15.2	87	14.1
5. 大変ゆとりがある	31	4.2	36	4.5	26	4.2
無回答	3	0.4	5	0.6	3	0.5
合計	746	100.0	803	100.0	616	100.0

※回答者が父母の場合のみに限定し、祖父母等が回答者の場合は除いている。

■参考：県調査結果（平成27年沖縄県子ども調査結果概要）

図表⑩-1 保護者の15歳時の生活状況

	小学1年生の保護者		小学5年生の保護者		中学2年生の保護者	
	n	%	n	%	n	%
大変苦しい	115	9.6%	143	12.3%	142	12.3%
やや苦しい	261	21.8%	300	25.7%	295	25.7%
普通	540	45.2%	487	41.7%	494	43.0%
ややゆとりがある	205	17.1%	178	15.3%	154	13.4%
大変ゆとりがある	64	5.4%	43	3.7%	53	4.6%
無回答	11	0.9%	16	1.4%	12	1.0%
合計	1196	100.0%	1167	100.0%	1150	100.0%

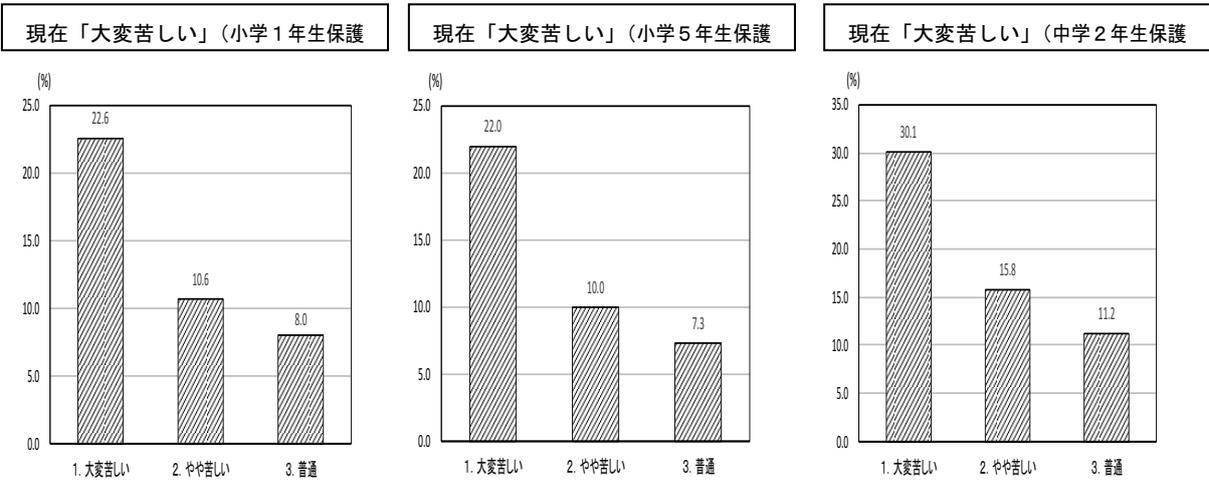
回答者が父母の場合のみに限定し、祖父母等が回答者の場合は除いている。

○15歳時と現在の生活状況（保護者） <小1保護者：問37×問26、小5保護者：問31×問20、中2保護者：問31×問20>

15歳時の生活状況が「大変苦しい」「やや苦しい」「普通」であった保護者について、現在の生活状況が「大変苦しい」と感じている世帯をクロスしてみると、15歳時の生活状況が「普通」であった保護者に比べ、15歳時に「大変苦しい」「やや苦しい」状況であった保護者では、現在の生活状況を「大変苦しい」と感じている割合が高いことが分かり、アンケート結果からも貧困の連鎖がうかがえる状況にある。

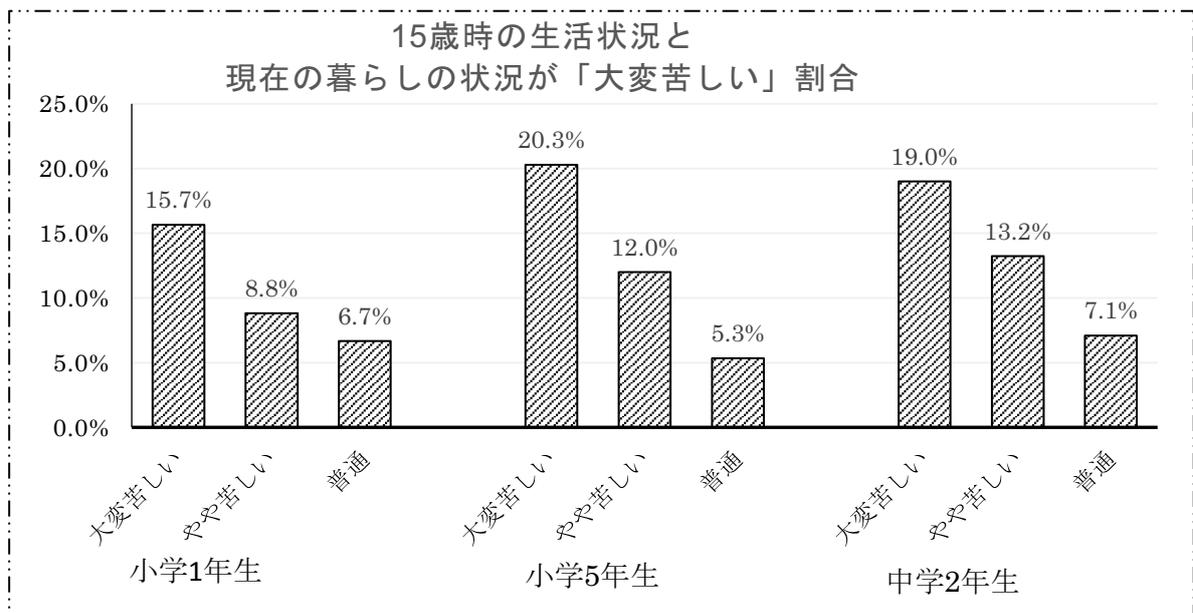
15歳時に「大変苦しい」状況であった保護者で、現在の生活状況を「大変苦しい」と感じている者の割合について県調査と比較してみると、本市の割合の方が高い状況にある。

15歳時の生活状況と現在の暮らしの状況が「大変苦しい」割合



※回答者が父母の場合のみに限定し、祖父母等が回答者の場合は除いている。

■参考：県調査結果（平成27年沖縄県子ども調査結果概要）

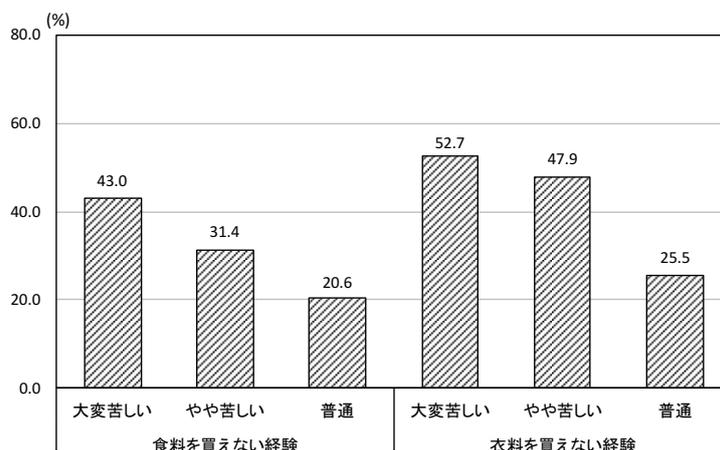


## ○15歳時の経済状況と現在の困窮経験（保護者）

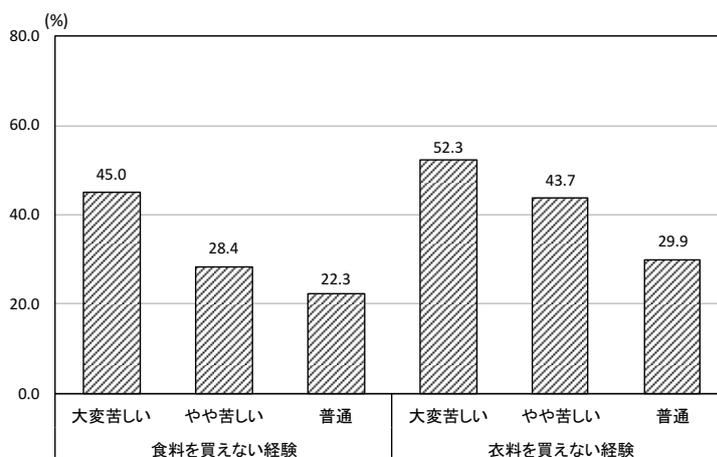
<小5保護者：問37×問28、<小5保護者：問31×問22、中2保護者：問31×問22>

15歳時の生活状況が「大変苦しい」「やや苦しい」「普通」であった保護者について、現在の暮らしにおいて過去1年間に食料・衣料が買えなかった経験がある世帯をクロスしてみると、前問同様、15歳時に「大変苦しい」「2. やや苦しい」状況であった保護者では、衣料や食料が買えなかった経験がある割合が高くなっている。

15歳時の生活状況と現在の困窮経験(小学1年生)

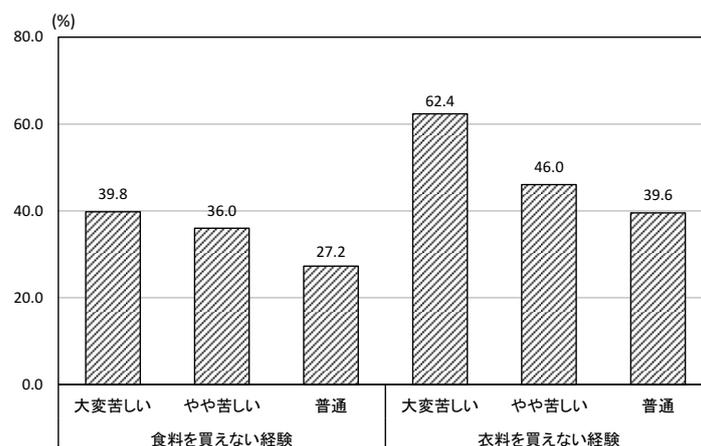


15歳時の生活状況と現在の困窮経験(小学5年生)



※回答者が父母の場合のみに限定し、祖父母等が回答者の場合は除いている。

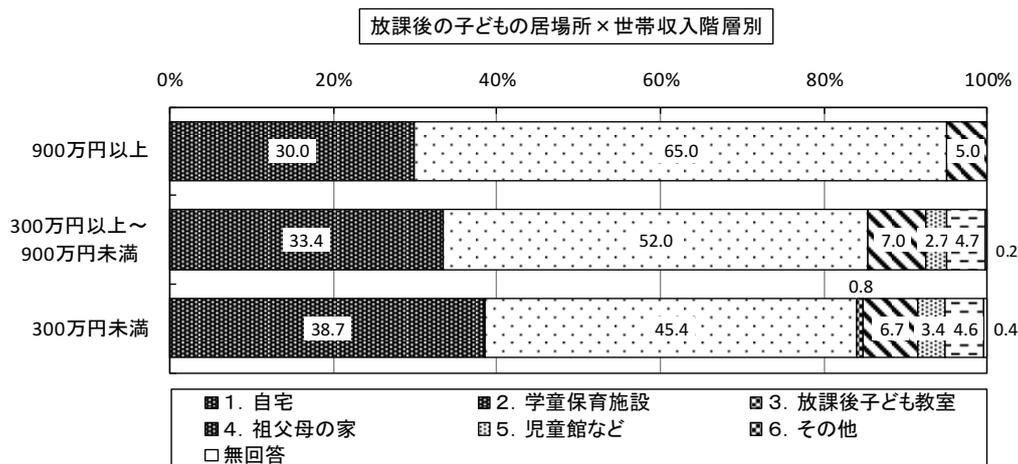
15歳時の生活状況と現在の困窮経験(中学2年生)



⑰放課後の子どもの居場所について

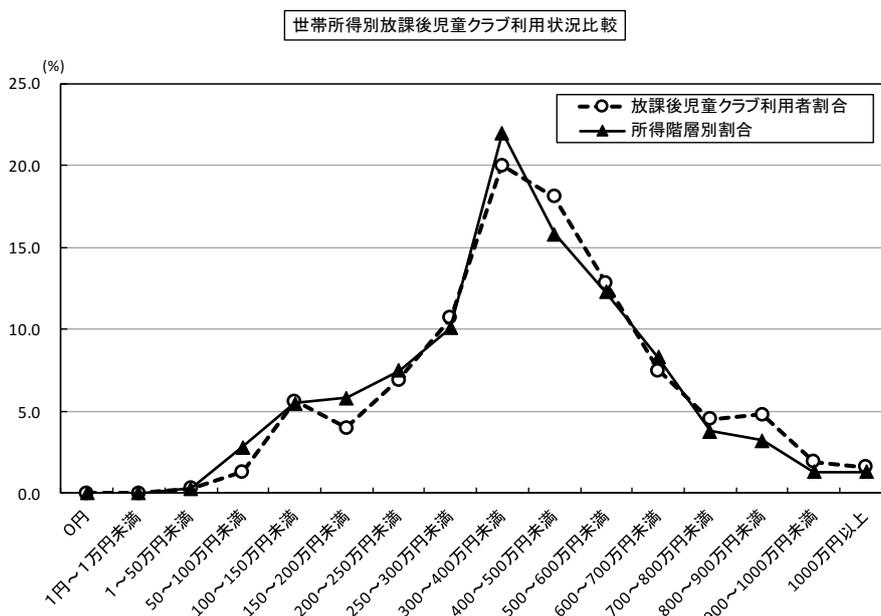
○所得階層別・放課後の居場所（保護者） <小1保護者：問45×問12>

世帯収入階層別に自宅と学童保育施設（放課後児童クラブ）の利用率をみると、年収300万円未満世帯では自宅の利用率よりも放課後児童クラブの利用率が僅かに上回っている程度であるが、年収が高くなるほど放課後児童クラブの利用率が高くなる傾向にあり、年収900万円以上になると自宅に比べて放課後児童クラブの利用率が倍以上となる。両親がフルタイム・共働き世帯が増加することが要因と推察される。



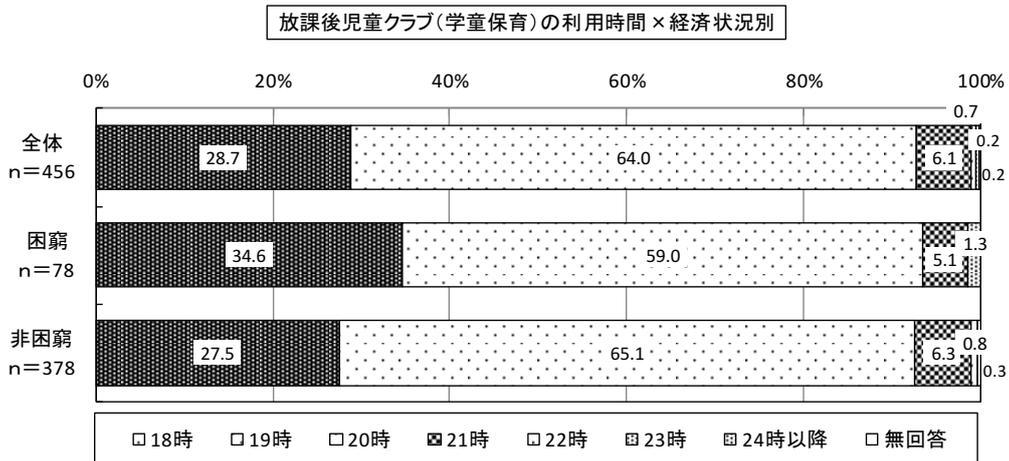
○所得階層別・放課後児童クラブの利用割合（保護者） <小1保護者：問45×問12>

小学1年生の家庭における世帯所得分布と放課後児童クラブ利用状況の分布を比較すると、400万円未満世帯までは、所得分布に比べて放課後児童クラブの利用率が低い傾向にあり、400万円以上の世帯年収では、放課後児童クラブの利用率が所得分布よりも高くなる傾向が見受けられる。



○放課後児童クラブを何時まで利用したいか（保護者） <小1保護者：問13>

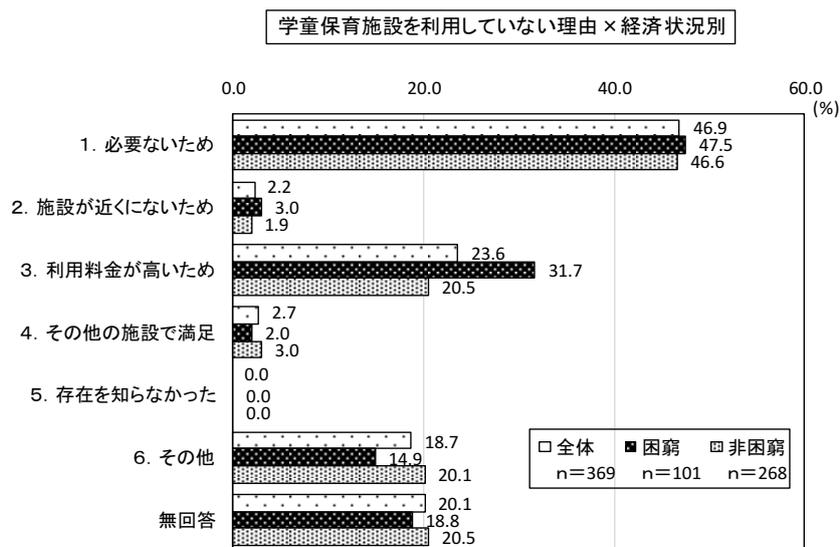
放課後児童クラブを利用している方もしくは利用予定のある小学校1年生の保護者に対し、放課後児童クラブを何時まで利用したいかを尋ねたところ、「19時まで」が6割弱で最も多く、以下「18時まで」、「20時まで」と続いている。なお、ごく僅かではあるが、「21時まで」や「22時まで」とする回答も見受けられた。



○放課後児童クラブを利用していない理由（保護者） <小1保護者：問12-2>

放課後児童クラブを利用していない小学校1年生の保護者に対し、放課後児童クラブを利用していない理由を尋ねたところ、「必要ないため」が5割弱で最も多く、次いで「料金が高いため」となっている。

経済状況別にみると、困窮世帯では「料金が高いため」の割合が高い傾向が見受けられる。



⑩自分の名前を書けるかどうか

○入学時にひらがなで名前が書けたか・7月時点ではどうか（保護者） <小1保護者：問6>

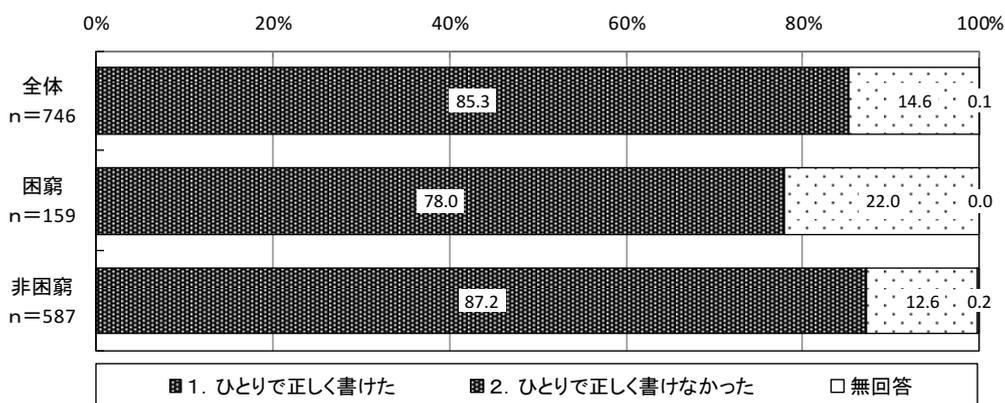
小学校就学時に自分の名前がひらがなで書けたかどうかを尋ねたところ、9割弱が「ひとりで正しく書けた」としているが、「ひとりで正しく書けなかった」も1割強みられた。

世帯の経済状況別にみると、困窮世帯では「ひとりで正しく書けなかった」という割合が非困窮世帯に比べて9.4ポイント高い状況にある。

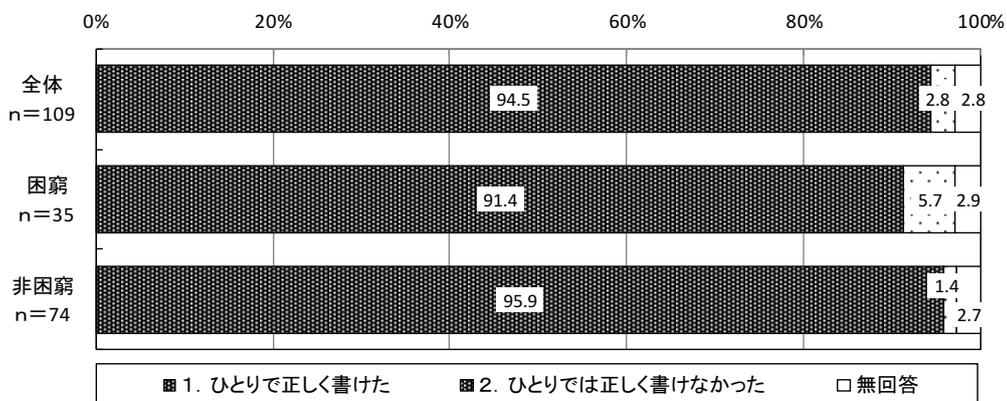
7月現在の状況を尋ねたところ、9割強が「ひとりで正しく書けた」としており「ひとりで正しく書けなかった」については2.8%とごく僅かな状況にある。

なお、この調査項目では、発達面での状況等を考慮していないことに留意が必要となる。

入学時、ひらがなで名前が書けたか×経済状況別



現在、ひらがなで名前が書けるか×経済状況別



### (3) 高校2年生調査結果の概要

#### お子さんの通学について

##### ①通学手段について

##### ○登下校時の交通手段（保護者） <高2保護者：問9(1)・(2)>

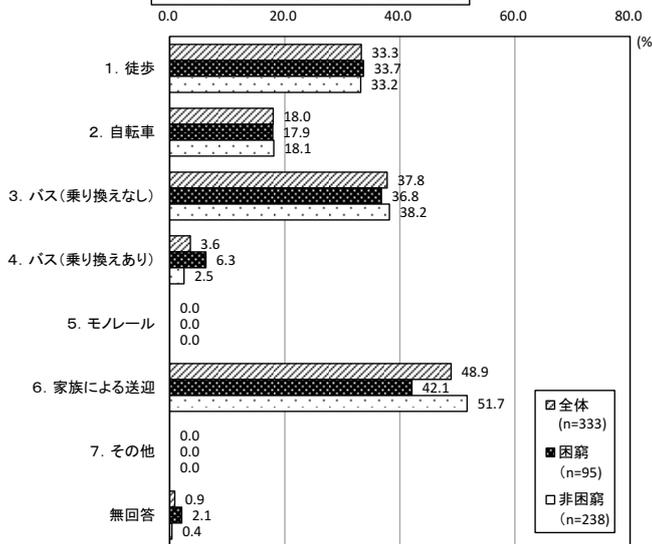
お子さんの登校時の交通手段について保護者に尋ねたところ、「家族による送迎」が5割弱と最も高く、次いで「バス（乗り換えなし）」や「徒歩」が続いている。

経済状況別にみると、「家族による送迎」については非困窮世帯の方が困窮世帯より割合が若干高い。さらに、世帯構成別にみると、困窮・ひとり親世帯では「家族による送迎」が他の世帯構成より低い。その他の項目では、経済状況による差はみられなかった。

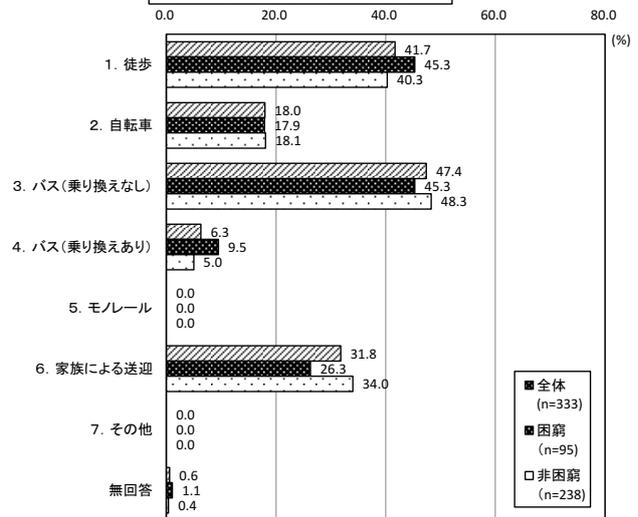
帰宅時の交通手段について、「バス（乗り換えなし）」が5割弱と最も高く、次いで「徒歩」、「家族による送迎」となっている。

経済状況によってあまり大きな差はみられなかった。

問9(1) 登校時の交通手段×経済状況別



問9(2) 帰宅時の交通手段×経済状況別

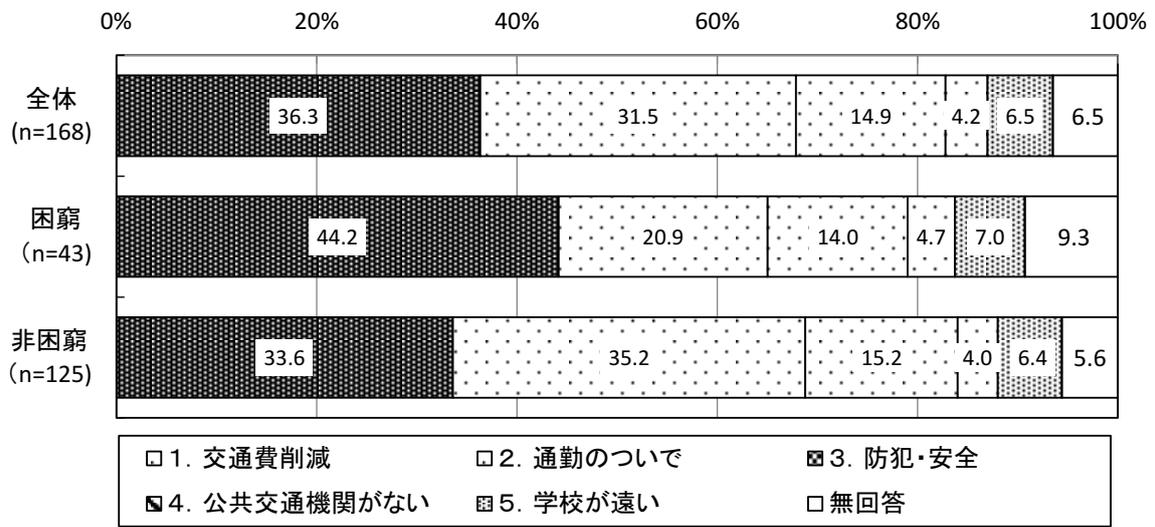


##### ○家族送迎の理由（保護者） <高2保護者：問9(4)>

登校時または帰宅時に、家族による送迎をしている方にその一番の理由を尋ねると、「交通費削減」が4割弱と最も高く、以下、「通勤のついで」、「防犯・安全」、「学校が遠い」、「公共交通機関がない」と続いている。

経済状況別にみると、困窮世帯では非困窮世帯に比べて「交通費削減」が10.6ポイント高く（困窮：44.2%、非困窮：33.6%）、非困窮世帯では「通勤のついで」が14.3ポイント高い（困窮：20.9%、非困窮：35.2%）。

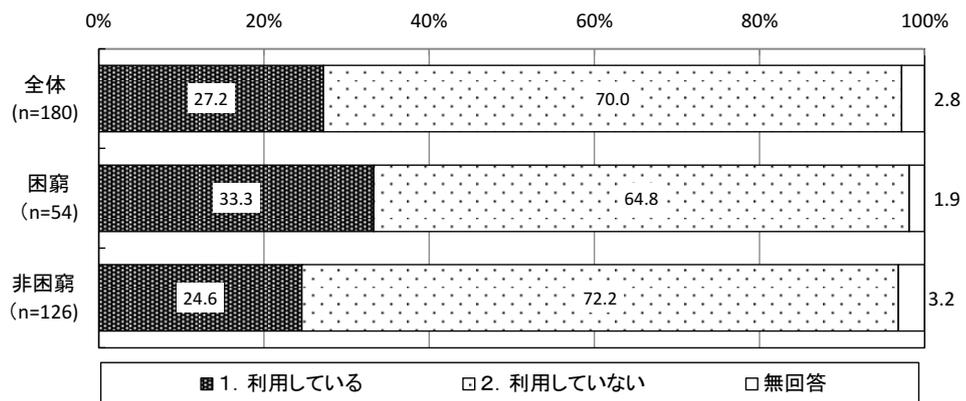
問9(4) 登下校時、家族による送迎をしている理由×経済状況別



○学割定期券の利用（保護者） <高2保護者：問9(3)>

バス利用者に学割定期券の利用状況を尋ねたところ、「2. 利用していない」が7割、「利用している」が3割弱となっている。

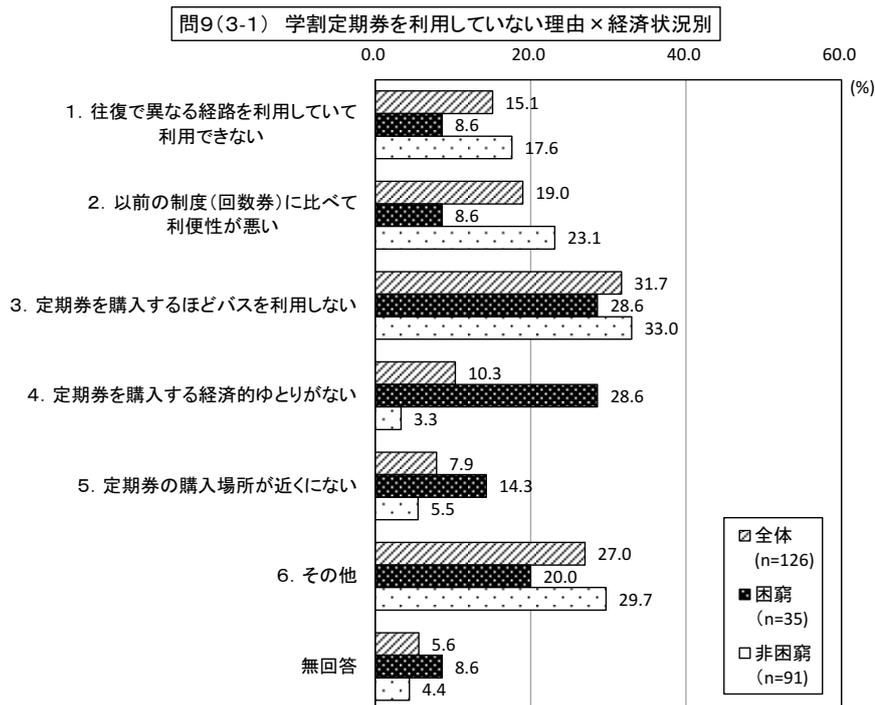
問9(3) 学割定期券の利用状況×経済状況別



○学割を利用していない理由（保護者） <高2保護者：問9(3)-1>

バス利用者のうち学割定期券を利用していない方にその理由を尋ねると、「定期券を購入するほどバスを利用しないため」が3割強と最も高く、次いで「以前の制度（回数券）に比べて利便性が悪いため」、「往復で異なる経路を利用して利用できない」と続いている。

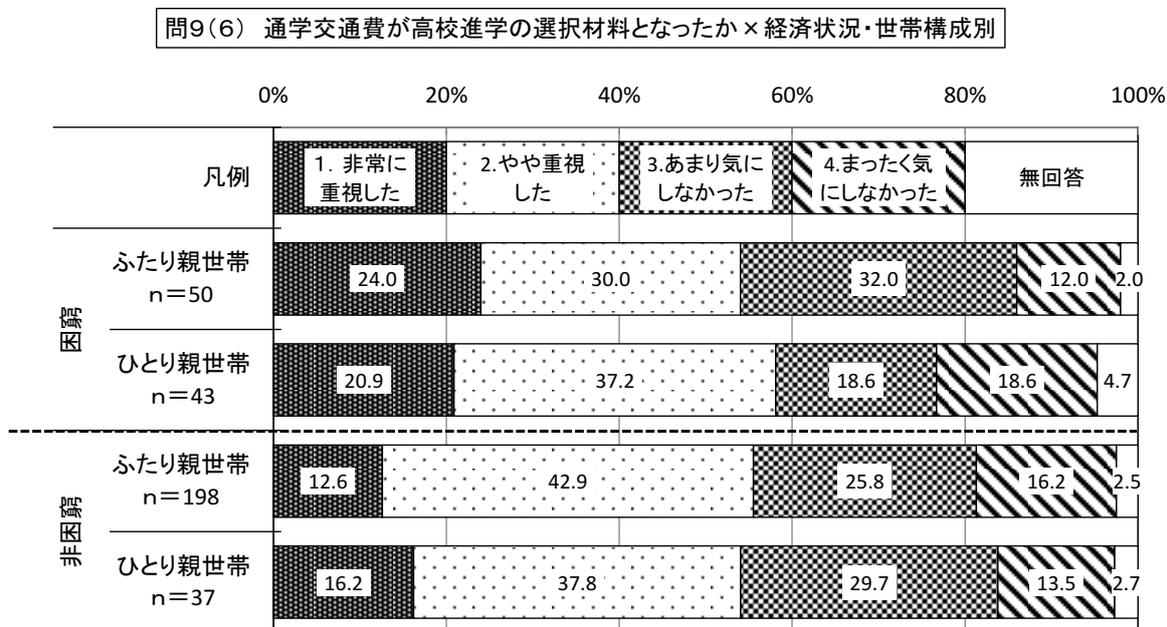
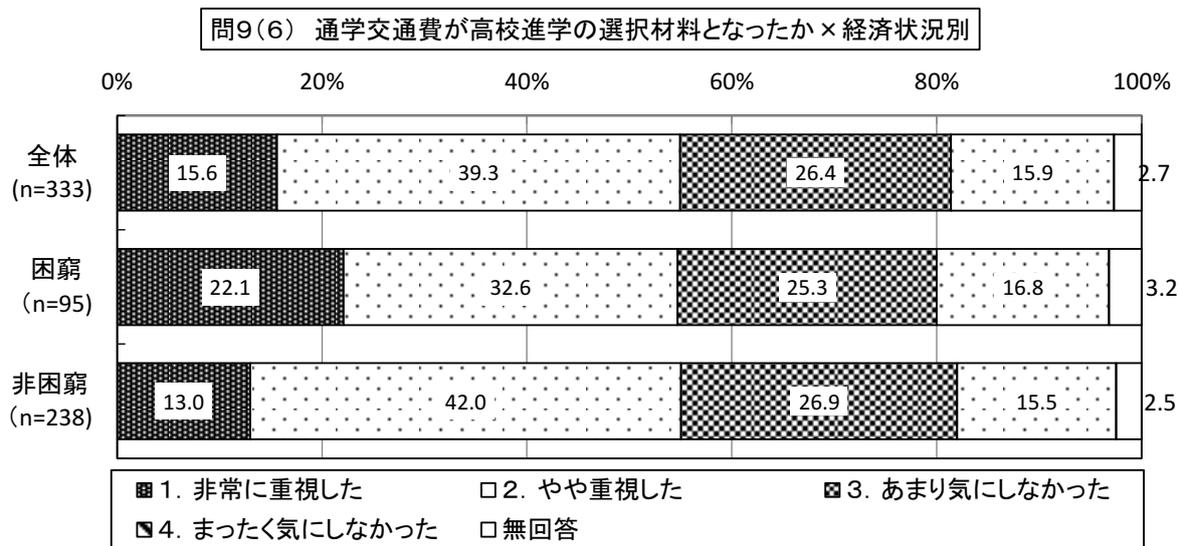
経済状況別にみると、非困窮世帯に比べて、困窮世帯では「定期券を購入する経済的ゆとりがないため」（困窮：28.6%、非困窮：3.3%）及び「定期券の購入場所が近くにないため」（困窮：14.3%、非困窮：5.5%）の割合が高い。



○通学交通費の負担は、高校進学を選択材料となっていたか（保護者） <高2保護者：問9(6)>

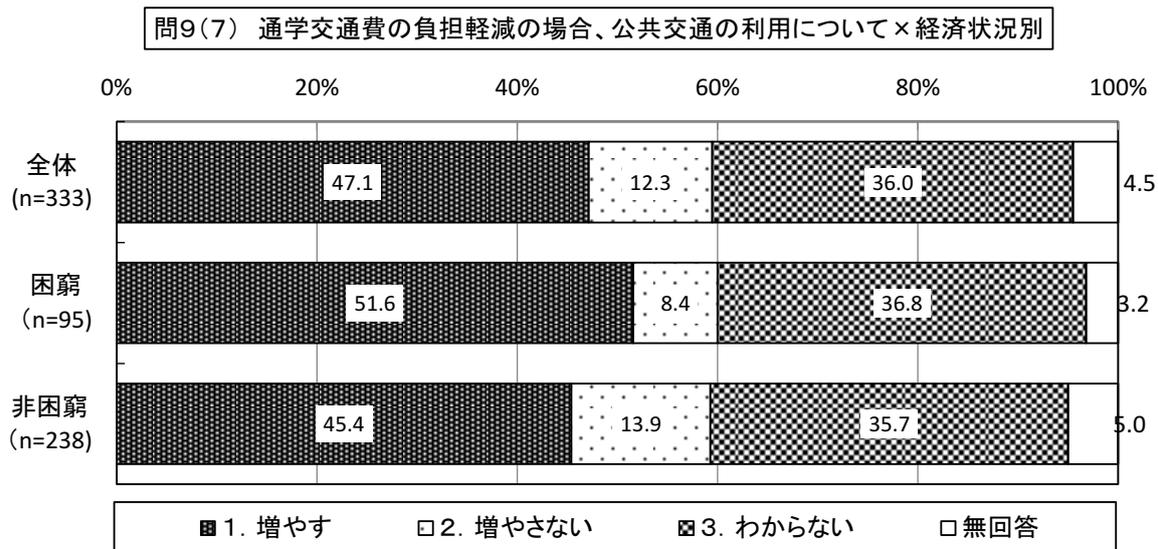
通学交通費の負担が高校進学の際の選択材料となったか尋ねると、『重視した』（「1. 非常に重視した」+「2. やや重視した」）が5割強（54.9%）と半数以上を占め、『気にしなかった』（「3. あまり気にしなかった」+「4. まったく気にしなかった」）は4割強（42.3%）となっている。

経済状況別・世帯構成別に「非常に重視した」割合をみると、非困窮・ふたり親世帯の1割強に対し、困窮・ふたり親世帯が2割強、困窮・ひとり親世帯が約2割と高い状況がみられた。



○今後、通学交通費の負担軽減などがあった場合、バスやモノレールなどの公共交通の利用を増やすか（保護者） <高2保護者：問9(7)>

通学交通費の負担軽減があった場合、公共交通の利用を増やすか尋ねると、「増やす」が5割弱、「増やさない」が1割強、「わからない」が4割弱となっている。



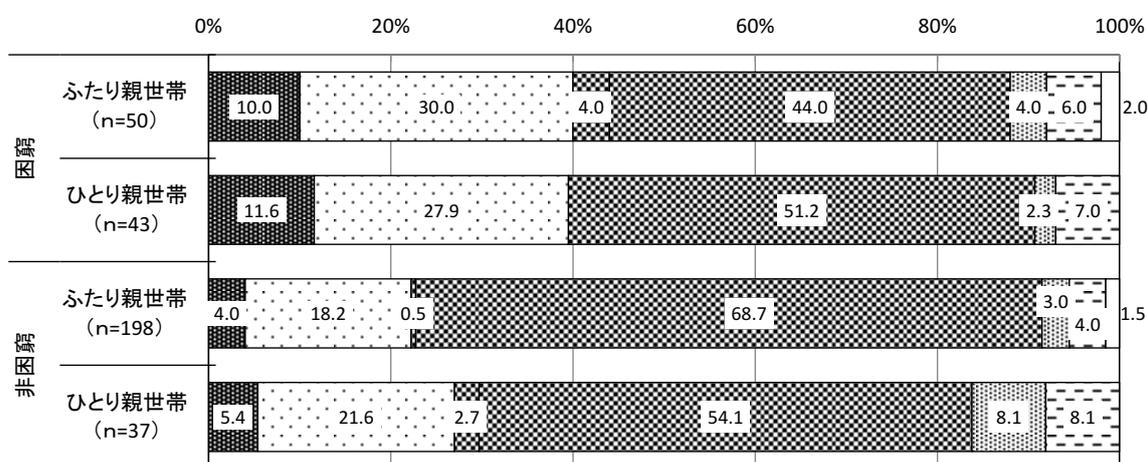
②進路・進学・就職について

○進路についての生徒の考え方（理想と現実） <高2生徒：問14・問16>

理想的な進学先について経済状況別・世帯構成別にみると、すべての世帯構成で理想的には「大学まで」とする割合が最も高くなっている。しかし、その割合には大きな差がみられ、困窮・ふたり親世帯で4割強と最も低く、非困窮・ふたり親世帯と比べて24.7ポイント低い。一方、「この高校までで良い」とする割合は、困窮・ひとり親世帯で1割強と最も高くなっている。

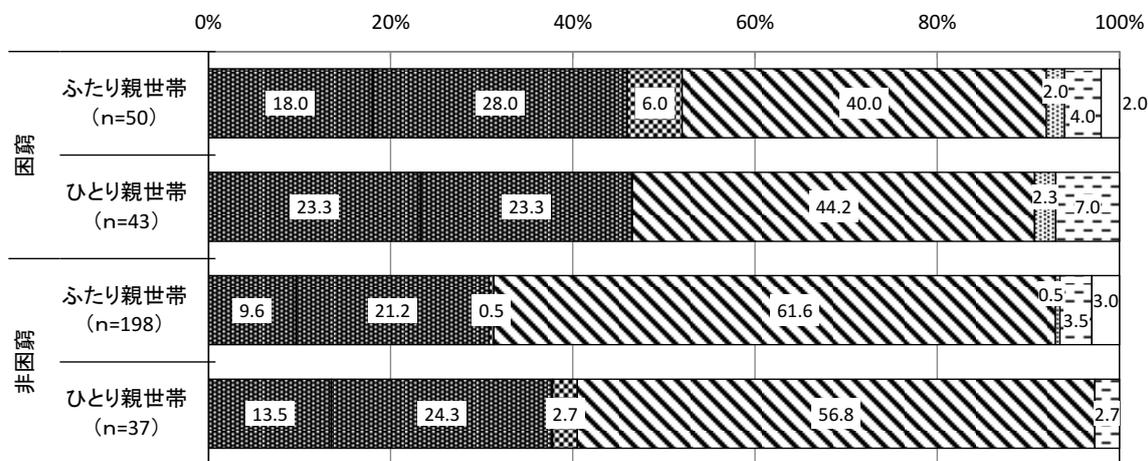
現実的な進学先を尋ねたところ、“理想的な進学先”と比較して、すべての世帯構成で「この高校まで」とする割合が高くなっており、とりわけ、困窮・ひとり親世帯では11.7ポイント高くなっており（理想：11.6%、現実：23.3%）、理想と現実の乖離がみられる。

問14 理想的な進学先×経済状況別・世帯構成別



■ 1. この高校までで良い □ 2. 専門学校まで ■ 3. 短期大学まで □ 4. 大学まで ■ 5. 大学院まで □ 6. その他 □ 無回答

問16 現実的な進学先×経済状況別・世帯構成別



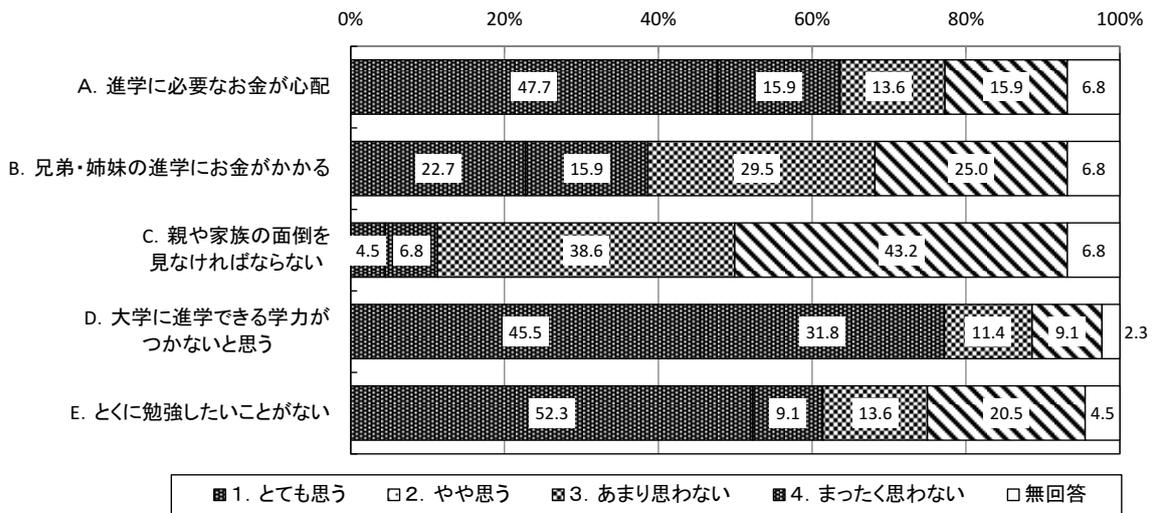
■ 1. この高校までで良い ■ 2. 専門学校まで ■ 3. 短期大学まで □ 4. 大学まで ■ 5. 大学院まで ■ 6. その他 □ 無回答

○進路についての生徒の考え方（理想と現実） <高2生徒：問16-1>

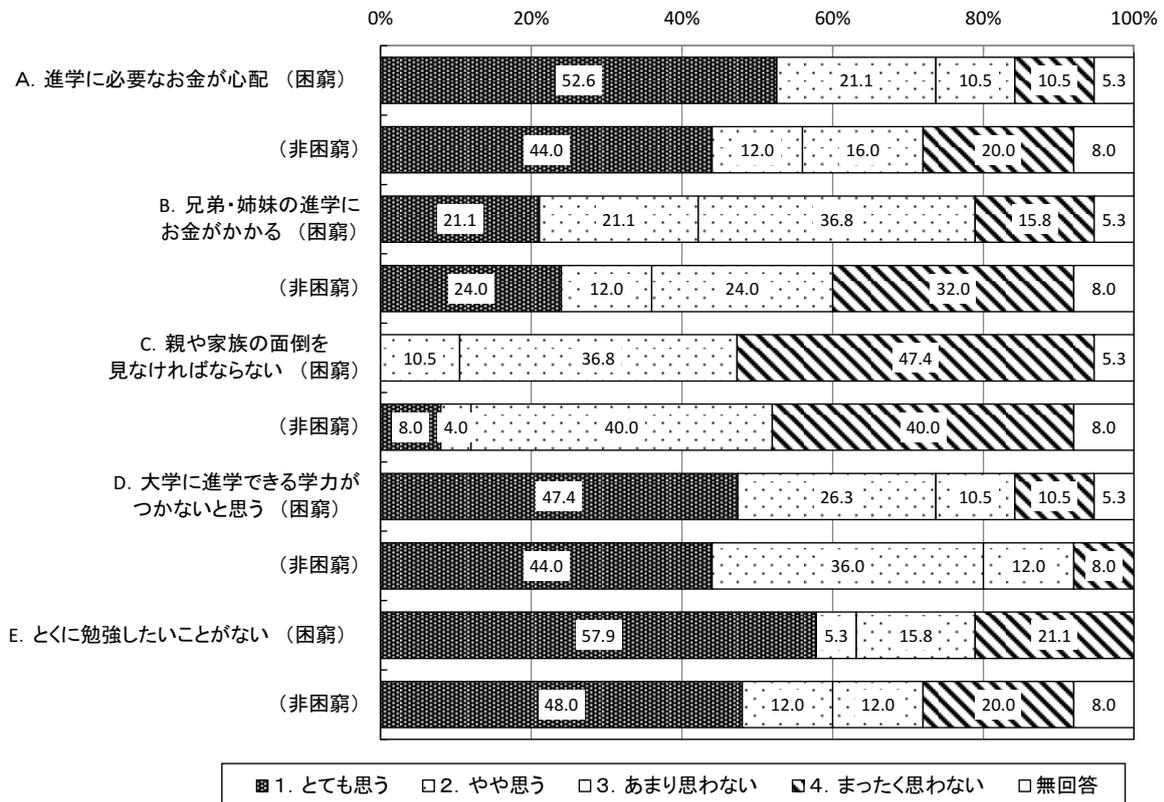
現実的な進学について「この高校まで」と回答した方にその理由を尋ねると、『思う』（「1. とても思う」+「2. やや思う」）割合は、「D. 大学に進学できる学力がつかないと思う」が8割弱と最も高く、次いで「A. 進学に必要なお金が心配」が6割強、「E. とくに勉強したいことがない」が6割強となっている。

経済状況別にその理由をみると、「A. 進学に必要なお金が心配」の項目について『思う』と回答した割合は、困窮世帯で7割強を占める。

問16-1 高校以上の進学を希望しない理由 (n=44)



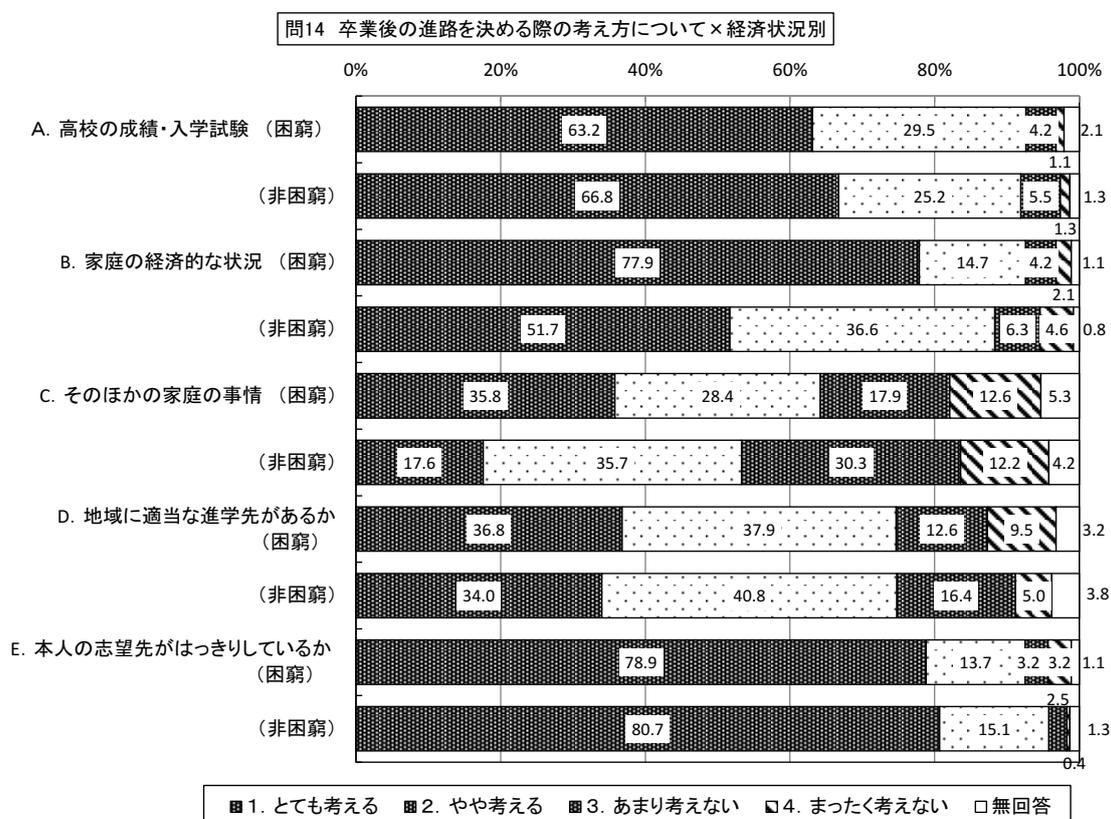
問16-1 高校以上の進学を希望しない理由×経済状況別(困窮n=19、非困窮n=25)



○保護者が子どもの進路を決める際に考慮する点（保護者） <高2保護者：問14>

高校卒業後の進路を決める際の考え方に関する5項目について尋ねたところ、各項目で『考える』（「1. とても考える」+「2. やや考える」）割合は、高い順に「E. 本人の志望先がはっきりしているか」（94.9%）、「A. 高校の成績・入学試験」（92.2%）、「B. 家庭の経済的な状況」（89.5%）、「D. 地域に適切な進学先があるか」（74.7%）、「C. そのほかの家庭の事情」（56.4%）となっている。

経済状況別に「1. とても考える」割合をみると、「B. 家庭の経済的な状況」及び「C. そのほかの家庭の事情」の項目で非困窮世帯より困窮世帯の割合が高い状況がみられる。

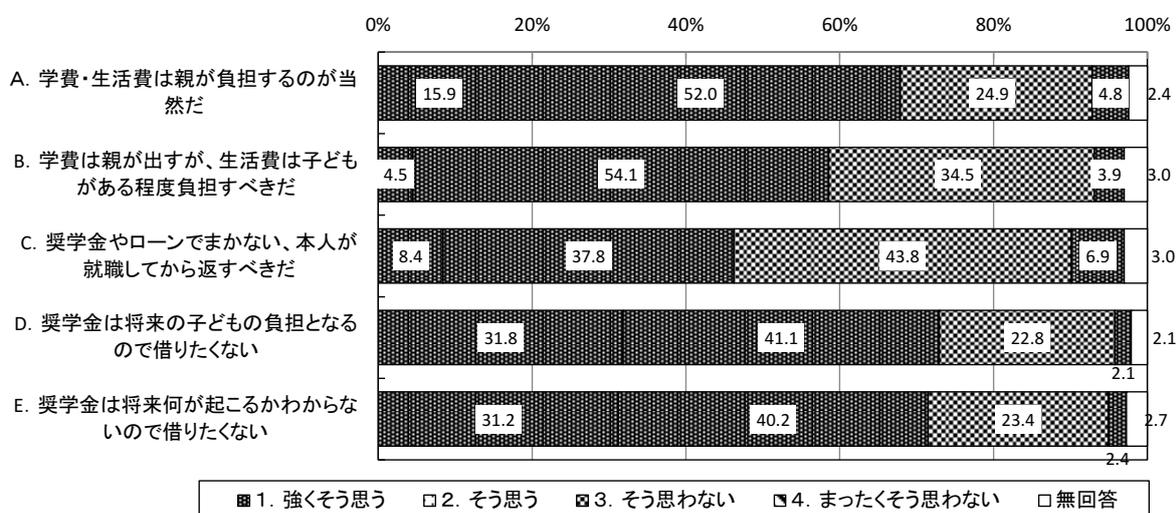


○大学や専門学校の学費についての保護者の意見（保護者） <高2保護者：問18>

進学にかかる学費・生活費の負担に関する考え方について、『そう思う』（「1. 強くそう思う」＋「2. そう思う」）割合をみると、高い順に「D. 返済が必要な奨学金は、将来の子どもの負担となるので、借りたくない」（72.9%）、「E. 返済が必要な奨学金は、将来何が起こるかわからないので借りたくない」（71.4%）、「A. 卒業までの学費・生活費は親が負担するのが当然だ」（67.9%）、「B. 学費は親が出すが、生活費は子どもがある程度負担すべきだ」（58.6%）、「C. 学費や生活費は奨学金やローンでまかない、本人が就職してから返すべきだ」（46.2%）となっており、上位4項目では『そう思う』割合が5割以上みられる。

また、「D」及び「E」といった“奨学金を借りたくない”という項目に、3割強の保護者が「強くそう思う」と回答している。

問18 進学にかかる学費・生活費の負担に関する考え方

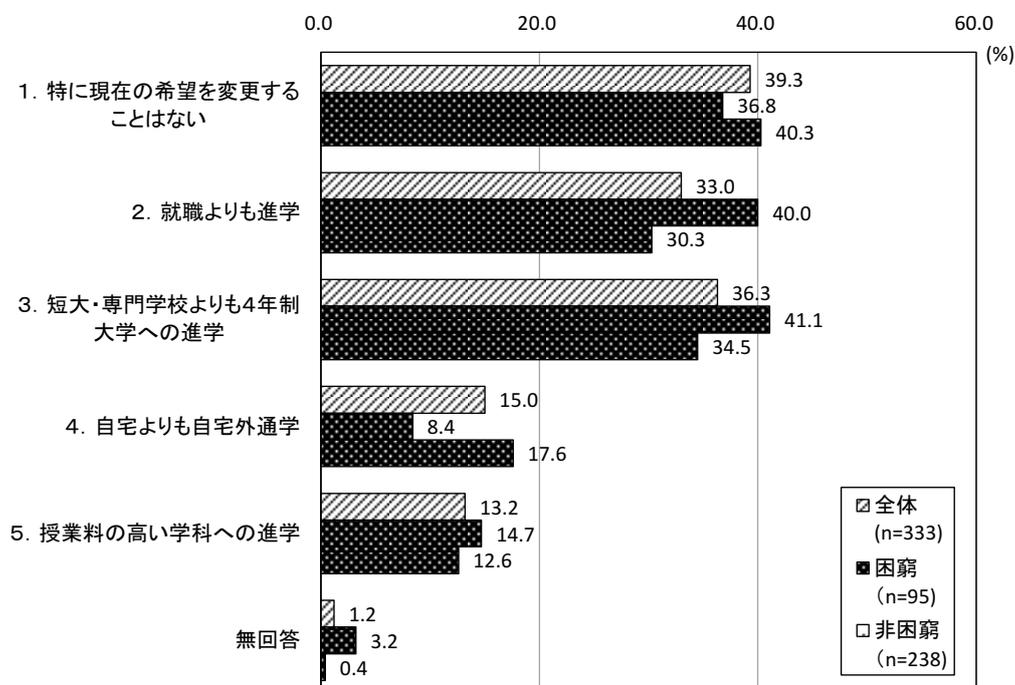


○経済的なゆとりがあれば何をさせてあげたいか（保護者） <高2保護者：問19>

進路に関して、経済的にゆとりがあればさせてあげたいこととして、「特に現在の希望を変更することはない」とする回答が最も高く、約4割となっている。一方、「1」と無回答を除く約6割は経済的にゆとりがあれば、何らかの進路変更をさせてあげたいと考えている。その内容としては、「短大・専門学校よりも4年制大学への進学」が4割弱と最も高く、以下、「就職よりも進学」、「自宅よりも自宅外通学」、「授業料の高い学科への進学」と続いている。

経済状況別にみると、困窮世帯では「就職よりも進学」の割合が非困窮世帯より9.7ポイント高く、逆に非困窮世帯では「自宅よりも自宅外通学」の割合が困窮世帯より9.2ポイント高い。

問19 経済的にゆとりがあれば進路に関してさせてあげたいこと×経済状況別



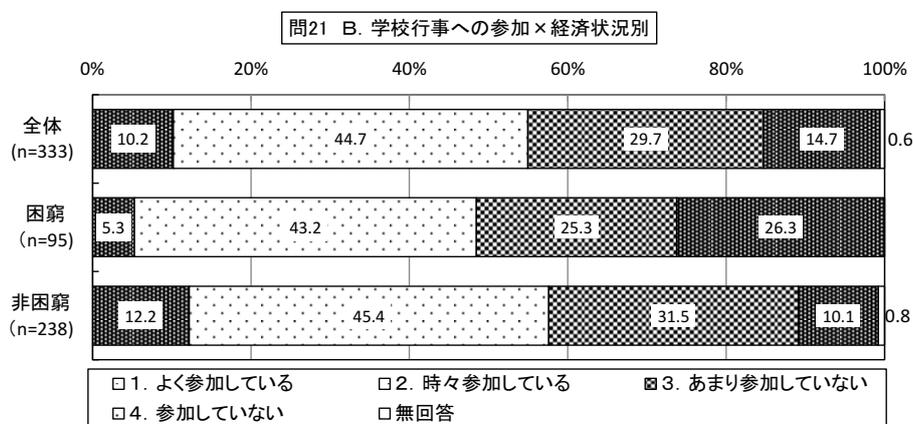
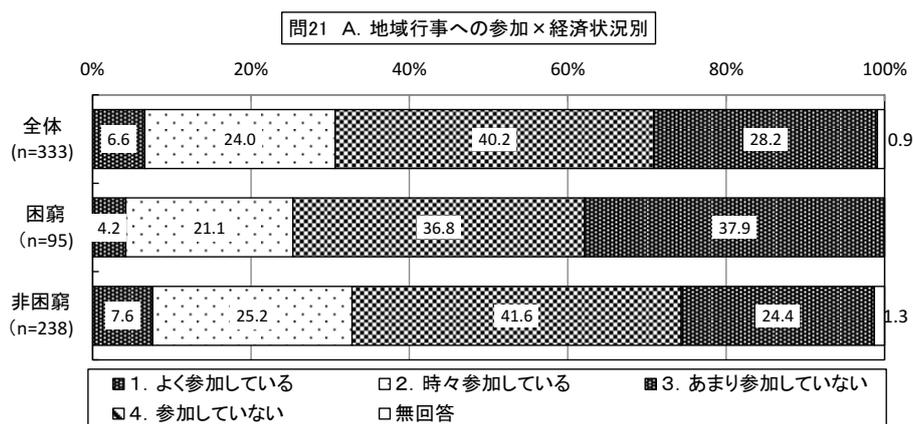
③地域・知人との関係について

○地域・学校行事への参加（保護者） <高2保護者：問21>

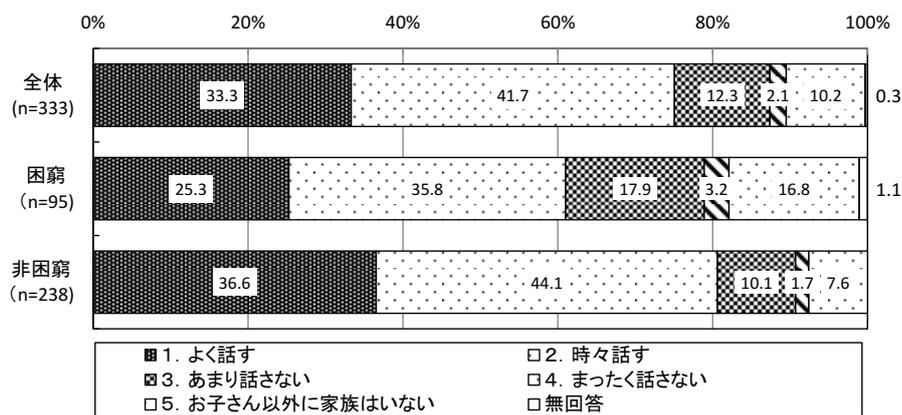
地域とのつながりや子育てや教育について相談できる相手の存在など、いわゆる社会的ネットワークについて6つの項目で尋ねた設問である。『参加している』（「1. よく参加している」+「2. 時々参加している」）割合をみると、「A. 地域行事」は約3割（30.6%）、「B. 学校行事」は5割強（54.9%）となっている。子育てや教育について相談できる環境の有無をみると、「C. 相談できる親戚」が『いる』（「1. たくさんいる」+「2. ある程度いる」）とする回答割合が7割強（72.7%）、「D. 相談できる友人・知人」が『いる』は8割弱（77.5%）、「E. 家族間での子育てや教育に関する会話」を『する』（「1. よく話す」+「2. 時々話す」）割合は7割強（75.0%）となっている。

また、「F. 生活上の困難を解決するために、地域の人々はお互いに協力するべきか」という問いには、5割強（51.0%）が『そう思う』（「1. そう思う」+「2. ややそう思う」）と回答している。

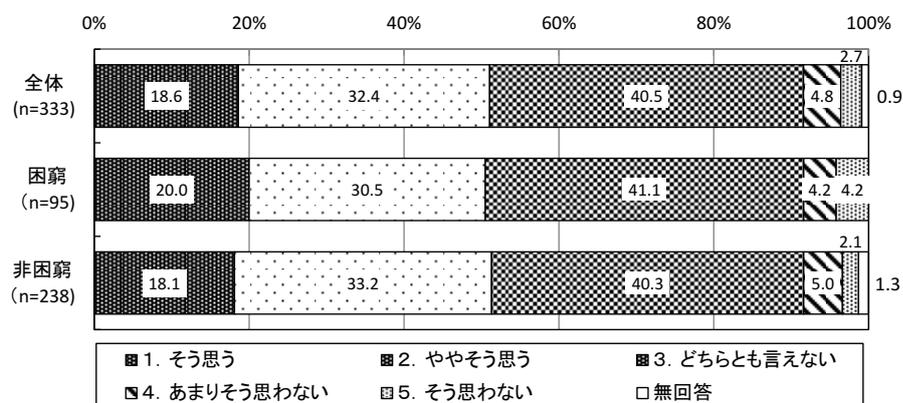
経済状況別にみると、「D. 相談できる友人・知人」及び「E. 家族間での子育てや教育に関する会話」の有無について、非困窮世帯の方が相談できる環境があるとした回答割合が高い。



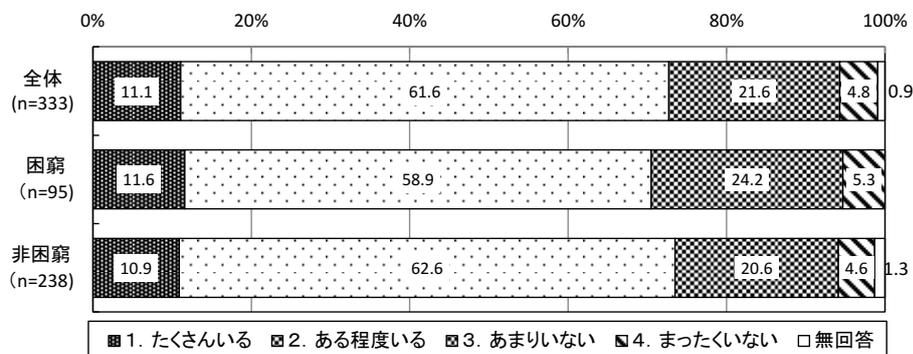
問21 E. 家族間での子育てや教育に関する会話×経済状況別



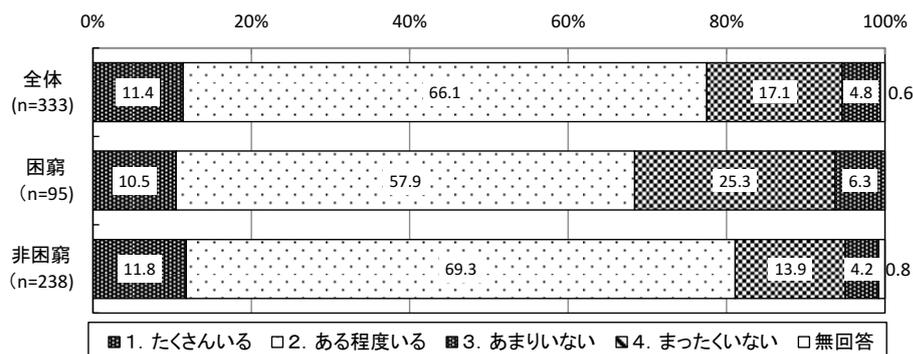
問21 F. 生活上の困難の解決のため、地域の人々は協力すべきか×経済状況別



問21 C. 悩みを相談できる親戚の有無×経済状況別



問21 D. 悩みを相談できる友人・知人の有無×経済状況別

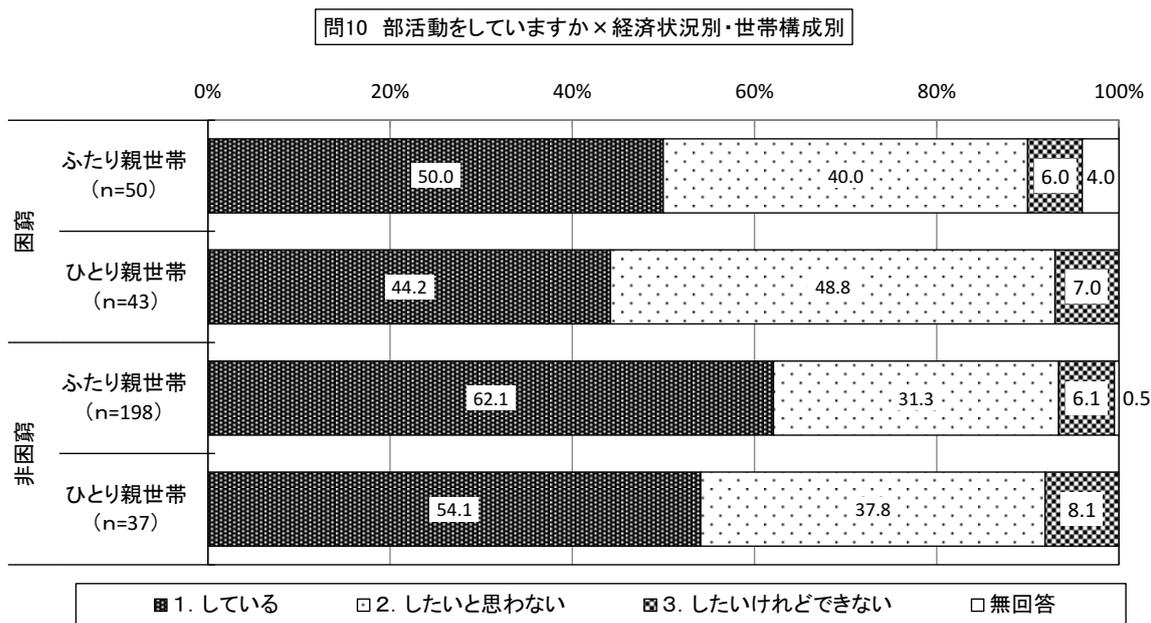
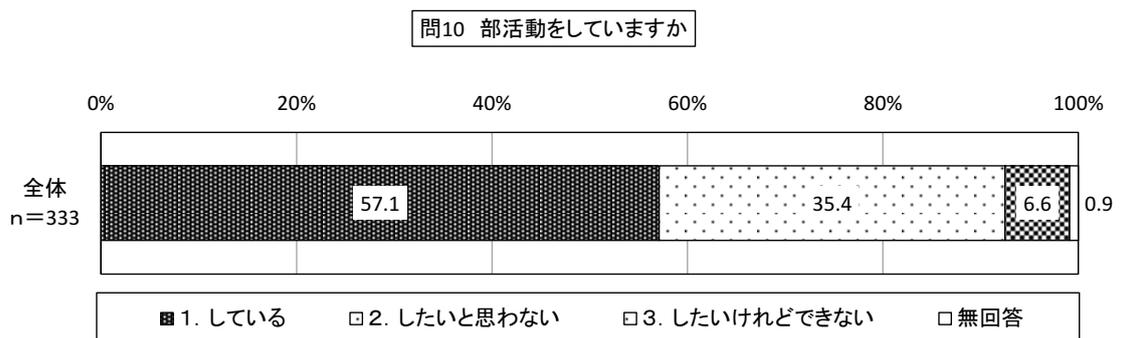


④部活動について

○部活動の状況 <高2生徒：問10>

部活動を「している」割合が6割弱、「したいと思わない」が4割弱、「したいけれどできない」が1割弱となっている。

経済状況別・世帯構成別にみると、部活動を「している」割合は、非困窮・ふたり親世帯で6割強と最も高く、困窮・ひとり親世帯で4割強と最も低くなっている。なお、「したいけれどできない」割合について、経済状況や世帯構成による差はみられない。

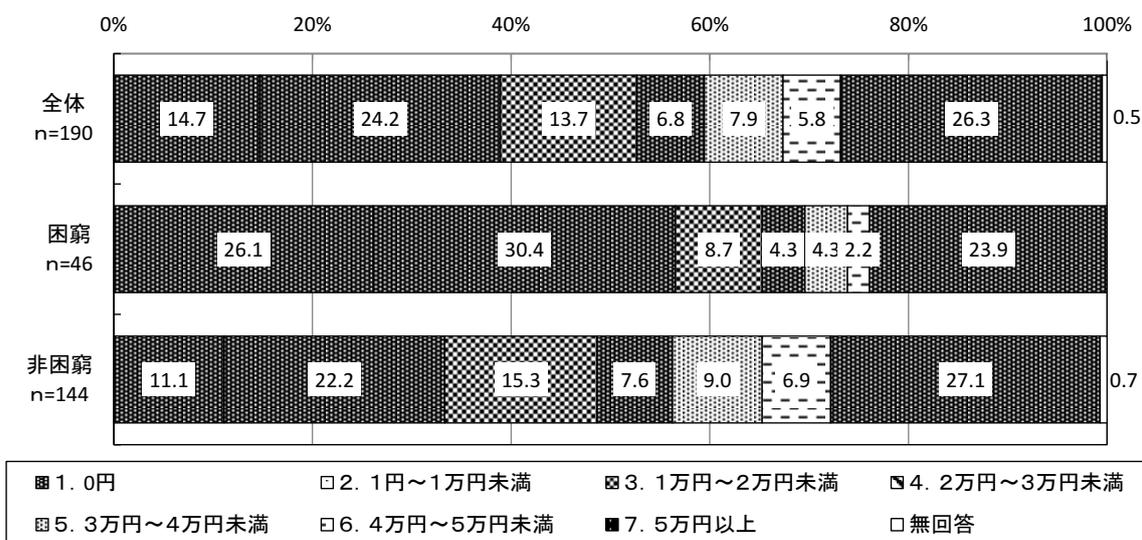


○部活動にかかる費用 <高2生徒:問10-1>

部活動をしている方に、部活動にかかる費用を尋ねると、「5万円以上」が3割弱と最も高く、次いで「1円～1万円未満」が2割強となっている。

経済状況別にみると、「0円（費用負担なし）」と回答した困窮世帯の割合が3割弱と、非困窮世帯に比べて15ポイント高く、困窮世帯では『1万円未満』（「1. 0円」+「2. 1円～1万円未満」）との回答が6割弱と大半を占める。一方、困窮世帯で年間「7. 5万円以上」が部活動にかかる回答する世帯も2割強みられる。

問10-1 部活動にかかる年間費用×経済状況別



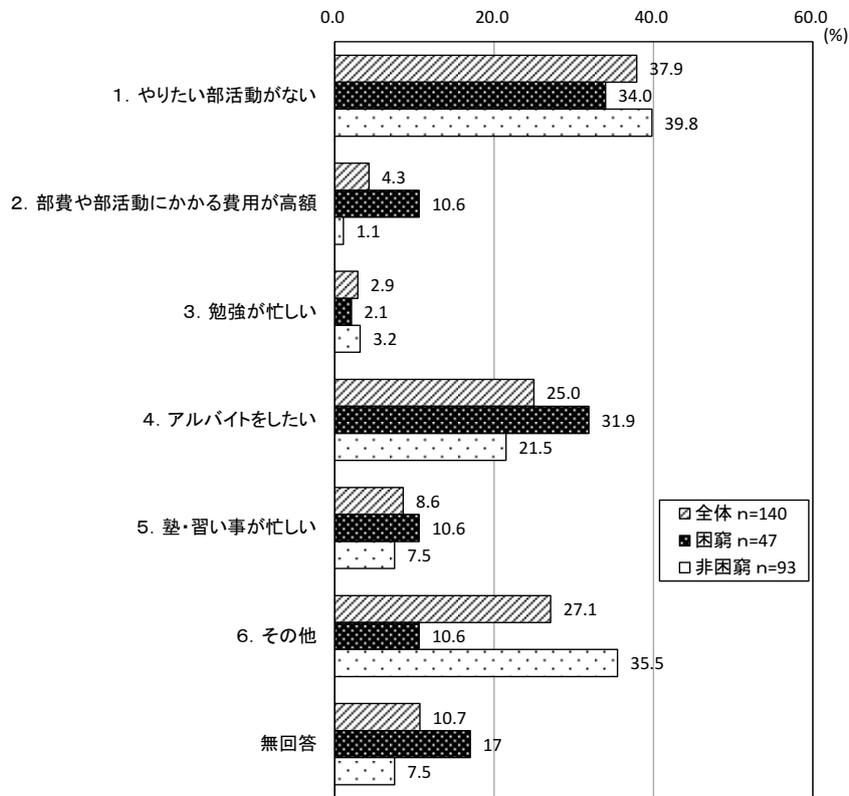
○部活動をしていない理由 <高2生徒:問10-2>

部活動を「したいと思わない」・「したいけれどできない」方にその理由を尋ねると、「やりたい部活動がない」が4割弱と最も高く、以下、「その他」、「4. アルバイトをしたい」と続いている。

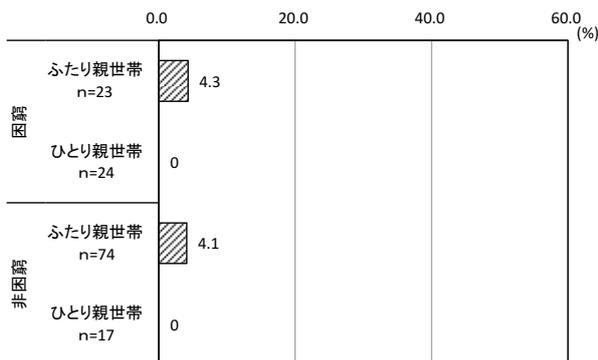
経済状況別にみると、非困窮世帯に比べて、困窮世帯では「アルバイトをしたい」とする回答割合が10.4ポイント、「部費や部活動にかかる費用が高額」が9.5ポイントそれぞれ高くなっている。

また、「アルバイトをしたい」ために、部活動を「したいと思わない」・「したいけれどできない」方の割合は、困窮・ふたり親世帯で3割強と高くなっている。

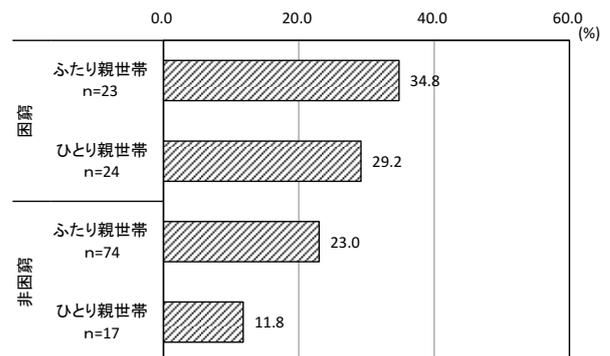
問10-2 部活動を「したいと思わない」「したいけれどできない」と答えた生徒の理由×経済状況別



問10-2 部活動を「したいと思わない」「したいけれどできない」理由のうち「勉強が忙しいので」×経済状況別



問10-2 部活動を「したいと思わない」「したいけれどできない」理由のうち「アルバイトをしたい」×経済状況別



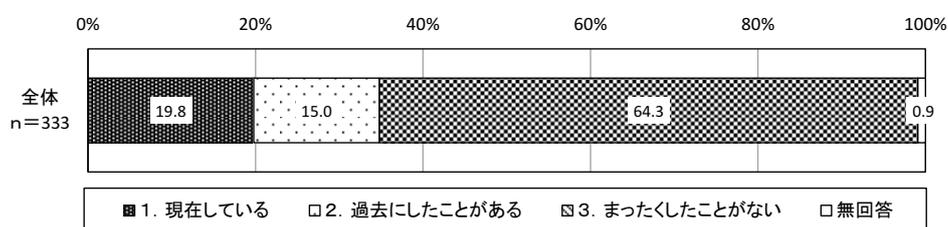
## ⑤就労について

### ○就労（アルバイト）の状況 <高2生徒：問11>

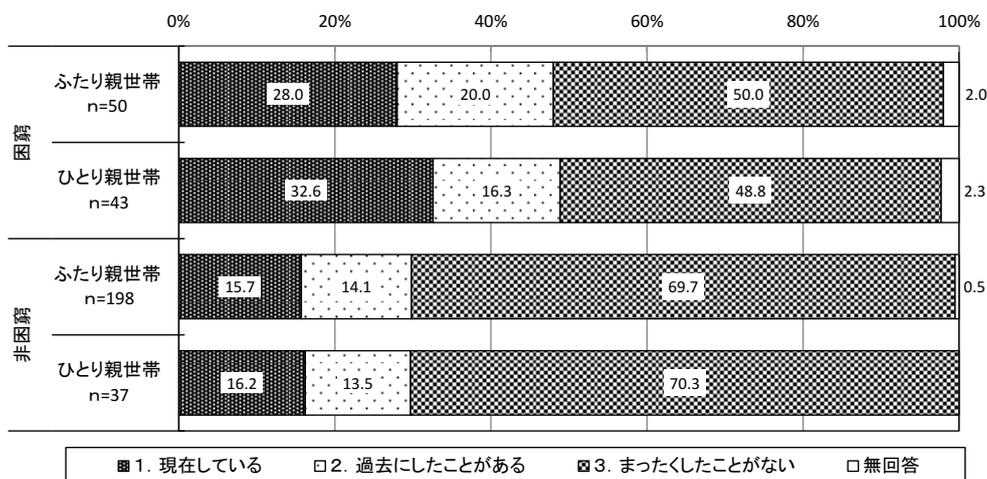
就労（アルバイト）を「現在している」生徒が約2割、「過去にしたことがある」生徒が1割強となっており、3割強の生徒が高校入学以降、何らかの就労をした経験がある状況がみられる。

経済状況別・世帯構成別に就労経験をみると、非困窮世帯では「まったくしたことがない」が約7割を占めるのに対し、困窮世帯では約5割と大きな差がみられる。一方、「現在している」割合は非困窮世帯では2割弱（ふたり親：15.7%、ひとり親：16.2%）に対し、困窮世帯では3割前後（ふたり親：28.0%、ひとり親：32.6%）と2倍近い差がみられる。

問11 高校に入ってから今までに就労(アルバイト)をしたことがあるか



問11 高校に入ってから今までに就労(アルバイト)をしたことがあるか×経済状況別・世帯構成別



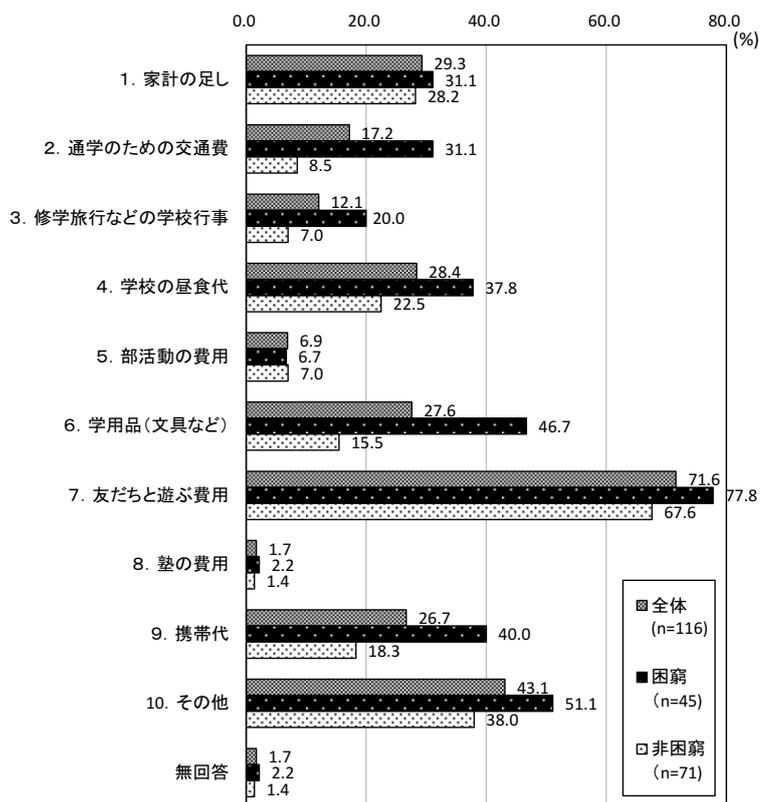
### ○就労（アルバイト）で得た収入の使い道 <高2生徒：問11-1(7)>

就労で得た収入の使い道として、「友だちと遊ぶ費用」が7割強と最も高く、以下、「10. その他」、「1. 家計の足し」、「4. 学校の昼食代」、「6. 学用品」、「9. 携帯代」と続いている。

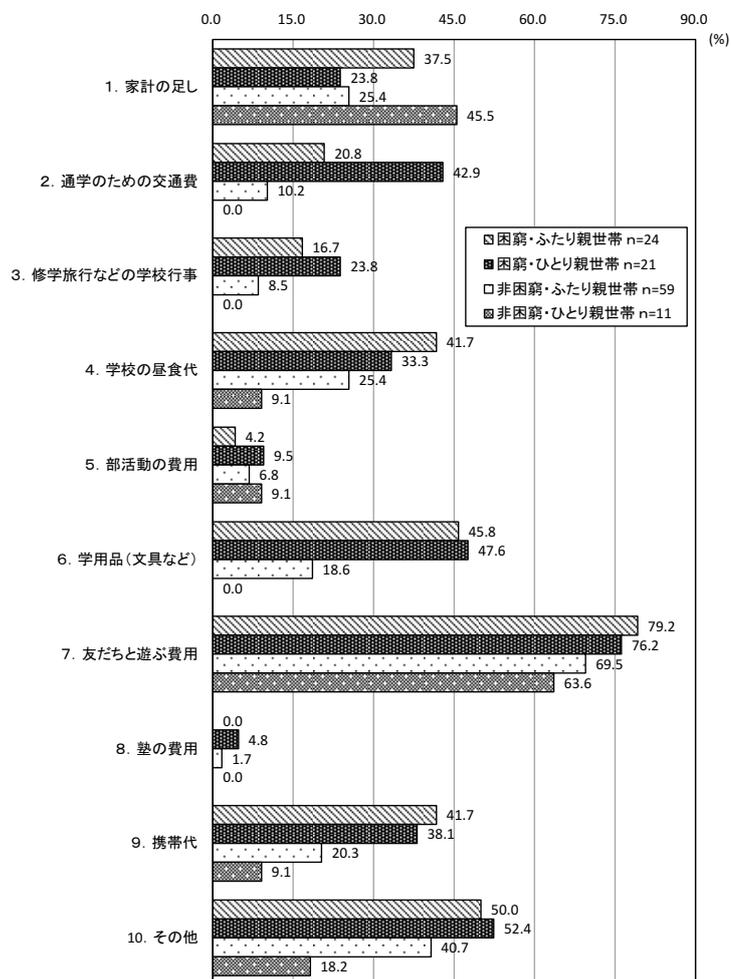
経済状況別にみると、「10. その他」を除いた9項目のうち8項目で、非困窮世帯より困窮世帯の割合が高くなっており、困窮世帯では収入の使い道が多岐に渡ることがわかる。とりわけ、「学用品」、「通学のための交通費」、「携帯代」の3項目で経済状況による差が大きい。

また、経済状況別・世帯構成別にみると、他に比べて困窮・ひとり親世帯では「通学のための交通費」、「修学旅行などの学校行事費」の割合が高く、非困窮・ひとり親世帯及び困窮・ふたり親世帯では「家計の足し」の割合が高い傾向がみられる。

問11-1(7) 収入の使い道



問11-1(7)収入の使い道×経済状況別・世帯構成別



## (4) 未就学児童保護者調査結果の概要

### 保護者の働き方について

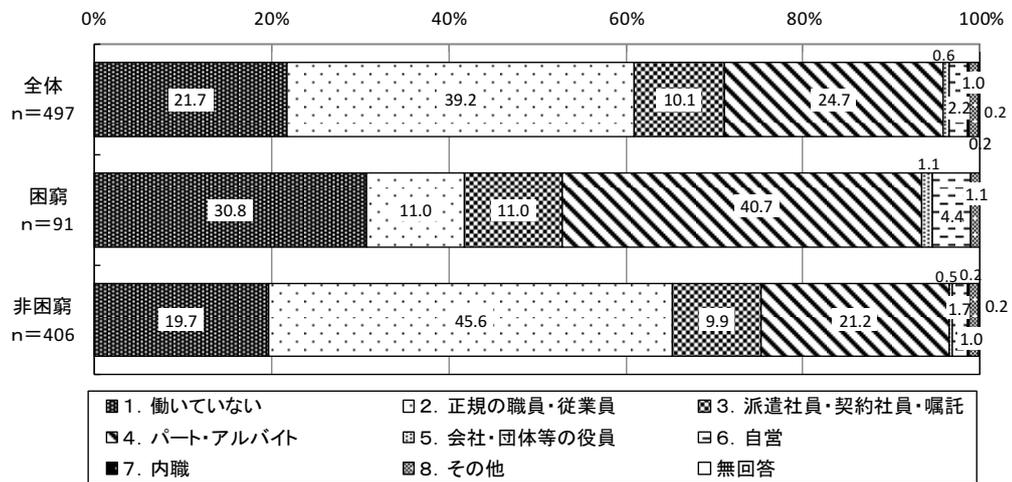
#### ①母親の働き方について

##### ○母親の就労状況 <未就学児保護者：問6>

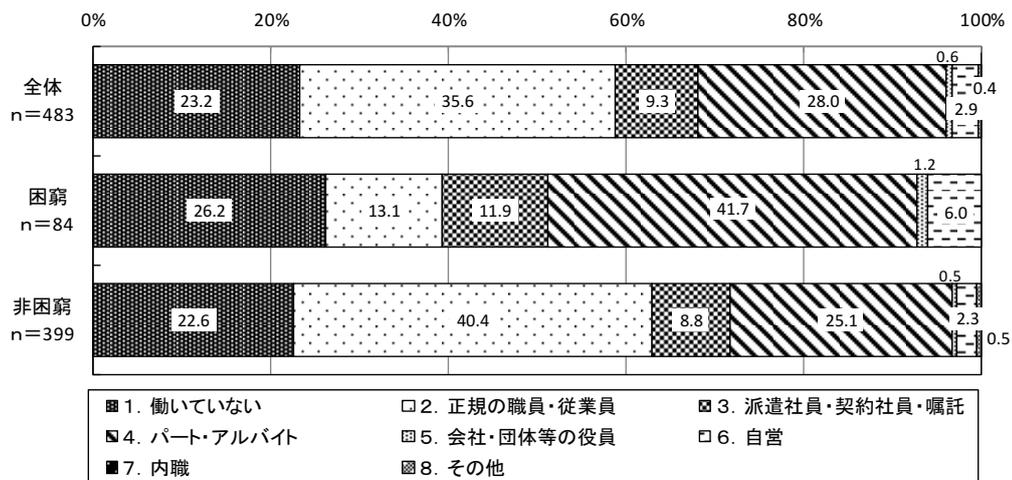
母親の就労状況をみると、「1. 働いていない」と回答した割合は1歳児全体で21.7%、5歳児全体では25.2%となっている。このことから、1歳児の78.0%、5歳児の76.8%の母親は何らかの形で就労していることがうかがえる。「働いていない」母親をみると1歳児の「困窮世帯」でやや多い。

雇用形態を経済状況でみると、1歳児、5歳児ともに「4. パート・アルバイト」と回答した割合が困窮世帯で高く、「2. 正規の職員・従業員」と回答した割合は非困窮世帯よりも低い傾向にある。

母親の就労形態(1歳児)×経済状況



母親の就労形態(5歳児)×経済状況



○母親の週平均労働日数と労働時間 <未就学児保護者：問6-2①・問6-2②>

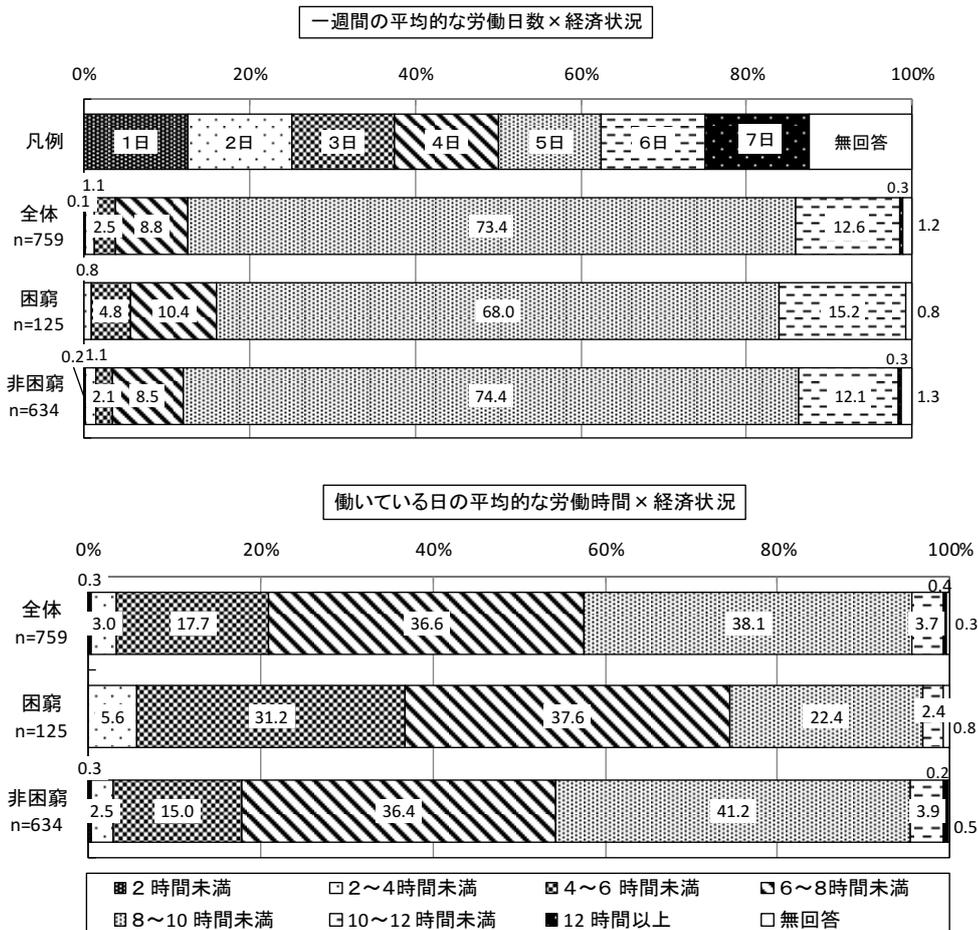
母親の一週間の平均的な労働日数をみると、全体の7割強（73.4%）が週に「5日」（週休2日）働いており、次いで「6日」が12.6%、「4日」が8.8%と続いている。3日以下の短めの日数で働く母親は3.7%とわずかである。なお、週6日以上働く母親の割合が全体で12.9%を占めている。

母親の1週間の平均労働時間（平均的な労働日数×働いている日の平均的な労働時間）をみると、1歳児全体では『週30時間未満』という比較的短時間で働く母親が約2割（19.7%）にとどまり、『週40時間以上』働く母親は5割弱（46.6%）となっている。5歳児でも、『週30時間未満』が約2割（21.6%）、『週40時間以上』が4割強（43.9%）となっている。

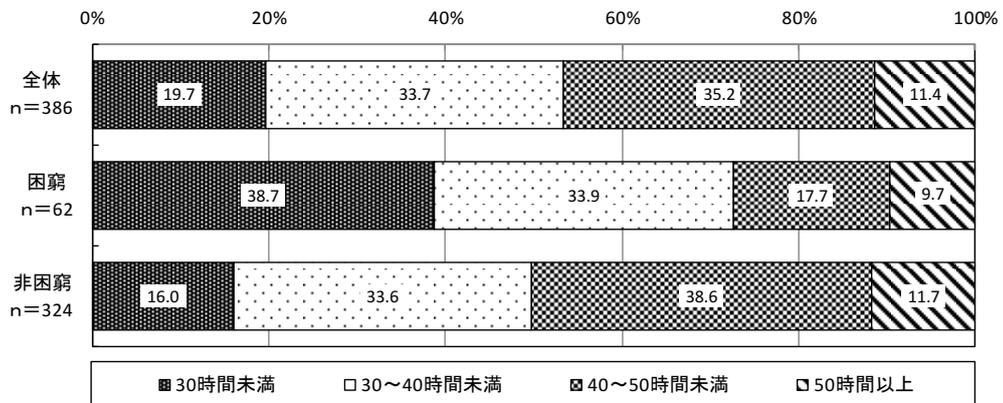
経済状況からみると、1歳児では、『30時間未満』で働く母親は、非困窮世帯では16.0%で、困窮世帯では38.7%と高くなっている。『40時間以上』働く母親は、非困窮世帯で約半数（50.2%）を占めているのに対し、困窮世帯では3割弱（27.0%）となっている。

5歳児でも1歳児同様に、『30時間未満』で働く母親は、非困窮世帯では19.1%と割合が低く、困窮世帯では33.9%と高くなっている。一方『40時間以上』働く母親は、非困窮世帯で46.7%と高く、困窮世帯では30.7%となっている。

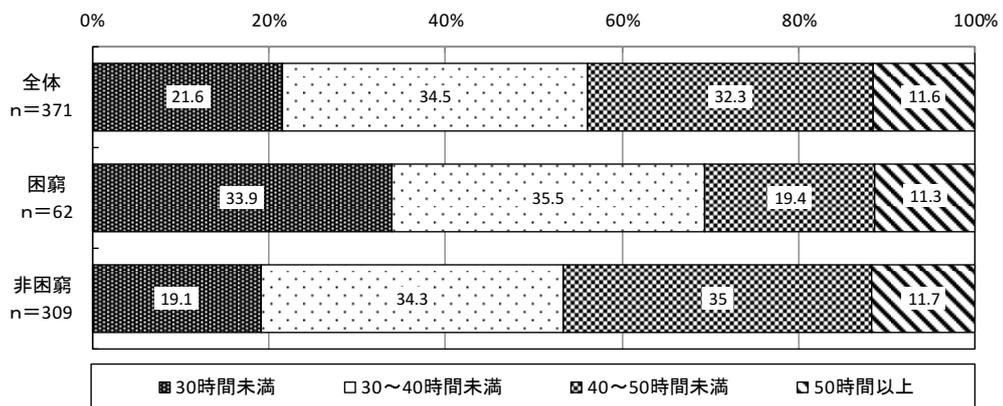
1歳児、5歳児ともに、『50時間以上』働く母親は全体で1割程度見られる。



母親の就労時間(1歳児)×経済状況



母親の就労時間(5歳児)×経済状況

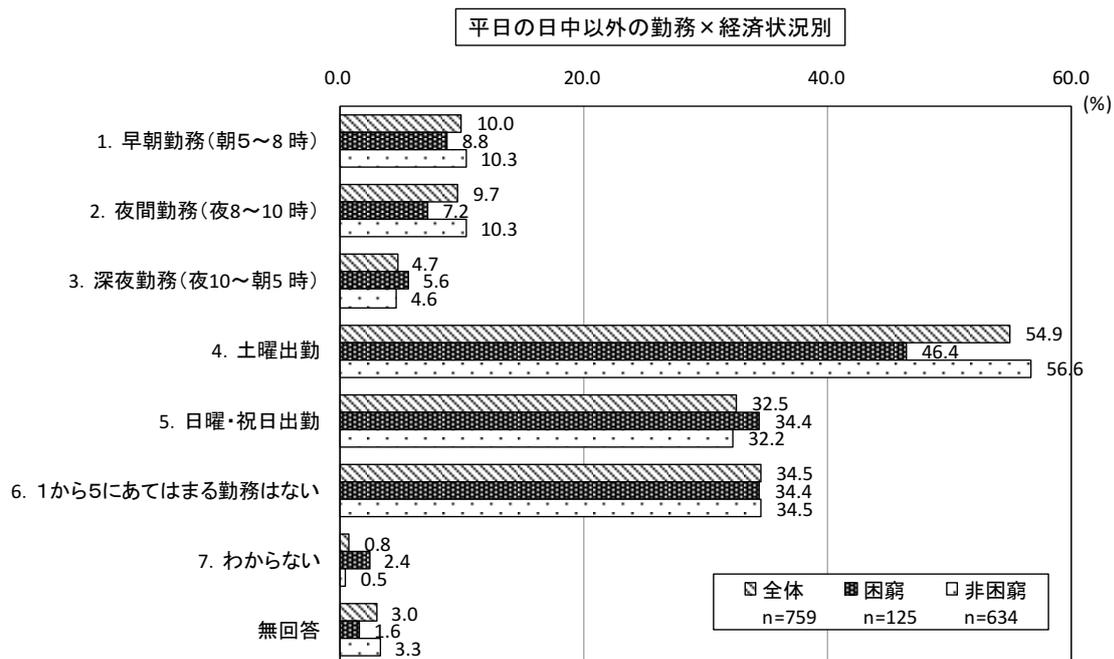


※無回答を除く

○母親の就労形態 <未就学児保護者：・問6-2③>

母親の平日の日中以外の勤務を全体でみると「4. 土曜出勤」の割合が54.9%と高く、特に非困窮世帯では56.6%となっている。一方、困窮世帯の母親は46.6%となっている。

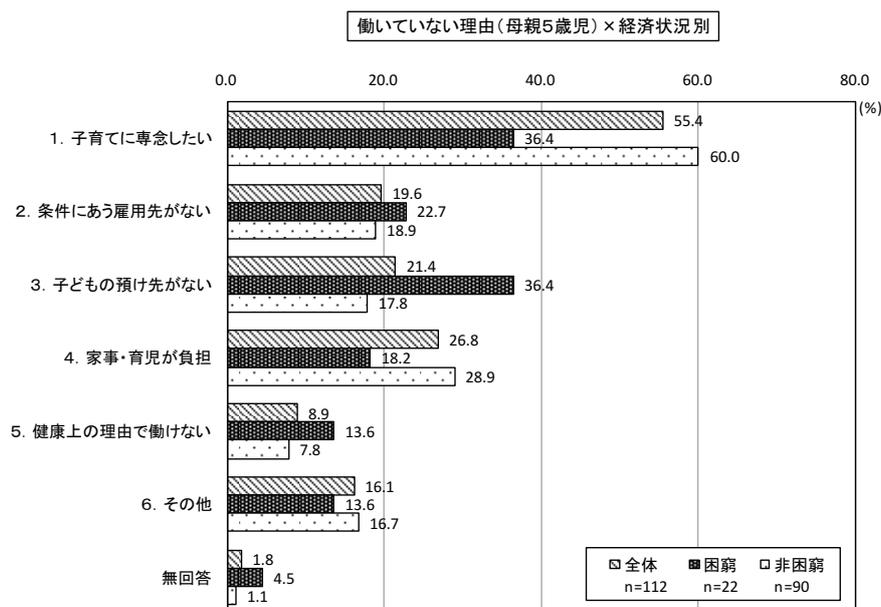
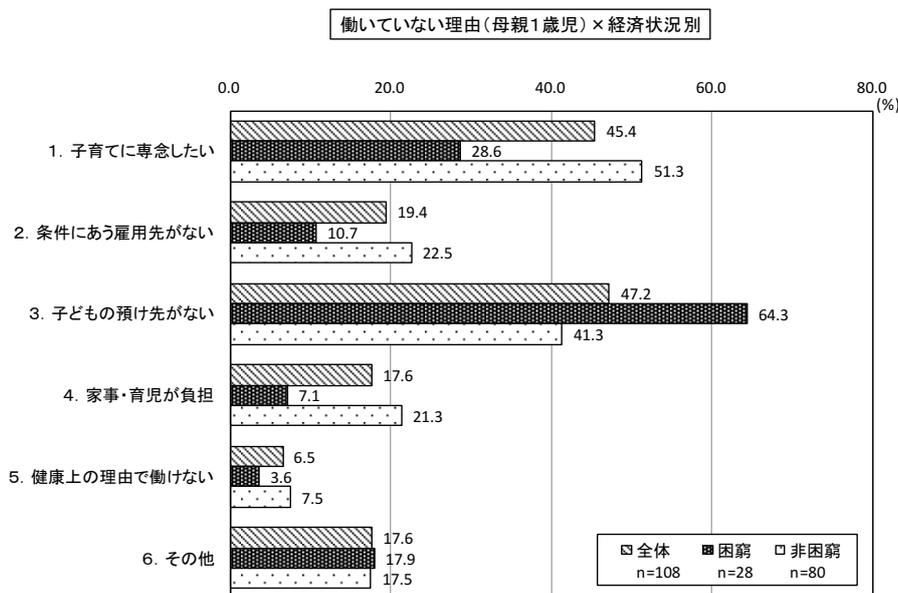
次いで「5. 日曜・祝日出勤」の割合が全体で32.5%と高くなっている。夜間、早朝、夜間勤務も1割程度みられる。



○母親の就労状況—働いていない理由 <未就学児保護者：問6-1>

母親の「働いていない」理由について1歳児全体をみると、「3. 子どもの預け先がない」が47.2%、「1. 子育てに専念したい」が45.4%などとなっている。5歳児全体では「1. 子育てに専念したい」と回答した割合が55.4%と最も高く、次いで「4. 家事・育児が負担」が26.8%となっている。

経済状況でみると、1歳児、5歳児の困窮世帯では「3. 子どもの預け先がない」などの回答がみられる。

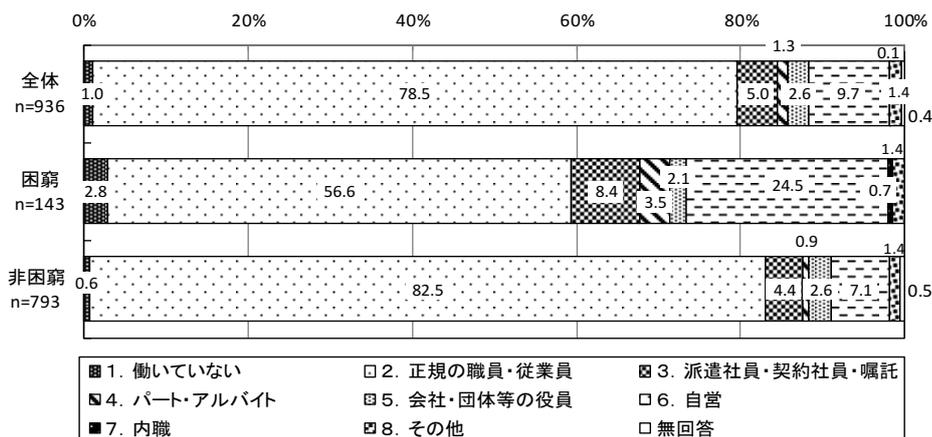


## ②父親の働き方について

### ○父親の就労状況 <未就学児保護者：問7>

父親の就労状況をみると、「1. 働いていない」と回答した割合は全体で1.0%（9件）にとどまっている。雇用形態をみると、8割弱（78.5%）が「2. 正規の職員・従業員」と回答しており、次いで「6. 自営」が9.7%、「3. 派遣社員・契約社員・嘱託」が5.0%と続いている。

経済状況でみると、生活困窮世帯は「2. 正規の職員・従業員」（56.6%）と回答した割合が非困窮世帯（82.5%）と比べて低く、「6. 自営」（24.5%）と回答した割合は非困窮世帯（7.1%）よりも高い傾向にある。



### ○父親の週平均労働日数と労働時間 <未就学児保護者：問7-2①・問7-2②>

父親の一週間の平均的な労働日数をみると、全体の5割強（53.1%）が週に「5日」働いており、次いで「6日」が40.5%と続いている。週6日以上働く父親の割合が全体で43.6%を占めている。

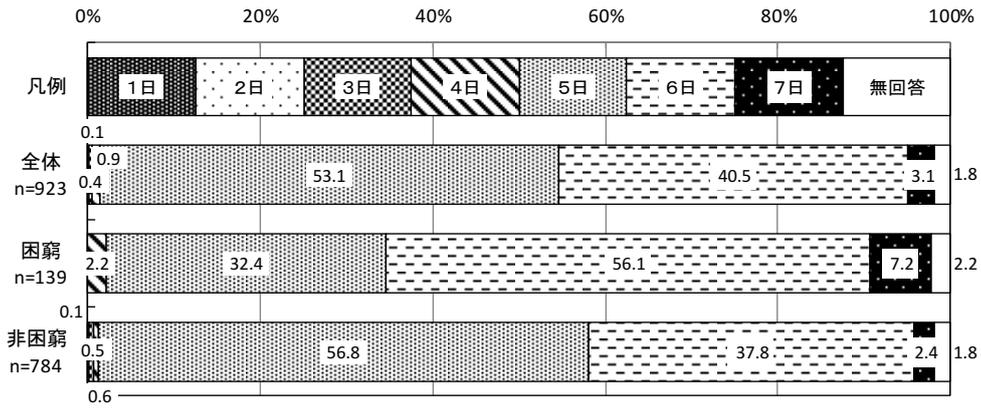
経済状況でみると、非困窮世帯では週5日（週休2日）働く割合は6割弱（56.8%）となっているものの、困窮世帯では3割強（32.4%）にとどまっている。一方、週6日以上働く割合は困窮世帯で63.3%と非困窮世帯（40.2%）よりも高い状況となっている。

父親の1週間の平均労働時間（平均的な労働日数×働いている日の平均的な労働時間）をみると、全体では1歳児で『40～50時間未満』が最も多く38.1%で、次いで『50～60時間未満』（29.4%）、『60時間以上』（25.3%）となっている。5歳児では、『50～60時間未満』が最も多く36.2%で、次いで『40～50時間未満』が33.3%となっている。

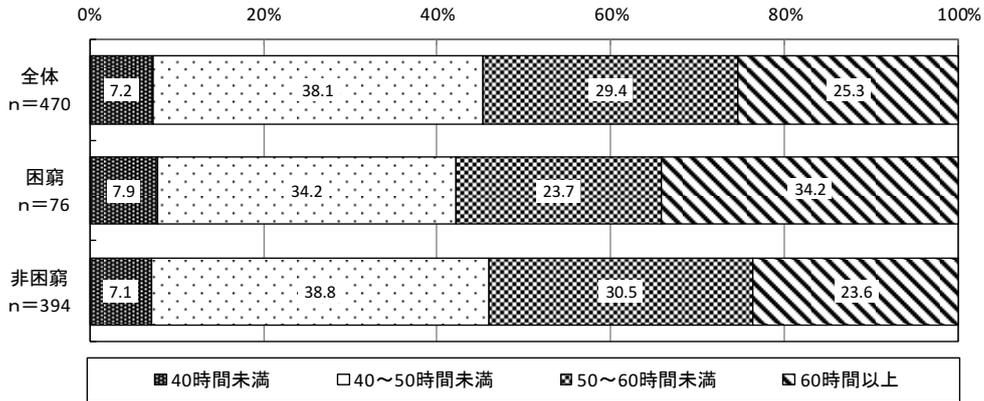
『50時間以上』働く父親が1歳児で54.7%、5歳児で60.2%と半数を超えている。さらに『週60時間以上』働く父親が1歳児で25.3%、5歳児では24.0%と概ね4分の1を占めている。

経済状況をみると、『60時間以上』の長時間労働の割合は、1歳児の困窮世帯で34.2%とやや高くなっている。5歳児では『40～50時間未満』が非困窮世帯で35.4%なのに対し、困窮世帯では19.7%と割合が低く、5歳児の困窮世帯では長時間、労働に従事する父親の割合が高くなっている。

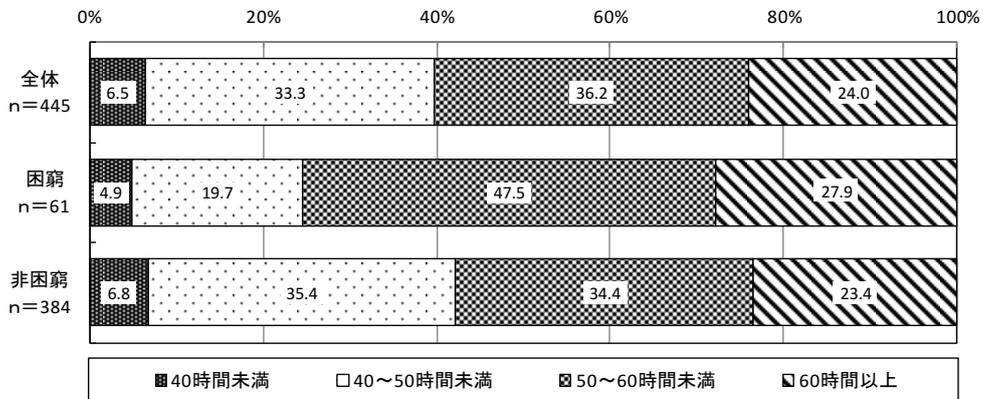
一週間の平均的な労働日数×経済状況



父親の就労時間(1歳児)×経済状況

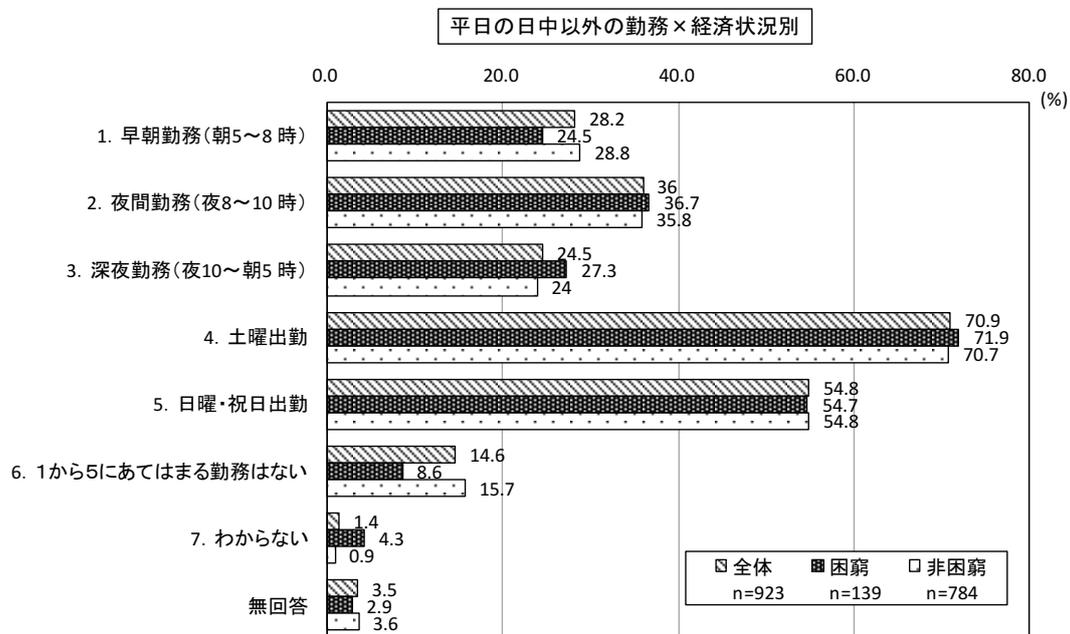


父親の就労時間(5歳児)×経済状況



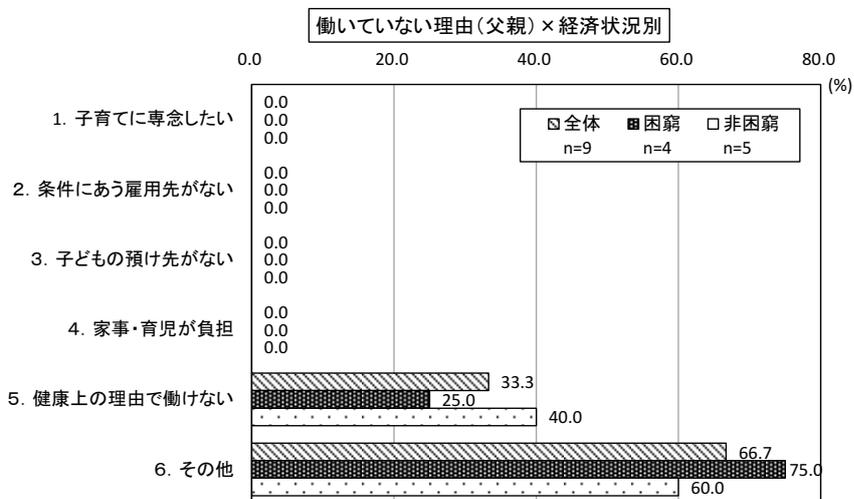
○父親の就労形態 <未就学児保護者：問7-2③>

父親の平日の日中以外の勤務を全体でみると「4. 土曜出勤」の割合が70.9%と高く、次いで「5. 日曜・祝日出勤」が54.8%、「2. 夜間勤務」が36.0%と続いている。早朝勤務、深夜勤務もそれぞれ2割台の回答がみられた。経済状況による大きな差はみられない。



○父親の就労状況—働いていない理由 <未就学児保護者：問7-1>

父親の「働いていない」理由については、「5. 健康上の理由で働けない」が3件、「6. その他」が6件となっている。  
 ※「働いていない」とする実数が少ないため、割合でなく、件数で表記。

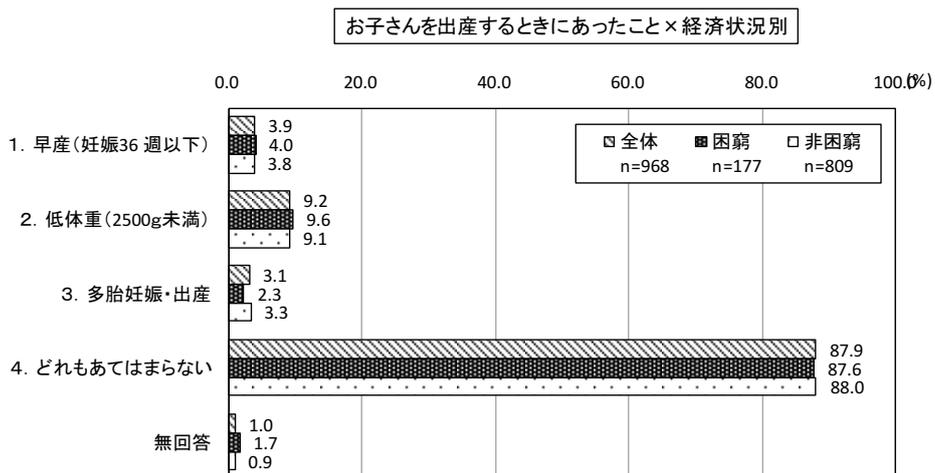


※グラフについては扱いに留意が必要

③妊娠・出産の際の状況・身近なサポートについて

○妊娠・出産期の状況 <未就学児保護者：問9・問11>

子どもの出産時の状況を尋ねたところ、早産や低体重について「4. どれもあてはまらない」が最も多く 87.9%となっている。次いで「2. 低体重 (2500g未満)」が 9.2%、「1. 早産」が 3.9%などと続いている。経済状況による大きな差はみられない。



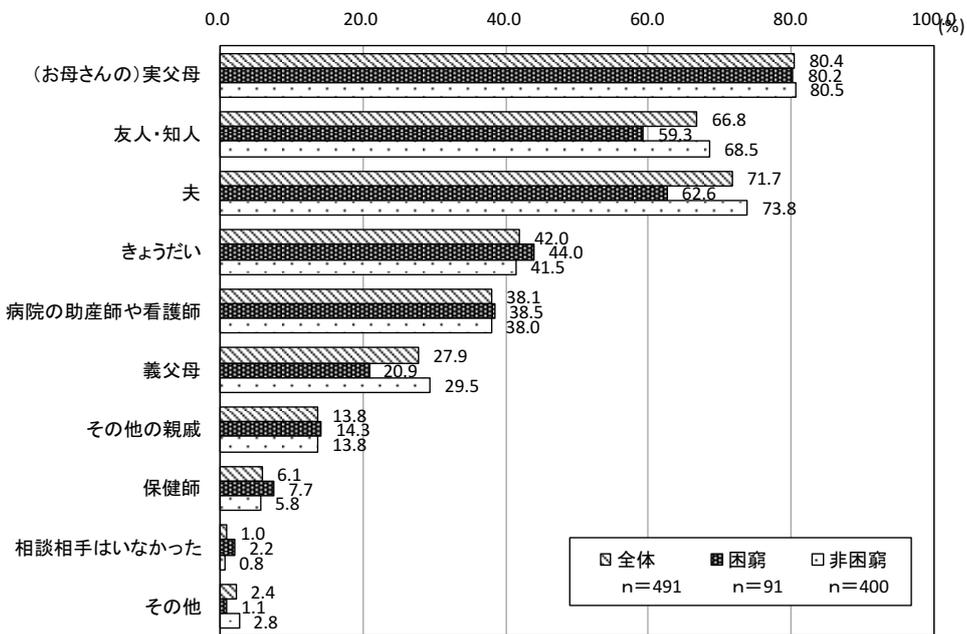
○妊娠期間中の相談相手 <未就学児保護者：問12>

妊娠期の相談相手について母親に尋ねたところ、1歳児では「実父母（子どもから見た祖父母）」が80.4%で最も高く、次いで「夫」が71.7%、「友人・知人」が66.8%と続く。「相談相手はいなかった」もわずかにみられた。

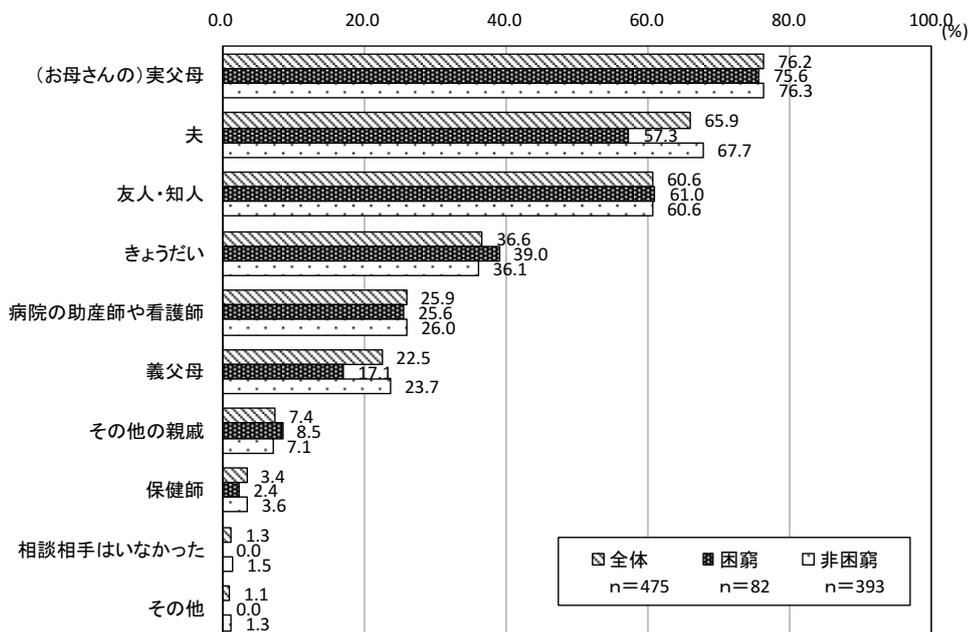
経済状況でみると、「友人知人」、「夫」、「義父母」で非困窮世帯の回答割合よりも9ポイントほど困窮世帯が低くなっており、関わりに差がみられる。

5歳児においては、相談相手の割合が少しずつ減少しており、「夫」と「義父母」について1歳児同様に困窮世帯で、関わりが弱い。

妊娠期間中の相談相手(1歳児)×経済状況別



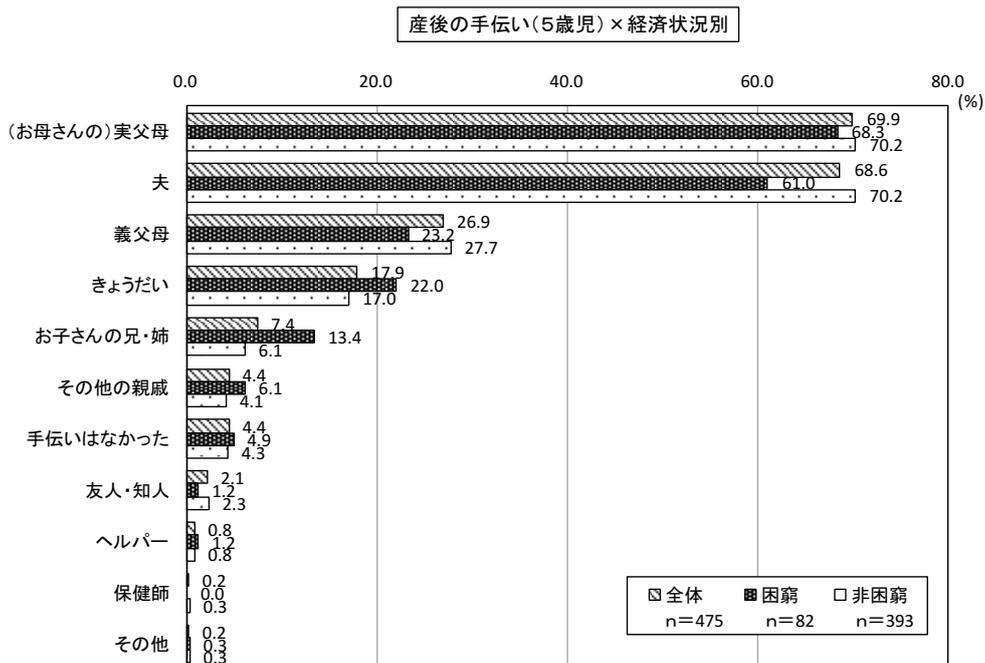
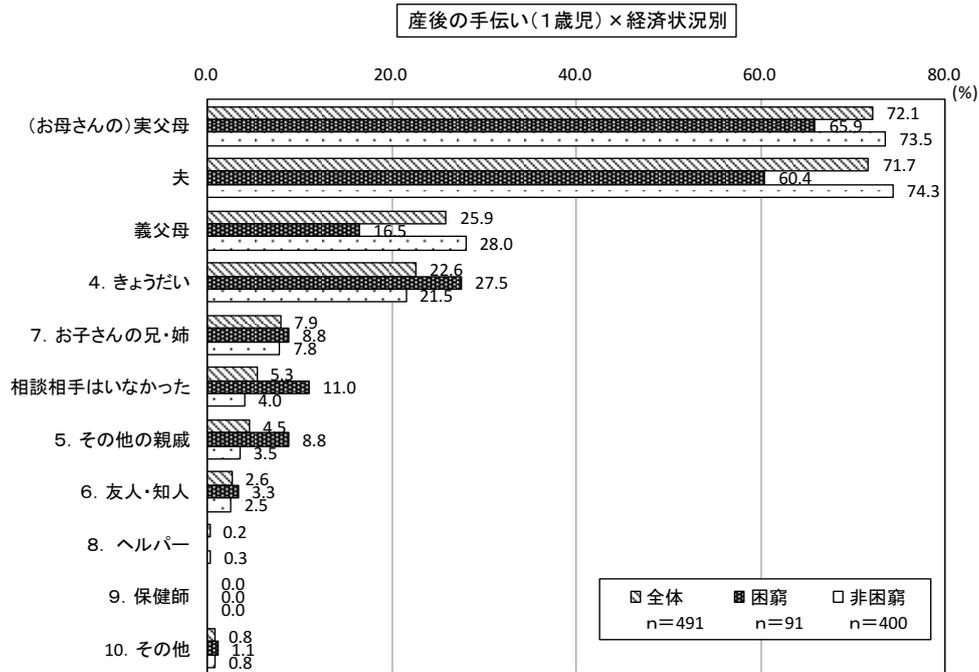
妊娠期間中の相談相手(5歳児)×経済状況別



○産後の手伝い <未就学児保護者：問13>

母親に対する産後の手伝いが得られたか尋ねると、1歳児の困窮世帯では、妊娠期の相談に比べ「実父母」の関わりが低下し、「産後の手伝いはなかった」も困窮世帯で1割程度みられる。「夫」についても非困窮世帯に比べ困窮世帯では約14ポイント下回り、関わりに差がみられる。

5歳児の「お子さんの兄姉」をみると非困窮世帯では6.1%なのに対し、困窮世帯では13.4%とやや高く、子どもが手伝いに関わっている様子がうかがえる。



④施設の利用状況・満足度等について

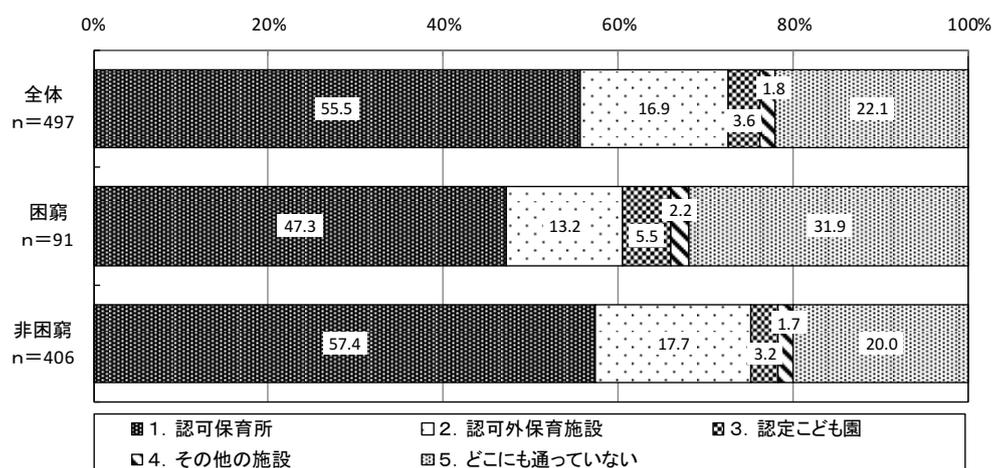
○施設の利用状況 <未就学児保護者：問14>

保育所・幼稚園などの施設利用についてみると、1歳児全体では77.8%が何らかの施設を利用しており、「7. どこにも通っていない」も2割強（22.1%）を占めている。利用施設は「1. 認可保育所」が55.5%と最も高く、次いで「2. 認可外保育施設」が16.9%などと続いている。

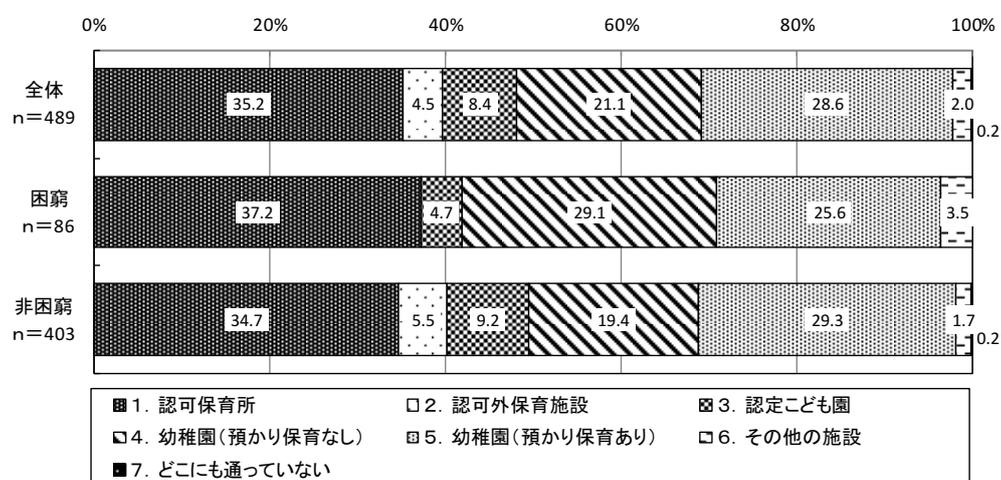
経済状況別にみると、非困窮世帯に比べ困窮世帯で「どこにも通っていない」と回答する割合が約12ポイント高い。

5歳児全体では、99.8%の世帯で何らかの施設を利用している。利用施設は「1. 認可保育所」が35.2%と最も高く、次いで「5. 幼稚園（預かり保育あり）」が28.6%、「4. 幼稚園（預かり保育なし）」（21.1%）、「3. 認定こども園」（8.4%）となっている。困窮世帯で「4. 幼稚園（預かり保育なし）」の利用割合が比較的高く、「2. 認可外保育施設」の利用はみられなかった。

施設の利用状況(1歳児)×経済状況



施設の利用状況(5歳児)×経済状況

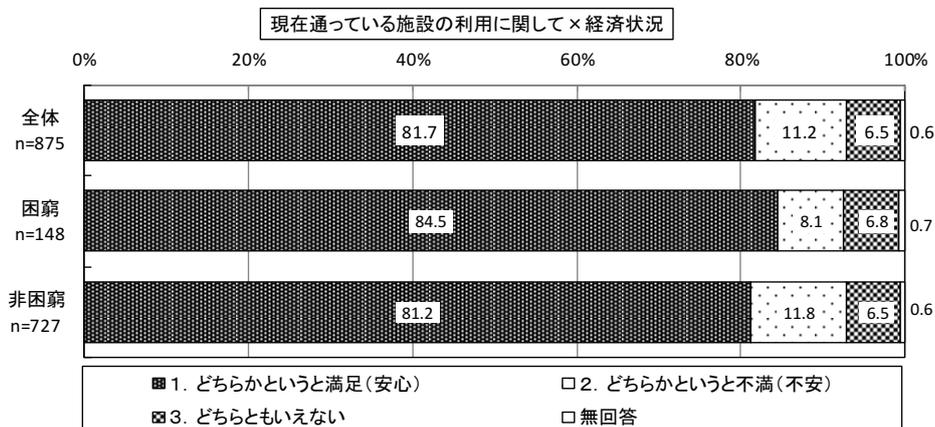
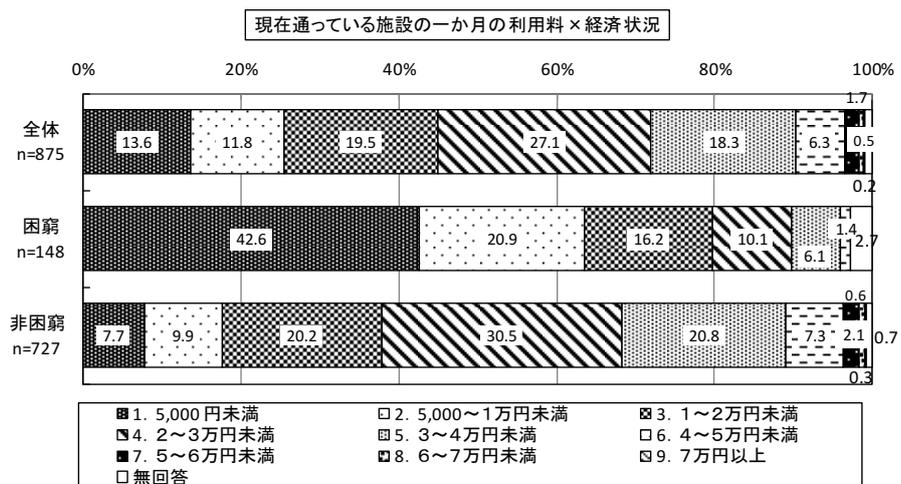


○施設の利用率・満足度 <未就学児保護者：問14-1①・問14-1②>

利用料についてみると、全体では「3. 1～2万円未満」と回答した割合が27.1%と最も高く、次いで「3. 1～2万円未満」(19.5%)、「5. 3～4万円未満」(18.3%)、「1. 5,000円未満」が13.6%などと続いている。

経済状況別にみると、困窮世帯では「1. 5,000円未満」が42.6%、非困窮世帯では「4. 2～3万円未満」が30.5%とそれぞれ最も高い割合となっている。

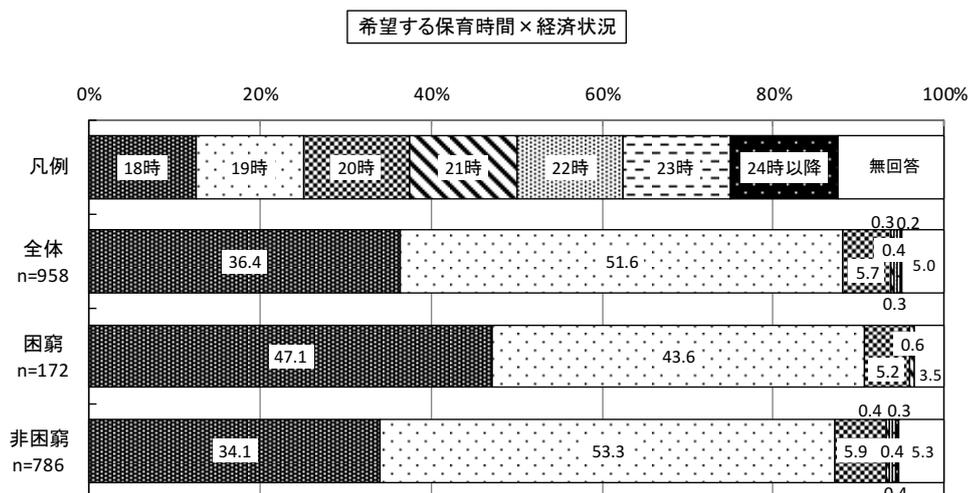
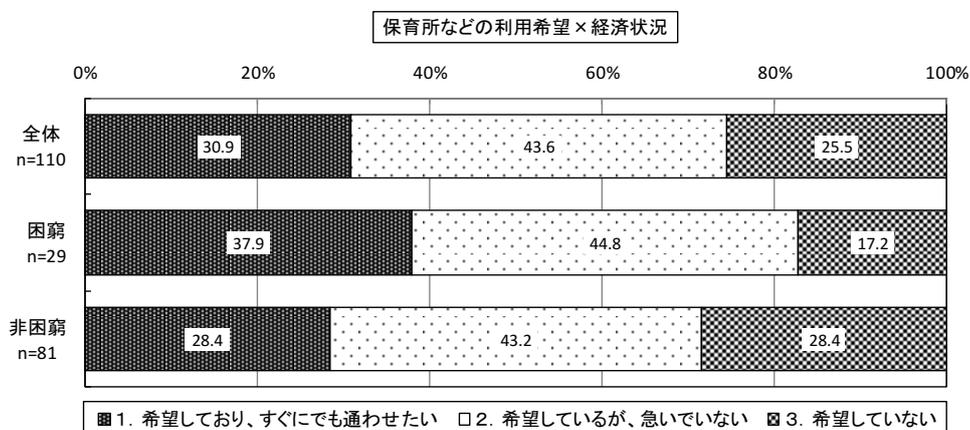
施設利用の満足度を尋ねたところ、全体で8割強(81.7%)が「どちらかという満足(安心)」と回答している。



○施設の利用希望 <未就学児保護者：問14-2・問15>

どこにも通っていない方の利用意向をみると、全体で「1. 希望しており、すぐにでも通わせたい」が30.9%となっている。また、「2. 希望しているが、急いでいない」が43.6%、「3. 希望していない」が25.5%となっている。

施設利用者と利用希望者に対し、保育時間について何時まで必要と考えているかを尋ねたところ、全体では「2. 19時」が51.6%と最も高く、次いで「1. 18時」が36.4%となっており、19時までで9割弱（88.0%）を占めている。20時以降は1割未満となっている。非困窮世帯では19時を希望する割合が高くなっている。なお、ごく僅かではあるが、21時以降の時間帯を希望する回答もみられ、「24時以降」という回答も0.2%みられた。



⑤就学に向けた準備について

○小学校入学に向けての準備 <未就学児保護者：問20>

5歳児保護者に小学校入学に向けての準備について、「A：学用品やランドセルの購入費用が不足しそう」か尋ねると、全体で「5. あてはまらない」が41.1%と最も高くなっている。「4. どちらかといえばあてはまらない」(13.3%)を加えると、『あてはまらない』と回答した割合は、54.4%となっている。

一方、『あてはまる』(「1. あてはまる」+「2. どちらかといえばあてはまる」)と回答した割合は、29.0%と一定程度の回答がみられる。

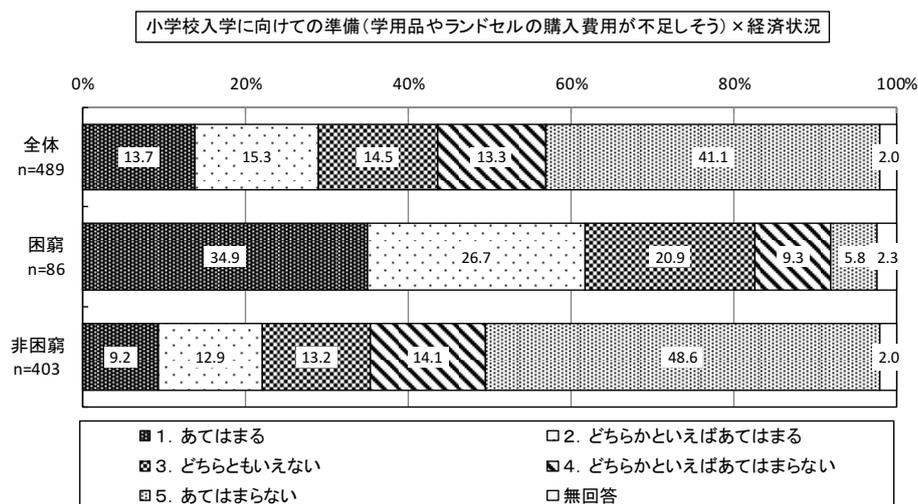
経済状況別にみると、困窮世帯で『あてはまる』(1+2)と回答している割合は61.6%を占めているのに対し、非困窮世帯では22.1%となっている。

「B：小学校での生活になじめるか心配」かどうか尋ねると、全体では49.1%が『あてはまる』と回答しており、『あてはまらない』(「4. どちらかといえばあてはまらない」+「5. あてはまらない」)は31.3%で、なじめるか不安に感じている方が多い。

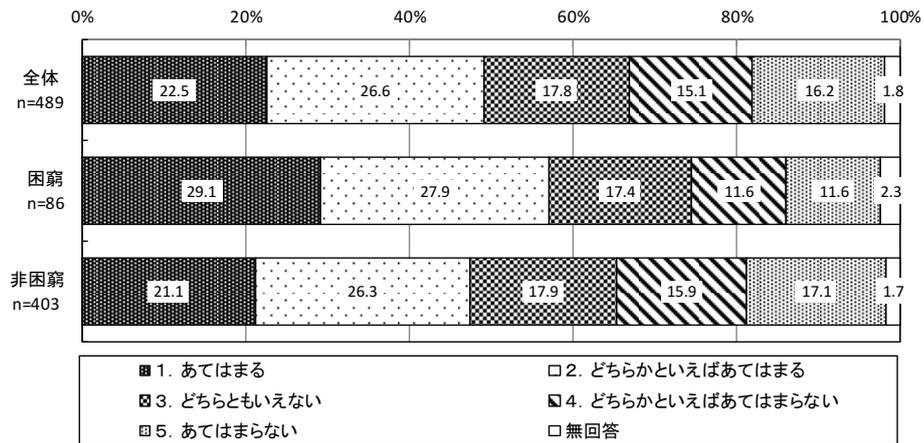
経済状況でみると、困窮世帯では『あてはまる』が57.0%を占め、非困窮世帯の47.4%をやや上回っている。困窮世帯では6割弱が小学校での生活になじめるか不安を抱えている。

「C：放課後過ごす場所に不安がある」かどうか尋ねると、全体では60.1%が『あてはまる』と回答している。一方、『あてはまらない』は26.2%で、放課後の居場所について不安と感じている方のほうが多い。

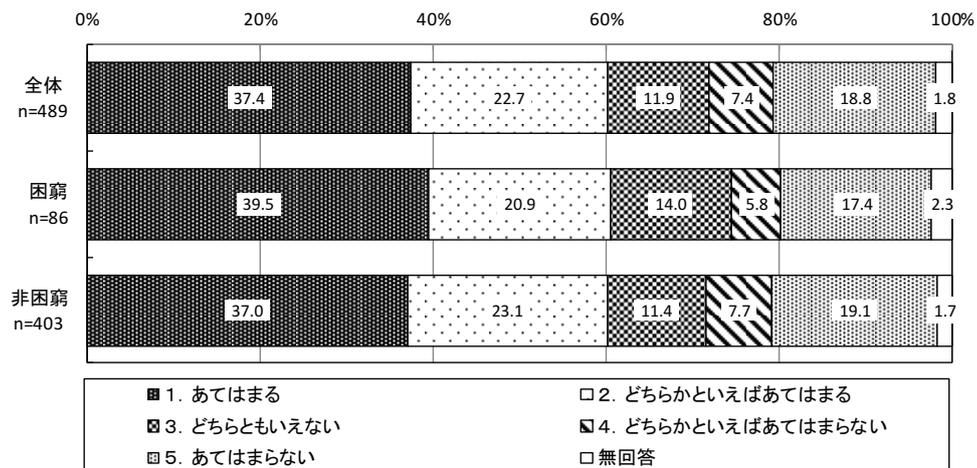
経済状況では大きな差はみられない。



小学校入学に向けての準備(小学校での生活になじめるか心配)×経済状況



小学校入学に向けての準備(放課後過ごす場所に不安がある)×経済状況



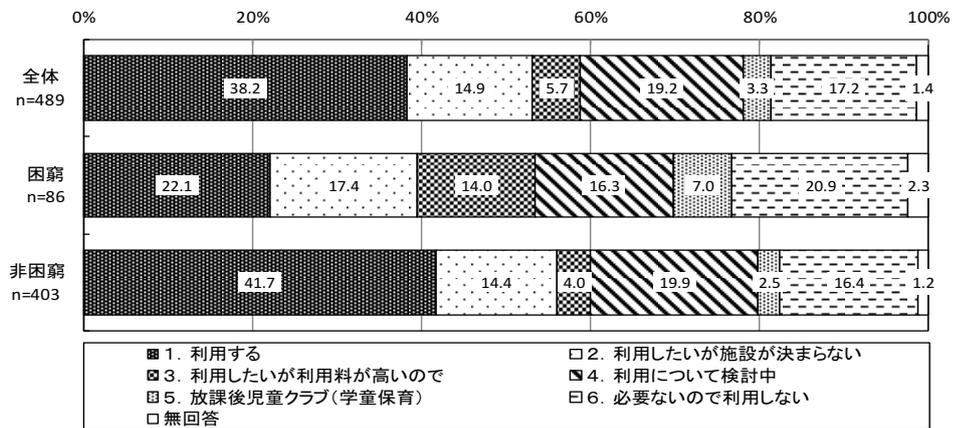
○放課後児童クラブの利用について <未就学児保護者：問21・問21-1>

5歳児の保護者に対し、放課後児童クラブ（学童保育）の利用予定を尋ねたところ、全体で「1. 利用する予定である」が38.2%と最も高く、次いで「4. 利用について検討中」が19.2%となっている。この2項目に「2. 利用したいが施設が決まらない」(14.9%)を合わせると72.3%が利用予定となっている。

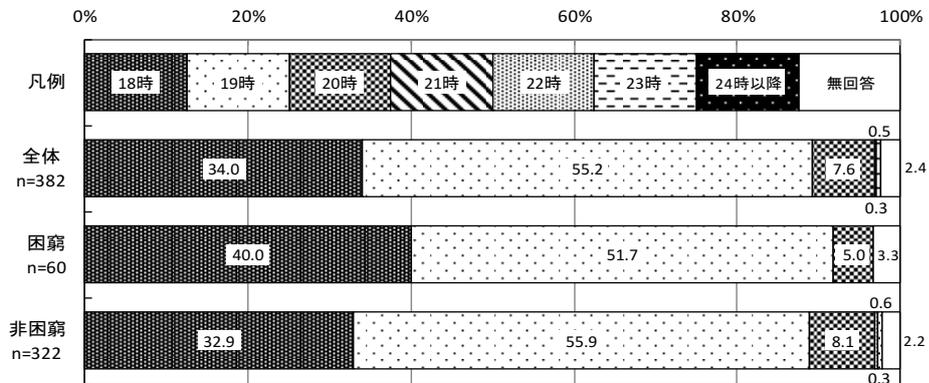
これを経済状況別にみると、困窮世帯では「1. 利用する」と回答している割合が非困窮世帯よりも低くなっている。「3. 利用したいが利用料が高いので利用できない」をみると、非困窮世帯よりも困窮世帯の割合が高くなっている。

放課後児童クラブ（学童保育）の利用予定者に利用時間を尋ねたところ、全体で「2. 19時」が55.2%と最も高く、次いで「1. 18時」が34.0%、「3. 20時」が7.6%となっている。なお、21時以降のニーズも僅かにみられ、割合は少ないものの「23時」まで必要とする回答も0.5%みられた。

放課後児童クラブ(学童保育)の利用について(5歳児)×経済状況



放課後児童クラブの利用時間×経済状況



⑥保護者とのかかわり・子育てサークル等の利用について

○保護者とのかかわり <未就学児保護者：問17>

<母親>

平日と休日の子どもと遊ぶ頻度を尋ねたところ、1歳児の母親の場合、平日に「1. よく遊ぶ」が70.0%と最も高く、次いで「2. 時々遊ぶ」が28.4%となっている。「まったく遊ばない」は0.8%とわずかであった。休日は「1. よく遊ぶ」が85.3%と大半を占め、平日よりも15ポイントほど増えている。

5歳児の母親の場合、平日に「2. ときどき遊ぶ」が55.0%で最も高く、次いで「1. よく遊ぶ」が35.8%となっている。5歳児になると平日の「よく遊ぶ」が1歳児に比べ約半数に減少し、「3. まったく遊ばない」も7.0%となっている。

休日は「1. よく遊ぶ」が65.4%となっており、平日よりも30ポイントほど増加している。休日についても1歳児に比べ「よく遊ぶ」割合が少なくなっている。

<父親>

1歳児の父親の場合、平日は「2. ときどき遊ぶ」が最も高く53.7%、次いで「1. よく遊ぶ」が36.2%、「3. まったく遊ばない」が4.8%となっている。休日は「1. よく遊ぶ」が74.2%で大半を占め、平日の約2倍の割合となっている。

経済状況でみると、「1. よく遊ぶ」は困窮世帯で非困窮世帯よりも割合が低く、平日で約13ポイント、休日で約20ポイント少ない。

また、母親に比べ平日の子どもとの関わりが少ない状況がうかがえる。

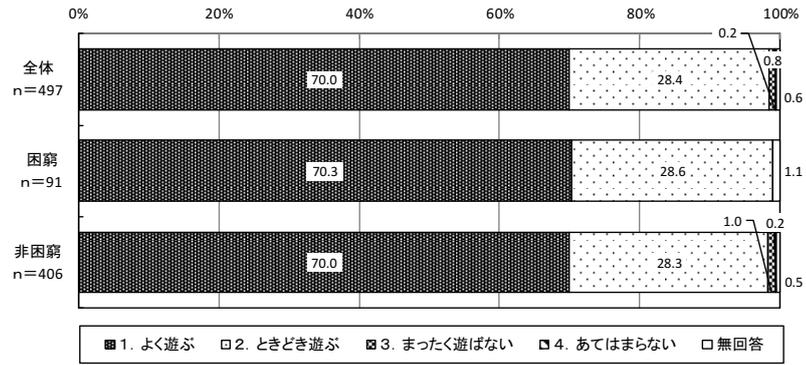
5歳児の父親の場合、平日に「2. ときどき遊ぶ」が56.6%で最も高く、次いで「2. ときどき遊ぶ」が55.0%、「3. まったく遊ばない」は7.0%となっている。5歳児になると平日の「よく遊ぶ」と回答した割合が1歳児に比べ約16ポイント低く、「3. まったく遊ばない」も13.5%となっている。

休日は「1. よく遊ぶ」が58.5%となっており、平日よりも38ポイントほど増加している。経済状況別をみても、それぞれの世帯で平日よりも「よく遊ぶ」割合が増加している。

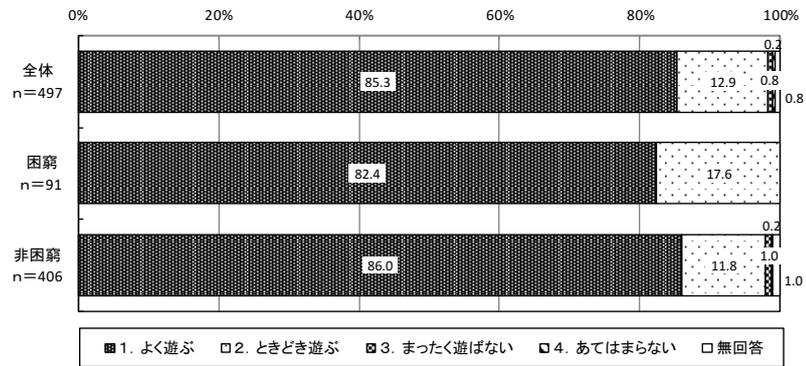
1歳児に比べ休日についても「よく遊ぶ」割合が少なくなっている。

経済状況でみると、困窮世帯の父親については平日、休日ともに「よく遊ぶ」割合が非困窮世帯に比べ低くなっている。

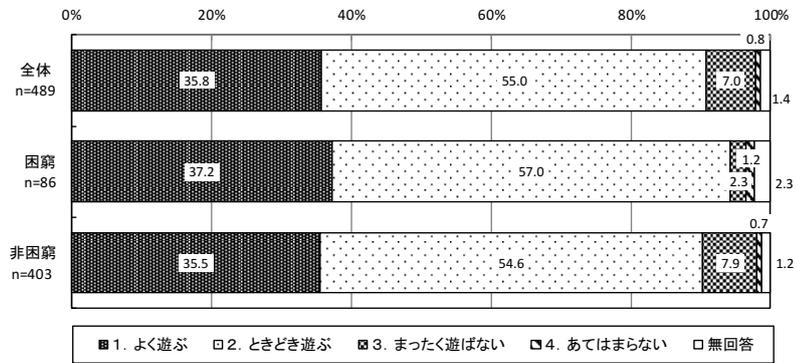
保護者とのかわり(平日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (1歳児:母親)×経済状況



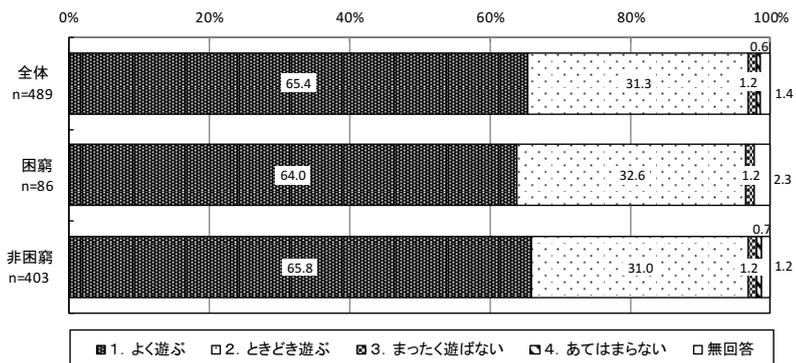
保護者とのかわり(休日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (1歳児:母親)×経済状況



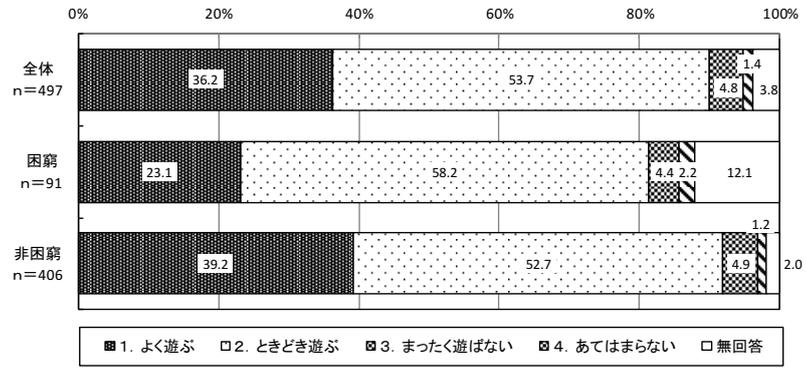
保護者とのかわり(平日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (5歳児:母親)×経済状況



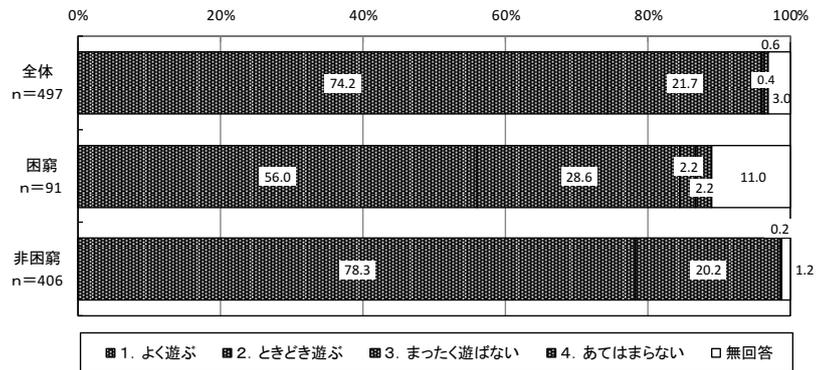
保護者とのかわり(休日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (5歳児:母親)×経済状況



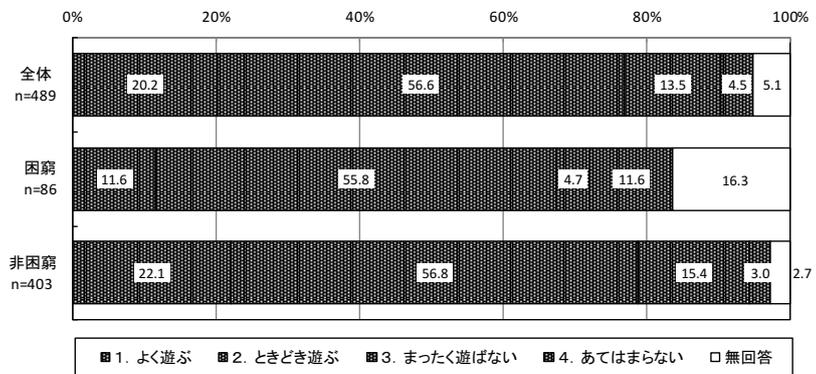
保護者とのかかわり(平日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (1歳児:父親)×経済状況



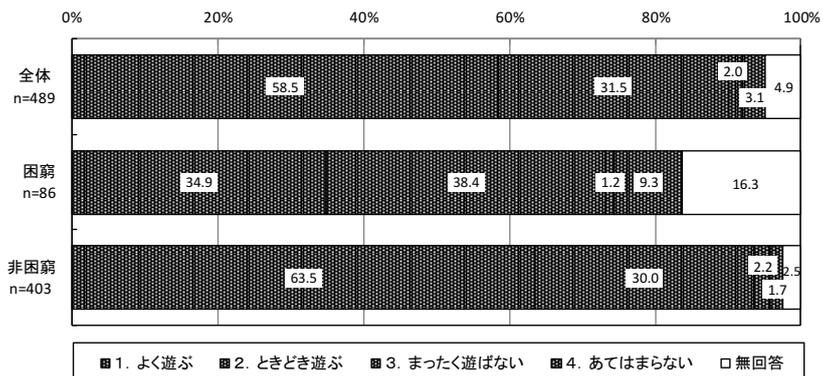
保護者とのかかわり(休日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (1歳児:父親)×経済状況



保護者とのかかわり(平日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (5歳児:父親)×経済状況



保護者とのかかわり(休日、保護者や家族とどれくらい遊ぶ (5歳児:父親)×経済状況



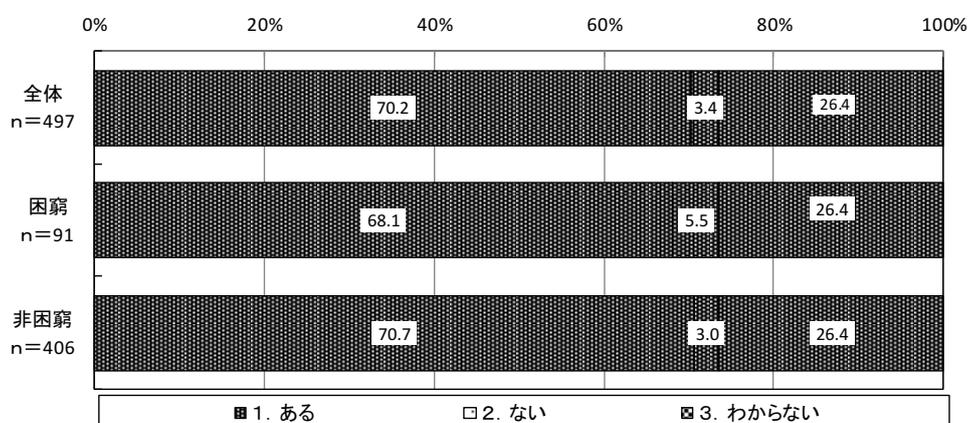
○子育てサークル等の利用 <未就学児保護者：問18・問18-1・問18-2>

自宅近くに子育てサークルや子育てひろばなどが「ある」と答えた方に参加のしやすさを尋ねたところ、38.0%が「1. 参加しやすい」と回答しており、一方、「2. 参加しにくい」は12.1%となっている。全体の約半数（49.3%）は「3. 参加したことがない」と回答している。

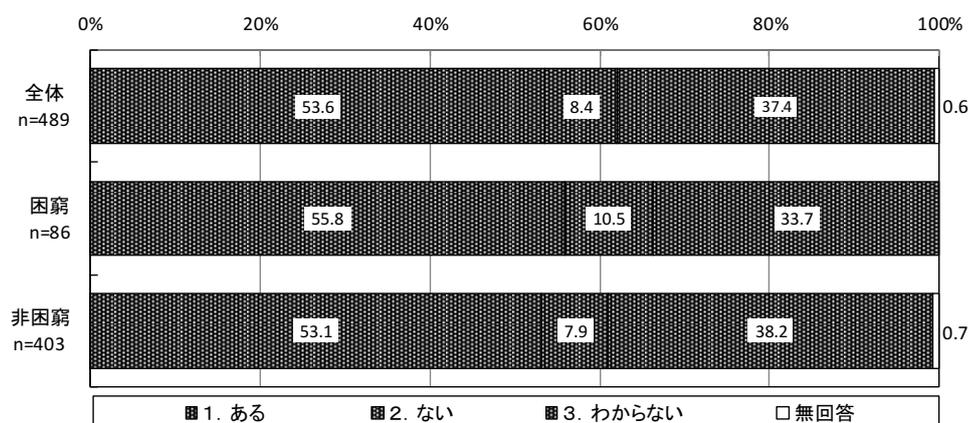
理由をみると、全体では「1. 時間がない」が52.8%と最も高く、次いで「6. 必要がない」が36.7%などと続いている。さらに「4. ほかの親子との関わりが面倒」というものも21.1%みられた。

「時間がない」については非困窮世帯で、「関わりが面倒」については困窮世帯でやや高くなっている。

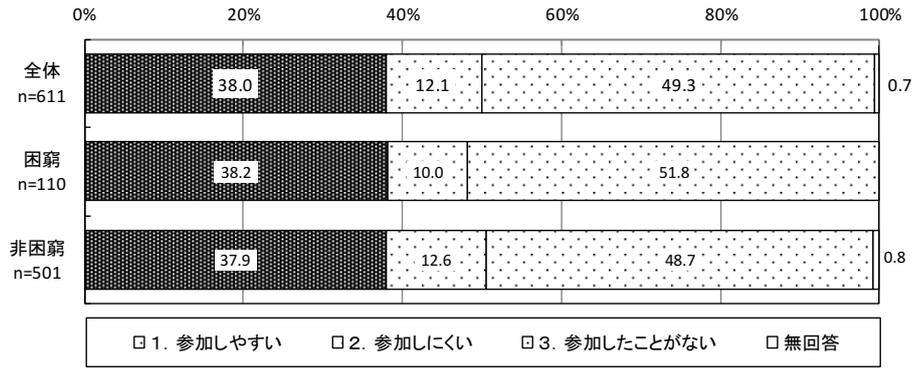
子育てサークル等の利用状況(1歳児)×経済状況



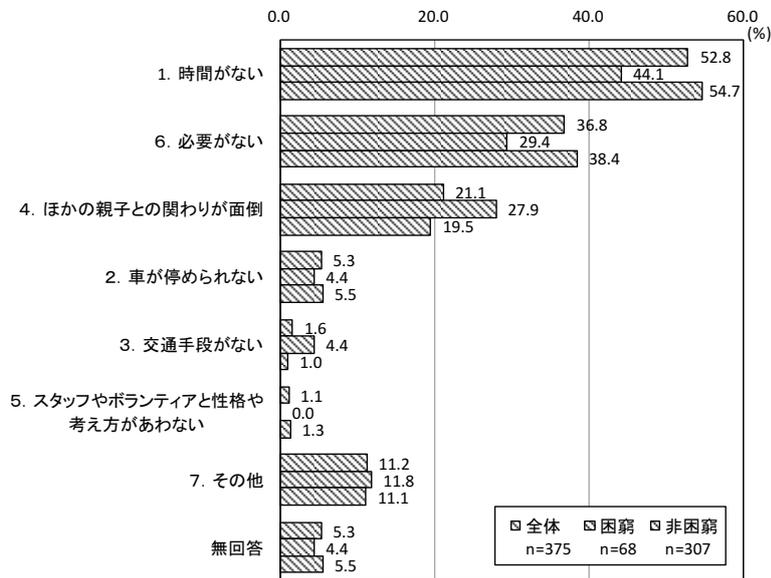
子育てサークル等の利用状況(5歳児)×経済状況



子育てサークルや子育て広場等は、参加しやすい×経済状況



参加しにくい・参加したことがない理由×経済状況別



## ⑦保護者の抑うつ傾向について

### OK 6 指標による抑うつ傾向の分析 <未就学児保護者：問 25>

本調査では、沖縄県調査に順じ、K 6 という指標を活用して抑うつ傾向を見ている。(欄外注釈参照。)

それぞれの基準点以上にある保護者の割合をみると、1 歳児で全体をみると16.4%が「心理的ストレス反応相当」に、12.8%が「気分・不安障害相当」(9点以上)、11.0%が「気分・不安障害相当」(10点以上)、5.7%が「重症精神障害相当」(13点以上)という結果になっている。

5 歳児全体では、「心理的ストレス反応相当」が16.0%、「気分・不安障害相当」(9点以上)が13.3%、「気分・不安障害相当」(10点以上)が10.4%、「重症精神障害相当」(13点以上)が4.6%となっている。

経済状況による抑うつ傾向をみると、1 歳児、5 歳児の困窮世帯でほとんどの項目でやや高い割合を示している。1 歳児の困窮世帯では「気分・不安障害相当」(10点以上)や「重症精神障害相当」(13点以上)でやや高く、精神的な問題がより重い可能性がある。

世帯別(ふたり親、ひとり親)でみると大きな差異は見られない。

#### ※K 6 指標について：県調査より引用

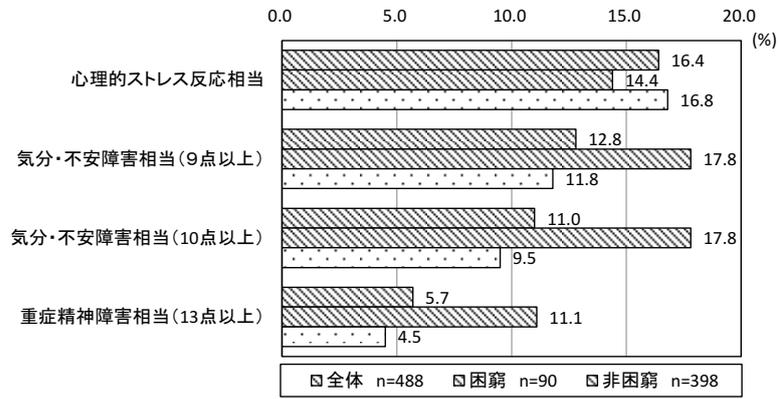
ここでは、K6という国民生活基礎調査でも用いられている、一般の方の抑うつ傾向を測定する代表的な指標のひとつで、指標を活用して保護者の抑うつ傾向を把握していくこととする。

K6は、過去30日間での心の状況を6つの質問で尋ね、それぞれ5段階での選択肢の点数の合計点を算出する(ひとつの質問ごとに0点から4点。合計は0点から24点になる。高くなるほど抑うつ状態が強いことを示す。なお、ひとつの質問でも無回答の場合は分析から外している)

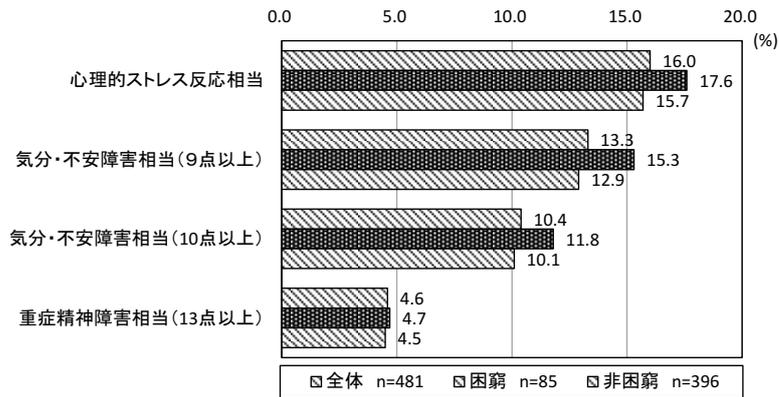
5点以上を「心理的ストレス反応相当」、9点および10点以上を「気分・不安障害相当」、13点以上を「重症精神障害相当」(社会機能障害がおきる気分・不安・物質使用障害相当)が一般集団に対する基準点として提示されている(ただし、「それぞれの基準点につけられた呼び方は、その得点を超えると回答者がその状態にあることを必ずしも意味していない」(川上・高野(2015))とされ、一般的な傾向と考えるべきであろう)。

なお、この分析における「保護者」(調査票の回答者)には母親が多いことも留意する。

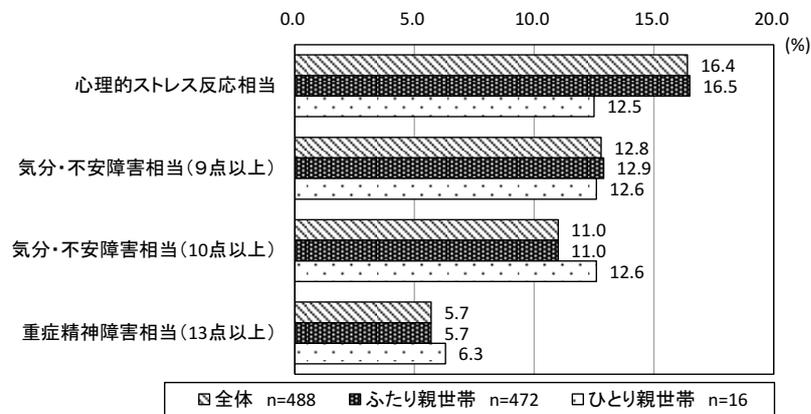
保護者の抑うつ傾向(1歳児)×経済状況別



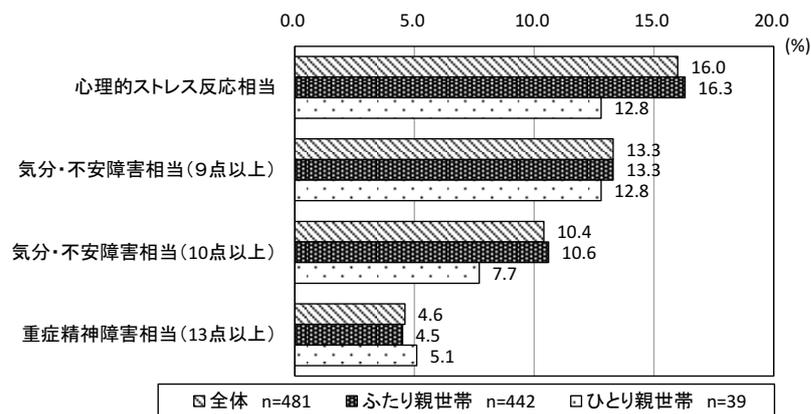
保護者の抑うつ傾向(5歳児)×経済状況別



保護者の抑うつ傾向(1歳児)×世帯類型別



保護者の抑うつ傾向(5歳児)×世帯類型別



⑧初めて親になった年齢について

○母親・父親がそれぞれ初めて親になった年齢 <未就学児保護者：問33>

保護者が「初めて親になった年齢」を尋ねると、所得が低くなるにつれて、「10代」「20～24歳」の割合が増える傾向がみられた。

困窮世帯の母親では、「10代」「20～24歳」を合わせると43.5%を占めており、困窮世帯の父親についても「10代」「20～24歳」を合わせると29.9%を占めているなど、保護者が若い場合に困窮の割合が高い傾向がみられる。

